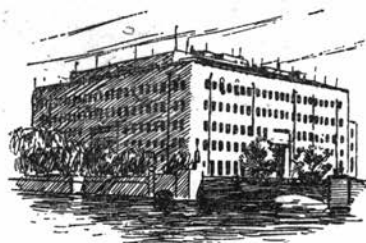


山 岳



LI

堅
実
経
営



創 業 明 治 28 年



住友銀行

本 店 大 阪 市 東 区 北 浜 五 丁 目



いちばん有利な貯蓄・・

貸付信託



住友信託銀行



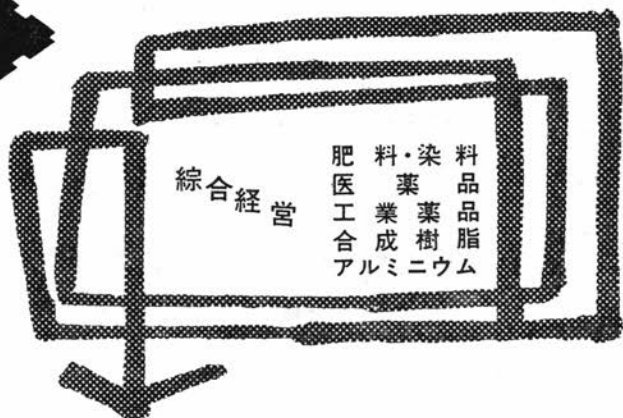
資 本 金

(100 億 円)

住友金属工業株式会社

社 長 広 田 寿 一

本 社 大 阪 市 東 区 瓦 町 四 丁 目 三 十 一 番 地
支 社 東 京 都 千 代 田 区 丸 ノ 内 (新 丸 ビ ル)

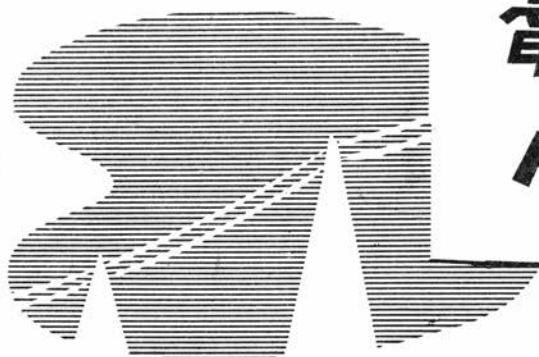


綜 合 經 営

肥 料 ・ 染 料
医 藥 品
工 業 樹 脂
合 成
ア ル ミ ニ ウ ム

住友化学

本 社 ・ 大 阪 市 東 区 北 浜 5 丁 目 2 2 番 地
支 社 ・ 東 京 都 中 央 区 京 橋 1 丁 目 1 番 地



電線・ ケーブル

住友電気工業株式会社

大阪・東京・名古屋・伊丹・福岡



貿易並 国内販売

住友商事株式会社

本	店	大阪市東区北浜五ノ二二
支	社	東京都中央区日本橋通一ノ二
支	店	名古屋、札幌、福岡、神戸
出張	所	全国各地

山

岳

第五十一年

山 岳 第五十一年 目 次 (一九五六年度)

マナスルの印象..... 榎 有 恒.....一

タルタランの死..... ギ
ド・レ
日高信六郎 訳.....九

ネパール紀行(一九五五年)..... 成 瀬 岩 雄..... 四

日本山岳会五十年史..... 沼 井 鉄 太 郎..... 五

追 悼

関口泰氏を想う..... 島 田 巽.....一〇三

伊藤愿さんの思い出..... 田 口 二 郎.....一〇八

会 務 報 告..... 二七

日本山岳会定款..... 三三

日本山岳会支部規定..... 三九

写 真

マナスルの夕焼..... (日下 田 寒)..... 巻頭

登頂を終えて..... (日下 田 寒)..... 巻頭

関口 泰 氏..... 一〇三

伊藤 愿 氏..... 一〇七



ワナスルの夕焼、第二キヤンゾより望む 日下田実



五月九日、第五キヤンツに帰つてくる第一登頂隊員（今西、カ
ルツエンを迎える村木、ペンバ・ズンダ） 日下田実

マナスルの印象

楨 有 恒

山登りの楽しみの一であるひとつの山になじむということは、その山に年季を入れたことであつて、その山に十分な納得を持つていることにちがいない。つまり他所者でないのである。ところがエクスペディションとなると、大分様子が變つてくる。目指す山に対して、なじみが浅いか、まったくの他所者なのである。なじみの山では、ふるさとの思いもするであろうし、安息の深い呼吸もするであろう。長いあいだ、あこがれ求めておつたヒマラヤにその夢想の思慕の憩いを見出すようになるのは何時のことであろうか。山路のさすらいというには、あまりにも大掛りでもあり、また確たる目的を持つてもいるのである。こんどのマナスル登山で私は、私なりに当初から、このことを、はつきりと自分にいいきかせておいた。その山に他所者である自分が、期待されもし、また自ら期待もする登頂という目的のために行う山登りなのである。このような行き方が山登りのすべてであるとは思わないが、ヒマラヤ登山の現段階は、このように思われる。それは経験の浅い私たちの登山隊にとつてのみならず、どの国の登山隊の立場も同じ

であるように見受けられる。それは未踏の山頂の呼ぶ魅力でもあろうか。

この形のうえに現われた大掛りというのは、目的の山の位置と、そのスケールから割り出された最小限なのである。当然、必要の最小限を誤算なきようにするためには、科学的であり合理的な基礎の上に立つものである。この科学的な計画や準備のうえに立つということは、出発点に過ぎない。殊に七〇〇メートル以上に使うために用意した酸素補給器とか発生器のたぐいから、特殊な装備やテントなども、その必要に応じてのものであつて、この高所では当然の考慮である。この出発点の基礎の上に立つて実際の行動にかゝる時に、隊員の力量とか心がまえの問題がある。どのように完全に近い準備をもつていても、結局は仲間同士の旅であり登山である。それぞれの個性と感情の融和と結合とが重視されるのは、もつともなことである。私たちの隊はこのチームワークについては、まことに申分のないものであつた。それにヒマラヤ登山の経験者が大部分であり、しかもみな知り合つた仲間であることの強味があつた。また隊員の年齢の幅であるが、私は二十代から四十代までの間に広い幅を認めてよいと思う。もつともこの幅を越えた場合も考えられるのであるが、この年齢層の組合せがよいのではないかと思われる。

隊員の年齢に関して一応考慮に入れなければならないのは戦時を通して、外国に出かける機会に恵れなかつたわが国の事情を、今後も暫くの間は考慮の中に入れなければならないと思う。というのは、目的の山に直接に行き着くものでなく、その前に雑多な外国官庁との間の手続や輸送の事務があることである。この折衝と処理を、短時日の間に手際よくしなければならぬ。こんなことは少し旅なればたいしたことではないのであるが、個数の多い荷物の取扱いや人との交渉も上手であることが望ましい。そのために年輩者も加わる方が好都合のことが多い。

同道したシェルパたちについては、私はまったく満足しているのみでなく、心からの賞讃も惜しまない。サーダーのガルツェン・ノルプは経験において不足のないのみならず、その人柄がよい。配下に対しての支配力もあり、ことの運びにもそつがなかつた。そのためにはいつでもガルツェンは率先躬行していた。また隊員に対する態度も穏和でよ

く隊の方針を守つた。他のシエルパたちも、かつて嫌々ながら動くという態度は一度も見ることがないのみならず何時も快活で元気で喜々としておつた。このよいシエルパたちを得たことは一にヘンダーソン夫人に負うところであつて、シエルパの選択については、東京出発前、約半年に亘つて同夫人と折衝を経たのであつた。その上、忘れることの出来ないよい忠言をカルカタで与えられたのであつた。それは隊員以外のものとの金銭物品の給貸与にはすべて受領書をとるがよいとの言葉である。私たちは、これを例外もなく実行したのであつた。このことは、カトマンズに入つてから政府筋から、外国隊の残したいろいろのいざこざを聞いたのであるが、大抵の場合は、支払に関するものである。私たちの隊は、受領書をとることの實行によつて、一つも未解決の問題を残さず済んだのは仕合せである。さすが多年に亘つてヒマラヤ登山を扱われた人であることの認識を深めると共に更めて尊敬と感謝に堪えない。

モンスーンの影響を大きく受けるネパール・ヒマラヤでの登山期について確定的なことはいいたいであらう。ポストモンスーンの状態を私は知らないが、五二年の踏査隊と、五年の先遣隊の経験から見ても、矢張りプレモンズーンを有利と見るに傾く。しかもプレモンズーンの場合、モンズーン到来前の時期が最も安定しているといわれている。それには違いないが、モンズーンは大体六月初旬に来ることになっているもの、決して定期的なものではないので、このモンズーン前の安定期も、実は頼り難いものとなる。私たちは、最も早くモンズーンの来た記録の五月十五日をもつて登頂を終る計画で進んだ。そのためにベース・キャンプに入る時期が第一次の時よりは早くなつたので、或は積雪が深くて難儀するのではないかとの意見もあつた。しかし第一に、山に入つてから時日の余裕を十分に持つことは、隊全体の気持ちに余裕を齎すと考えたこと、次に積雪のため行動に困難があつても、可能の時期を直ちに利用できると思つたこと、またこの積雪量のことは主として雪線下のことであつて、雪線上のことは、その時、その年の状態で大きく左右されると思う。このようなわけで五月十五日を目標にしたのであつた。昨年のモンズーンの発生は、第二次登頂を終えた五月十一日であつた。偶然ではあるが、時期を早めての計画が、私たちに仕合せしたので

ある。ヒマラヤでは天候が絶対の支配力をもつものであることはいまさら喋々を要しないことである。私たちのつかんだ好天気は、今後いつまでそうだとはいわゆる考えられることではなく、ヒマラヤ登山での天候の如何は、何時までも残る問題であろう。このたびは悪天候によつて行動を阻まれないことは、稀れで、新雪による歩行の困難はあつたにしても、これを取りあげていうほどのことではない。たゞ空氣の稀薄なことによつて、苦しみが加重することは当然である。唯一の宿泊所であり避難所でもあるテントは、各種のものを用意したが、何れもその目的に役立つた。殊に高所用のものは風力と防寒の点に考慮が払われ、そのテストも経たものだけに、何等欠点を見出さなかつた。たゞキャラバン中や、ベース・キャンプで使つたものは、出入口をチャックで開閉するように作つたものがあつたが、チャックの故障が一、二あつた。ベース・キャンプ以上のものは、チャックは使つていないので、この不自由はなかつた。其他の登山用具も、炊事用具燃料等も全般に亘つて好成績であつた。殊に肩からかけるアンザイレン用のバンドは、強度もテストも経たものであるだけ安心の上に、着脱に便利であつた。またジュラルミン製のしよいこは主として酸素補給器用として考案されたのであるが、荷背負いにも有効であつた。ベース・キャンプ以上の荷揚げには全面的に使用したのである。またしよいこの荷をしばつたゴム製バンドも、零下四〇度まで変質しない性質を持つものである。どの高さでも寒さのために不都合の起ることはなかつた。またベース・キャンプの食堂と炊事用にとストーブを持つていつたことは成功であつた。

食糧は米飯を中心に考えた。取扱いの便利なためにアルファ米を十分に用意したのであるが、これは成功であつた。献立は朝昼はだいたいチャパティに缶詰であるが、夕食は米飯であつた。準備のときに個人的嗜好も考慮されてはいるが、実際に当つては誰れも自分の好みを主張するものなどはない程に食物の組み合わせも調理もよかつた。それにベース・キャンプ以上では食糧は勿論燃料なども四〇人の六〇日分も用意したのであつたが、行程が順調に運ばれたために、多分の余裕を残したのであつた。食糧は荷物の総量の五五％は占めておつたと思うが、米飯が主たるため

に、分量も加わり、調理にも手数を要するという話は何時も聞くところであるが、平生の生活は、そう簡単に変えられるものでなく、登山に際して始終食物の不満足を続けることは、重量や手間の僅かばかりの犠牲とは引きかえにならないと思う。しかし昔アルバータに遠征したときは、カナダ人のクックによる、まったく洋風食物で終始して少しも差し支えなかつた例もあるので、米飯でなければならぬと固執するわけにもいかない。たゞ、シェルパたちにも私たちと同じ食物を与えたことは一方ならず喜ばれた。シェルパたちにとつても米飯は最も好むところなのである。

ベース・キャンプ以上で断えず注意を要することは雪崩の危険であつた。Aベース・キャンプから第一キャンプまでの間、B第一、第二キャンプの間、それからC第三と第四間のアイスフォール、D第四から第五へのルート間、E第五からのエプロン・ルート。この五つに分けた区域にそれぞれの雪崩の危険を包蔵していた。Aの場合は新雪の場合と雪崩みちの個所との注意でたりた。Bの場合はナイケ山側に一、二個所存在したが、これも横切るのに注意を払えば大体無難に通過出来る。Cのアイスフォールであるが、このアイスフォールは活動の鈍いものであるのが幸であつたが、こゝの通過は当初から心配をした地点である。ルートのつけ方も第一次登山の場合に通つたところと大差はないが、こゝの通過には慎重であつた。Dの場合はプラトリーに顔を出している氷河の断面が、何時崩れるか判らないことである。五月八日の午後、一回崩れたのを認めたがこの地点の通過は危険至極なものである。しかしどうしてもこの下を通らなければならないのである。Dの場合は新雪のときは殆ど登るわけにはゆくまい、またピナクル寄りに顔を出しているプラトリーの氷河の断面の崩れる危険もあるのである。通過に際してのルートのとり方や、その時の情勢判断は、各隊員とも適確なものであつた。

クレヴァスについては、はじめルート探索の隊が、標識旗を三〇メートル乃至五〇メートル間隔に立て、また特に注意を要するところは、近距離に数多く立てたので殆ど心配はない。それに第一以上の行動は必ずアンザイレンしているのので、クレヴァスの危険はそうないのである。

高所での強い風は抵抗し難い程度であるが、こんどの場合には、ノースコルに行つたときと五月初めに第五キャンプで加藤、村木両君があつた位のものであつた。両度の登頂隊も静穏な天候に恵まれておつたのである。烈風やそれ以上の風に対して服装やテントなども十分用意しておつたのであるが、極限にまで達するような使用の場合が無かつたのは幸福と申すより他ない。第四から第五、そしてプラトー以上は偏西風のなでところであるだけに、四、五月において一たん風が吹きつれば行動の自由を失うことは言を俟たない。

つぎに、高度馴化のことであるが、ベース・キャンプと第二との間でこれを行つた。この馴化の仕方は辰沼君の年来、この山についての研究から割り出されたものであつた。即ち一応、第二まで登り二、三日を過してベース・キャンプに下ることである。その前に荷揚げや登路探索のために、第一とベース・キャンプ間などの往復も繰り返して行われたのであるから、第二への荷揚げ終了と共に行つた全員第二とベース・キャンプとの往復は、いわばそれまでに次第に高度に馴らして来た身体に、仕上げを加えたようなものである。四月初めから始めた第二までの六屯の荷揚げは同十六日には殆ど終了したのであるが、たえまなく上下したこの荷揚げが隊員、シェルパ及びチベット人ポーターの高度馴化を進めたのであつた。

しかし、高度に対する強さは個人差のあることはいうまでもないことであるが、よく日本人の体力は欧米人に比べて劣るのではないかという話を耳にするのであるが、シェルパが強いように、隊員も強く、いつもシェルパたちのよきリーダーとして、より強靱な行動をしておつたのである。

日本山岳会がマナスル登山にとりかかつてから五年になるのであるが、踏査隊に六名、第一次登山隊に一五名、第二次登山隊に一四名、サマ問題折衝に二名、先遣隊三名、第三次登山隊一二名。この五〇余名の人々がマナスルを通してヒマラヤを知つたのである。即ちどのように食糧、装備を用意することから、シェルパの力量、ポーターの扱いなどに至るまでの経験を豊富にもつことができたのであつた。また資金面についても、援助の強い力を痛感し

たのであつた。これらの経験は今後のヒマラヤ登山にとつて、貴重であるのはもとより、これを生かして、中絶することなく進歩の段階に役立たせたい。わが国登山界が、今日まで歩んで来た道の基盤の強さに対して自信を強めると同時に、今後の発展に期するところもまた大きいのである。

私はこんどのマナスル登山で、ヒマラヤの大きさの印象はどの位であろうかと、いろいろと想像していった。おおよそ、アルプスの二倍の高さと、それに伴つた裾の大きな張りがあるかと考えていた。そしてカルカッタからカトマンズへ向う飛行機から眺めたネパール・ヒマラヤの景観は、東西に続く雪嶺の大山脈の見事な姿ではあつたが、遠望のために、高さも大きさも実感は伴わなかつた。

カトマンズの飛行場で図らずも鋭い雪の峯が前山の後に雲の間から、空高く聳えているのを瞥見したときは、これは容易ならぬ姿だと思つた。自分の立つてゐるところが亜熱帯であるのに、一足飛びに氷雪のいたゞきが輝いたのであつた。キャラバン中に眺めたガネッシュ・ヒマールやアンナプルナの連峯も雪に輝く姿をまざまざと示していたが、距離を考えてようやくその大きさを納得したのであつた。そしてローで始めてマナスルを眺め、雪煙の立つ山頂を、ともに眺めたのであつたが、あのいたゞきに順調に進んでも一ヶ月以上もかゝるスケールのものだとは、どうしても的確につかめない。ベース・キャンプに入つてしまうと、プラトールとピナクルとが空との一線を劃しているのを毎日仰いでいたのであるが、全容を眼前に眺めていてもなかなか大きさがつかめない。登山を終つてビムタコーチから眺めたマナスルの西側の絶壁の大きさを見て始めて、或る程度の高さとか大きさとの概念がはつきりして来た。そしてポカラから飛行機でカトマンズへ帰つたのであつたが、三〇〇〇メートル級の山波の上を更らに昇つて、高度四〇〇〇メートル位で飛んだのであつた。そのとき機上から北方に、七〇〇〇メートル級の山々が雲の上にさらに高く高く聳えているのを望見した。私はこの景観を見て始めてヒマラヤの高さと大きさとに打たれたのであつた。

帰国後若い山好きに一体マナスルの大きさの印象はどんなだつたかと訊ねられた。そのとき私は、毎日精一杯に休

みなく登れるものとしてベース・キャンプから頂上まで、六日はかゝるといつたら、幾分解つてくれたようであつた。

タルタランの死

キ　ド・レ　イ

日　高　信　六　郎　訳

タルタランの死

ずい分長いまえから私はタルタランをさがし求めていた。

それはかれの伝記作者がえがいたあのタルタランではなく、私がアルピニストの夢の中でえがいていた男、すなわちアルプスのタルタラン、生一本で氣がよくて、まい年まい年山でおこる遭難事件や、かれの熱情に対して平地にすむ人たちがしめす無関心や、きまじめな人たちがあびせかける嘲笑などにはおかまいなく、ビクともしない信念にみちている男であり、世間がこぞつて、おまえは全く無用な男だといつても、自分では人類のために大いに役に立つと信じ切っている男であり、詩人としてはヘボだが心は純で、登山界アルピニスムのつまらないヒーローとして、しくじりやほらを繰りかえすうちにも、誠実さと健全でのんきな快活さをにじみ出させて、ついだれもが好きになつてしまうような

男、つまりその長所と短所とを通して、しこたまアルピニストの魂を持ちあわせているタイプの男なのだ。

私は山の大きなホテルの食堂や、団体ハイキングや、山岳会の集会や総会でかれを探しまわった。かれに似た男を見かけたことはあるが、かれではなかった。私はたくさんの似^に而非タルランを見つけた。かれらは立派なアルピニストのみなりをして、アルペンストックを携え、ゲートルと山靴に身をかため、大道を上^に下^ににあるきまわる、その得意そうなさまは、折り紙のかぶとに鶏の羽根をかざし、木のサーベルをふりまわす大将気どりの子供のようであった。私はまたアルプスの奥の山小舎で、山道具をひけらかし、なれない人たちにこまかいところまで説明したり、注意をあたえたり、登路をおしえたり、すばらしい手柄話をくりかえしたりはするが、そこからあしもふみ出さない連中を見つけた。それから、かわつた風体をして、どつしりと大またで、だまりこくつて気ぜわしように、谷間づたいに登つて行き、登ることに気を取られ、まわりもろくに眺めもせず、ずつと高いところに消えらせる人たちを見かけた。が、この人ちのあいだにも、タルランはいなかった。

そこではじめて、私は高い山のさびしいところを探したら、平野を覆う雲のうえに、遠く人界をさけてたつた一人て自由をたのしむかれを見つけることが出来ることもあるかと気がついた。かくて私はとうとうわが心にいだくタルランを見つけ出したのである。

この夏私は登山界の首都ゼルマツトにたどりつき、室数四百という簡素なホテルにとまつた。そこでは、二つの氷河にはさまれた高い峠に建築中のあたらしい山小舎のうわさで持ちきつていた。すでに、ゼルマツトから見あげると、ずつと高いところに、一点の赤味がかったものが、灰色の岩のうえにクッキリと見えていた。この建築はたちまちひまな滞在客すべての興味をそそり、毎日ひとびとは望遠鏡をむけて、その進捗のぐあいを見まもり、その位置があぶないと批判し、あんなところに小舎を建てる奴は気がいだとののしつた。おかげで町の貸し望遠鏡屋のおやじは今までにない大もうけをしたし、二十日のあいだわれわれの食堂ではだれもほかのことは話さず、食事のはじめか

らおわりまで小舎のはなしで持ちきつた。

ある日、そのゼルマットに六十ばかりの年配の男がやつて来た。肥つてはいるがガッシリと、いかつい肩をいからせ、すこしがにまたの短かい両脚のうえにのつかつていた。私はかれがわたしのホテルにはいるのを見た。かれは宿帳に名を書くのをいやがつた。むかしは晴ればれとしていたその額に、いまはふかい皺がぎざまれている。とうとう見つけた。これこそかれだ。タルタランだ、そこでかれがホテルの廊下にかかつて私のそばを通りぬけるとき、私は

“先生、とささやいた。——だまつて。わしがここにいることは、だれも気がついてはならぬのだ。”と彼は答え、ボーイに案内されて奥に消えた。

あれほど陽気で、名の通つたアルビニストが登山の中心地でうけるあの快よい虚栄があれば好きだつたこの人が、いまホテルの雇人にさえ名をかくそうとするのには、なにか大きな秘密があるにちがいない。たぶんひどい悲しみ、いやえらい失望の極ここに到つたのであらう。

私はこの秘密のとぼりをかかげようと決心した。それは私にとつてむずかしいことではなかつた。というのは、氣だてのいい人が悩んでいるとき、なぐさめのひとことをかけたり、ちよつとの同情をしめすだけで、その心のうちを打ちあけさせることが出来るのは、ちようと、嵐のあとでは、かよい太陽の光線でも暗雲を消すことが出来るのと同じなのだから。

その晩タルタランは私を片すみに引つぱつて行き、話してくれた。それはかれの魂にとつて黙つてゐることはくるしみであり、語ることを慰めになるのであるから、たよりになる友に自分の胸をひらき、心のほどを打ちあける欲求に堪えきれなくなつたからであつた。——“君はわたしを見やぶつたが、わしも君を覚えてゐる。山で出くわした人たちはお互いに忘れるものでないから。しかし君と別れた日から……”——こゝでかれは絶望のみぶりで、もう薄くなつた頭を両手でかかえ、尊敬と同情とをあらわして聞き入る私にむかつて、何もかも打ちあけてくれた。人間につ

いても世間のことについてもホトホト愛想をつかしたこと、かれが破産したことを知つて気持ちが扱いするふるい友だちから見すてられたことなどを話してくれた。マッターホルンにつづいてユングフラウ登山鉄道の開通が、アルピニストとしてのかれの理想にむごい打撃をあたえたことを思い出す。かれが磐石のように思つていた大厦がたおれたのだつた。

ながい留守のあとで、かれの輝かしくもなつかしい記憶と切りはなせない生れ故郷のタラスコンに帰つて見ると、世の中はかわり果てていた。ふるくからいる年とつた女中さえも、近所の人たちにそそのかされて、山の本こそ主人を気がいいにしたのだと思ひこみ、かれがあれほど大切にしていた本を売りこかしてしまつていた。

かれの属する有名なクラブで、ドンドン退会者が出るのを盛りかえそうと努力したが、もう今日タラスコンで歩く人はなくなつた。こゝでも、老いも若きも、男も女も、自転車でかけまわつていた。歩くことも考えることも忘れはてた新しい時代の人たちには、これで充分であつた。

かれは、ひとびとの友情をふかめ心性をたかめるために会食を思ひつた。が、その食事はつめたいつめたいものになつてしまつたし、演説をしたのはかれ一人しかなかつた。講演会を思ひついて、知りあひの新聞記者連中から引っぱりまわされた。クラブの数すくない会員をあつめようとして、ふるいなかまのパスカロン、ボンパールその他に呼びかけたが、何としても幹部が集まらなかつた。みんなことわつて来た。ある者は結婚したと云い、ほかの者は菓屋の店員から主人になつたので、店の仕事がいそがしくてひとの世話は出来ないと云い、ティジオはいやだと云い、カイオは何も出来ないといふ、セムプロニオは、他人の世話をやくような奴は野心家だし、その他人は世話するだけのねうちのない手合いだから、おれはひとの世話にもならなければひとの世話もやかないと云う。こんないぢいちの理由のうらには、いろんな個人的動機がわだかまつているのだ。ティジオはカイオにふくむところがあり、カイオはティジオとセムプロニオの云つたことが癪にさわつてゐるのだが、何の故だかかれら自身にもいつこうわからな

い。そのうちにクラブはだんだん傾いて来た。

ふるい人たちは失望してしまい、わかい人たちは幻滅を味わされるのをいやがつた。

ひとびとはこの気の毒な永遠の夢想家をめんと向つてあざ笑い、そんな理想は古くさい考えだと云い、大きな理想のために生涯の最良の齡との精髓をかたむけたかれを、レモンのしぼりかすのように隅つこに投げやつた。

タラスコンの新聞にアルピーユ（訳者注、タラスコンの東につらなる丘陵）の頂上でおこつたあるハイカーのちよつとした事故に関する論説がのつた。

とうとう我慢しきれなくなつて、このいつこくものは、今度こそ永久に祖国を見すて放浪の旅にのぼる決心をして、ながいあいだ立派に代表して来たクラブを正式に退会し、人をそねみ人を忘れるこの地を去つたが、さすがにうしろがみを引かれる思いであつた。

しかしどこに行つて、何をなすべきか？ 新らしい友をつくり、新らしい理想を求めるにはあまり年をとり過ぎてゐるし、むかしのように心臓が云うことを聞かないから、かれの名をあらわし後世にのこすような大きな山のぼりはやれない。それでも、かれの本能とおさえきれない魅惑とがかれを山につれ戻した。かれは山奥のさびしい村、しかもなおかれがすきな人間社会からあまり遠くないところで、人に知られずに暮らせるような隠れ家をさがし求めた。しかし今や山の中にも孤村はなくなつてしまつた。いたるところでかれの名声はあとさきにつきまとい、かれの歩くところには好奇にみちたさゝやきがあり、ウサンくさく遠ざかる人があり、たまには気のどくそうな微笑を示す人もあつたが、それはかれの心にはあざけりともあわれみとも響いた。

そこでかれは孤独をもとめた。孤独のみがかれに平和を与えることができ、孤独に対してのみ、かれの一風かわつた冒険にみちた生涯の思い出を打ちあけることができるのだから。

ふるい愛惜の情がかれをマッターホルンのふもとに引きもどした。かれをうら切り身売りした山ではあるが、いつ

見ても美しい。／＼。その三千メートル近く人気のない峠のところに、氷河をかざるいささかの岩場を見つけ出し、安いねだんでゼルマットの村から譲りうけることができた。そこでかれは最後のたくわえを投げだして、小さな山小舎を建てた。

あんなにながい間ゼルマットの俗人どもの好奇心をそそつていたのは、実にこの山小舎であつたのだ。

“あそこでなら、少くともわしの小舎は、はげしい風にはさらされても、そねみやわるくちにさらされることはあるまいと……”——タルタランは結んだ。

翌朝はやく、タルタランはじうぶんな食料を用意してかれの小舎に出かけた。これからその小舎のせまい壁のなかにかれの偉大な魂を閉じこめるのである。かれは私に同行をもとめたから、大よろこびでこれに応じた。

のぼる途中のことはくどくどしく書くまい。それはどこでも同じであり、どこでもみんな美しい。下のほうの谷間は、夏のさかりで、うすいこがね色の裸麦畑の草いきれのあいだをわけて行く。まもなく気もうきうきする春のさなかで、青々とした牧場には花がさきみだれている。なお登ると冬になつて、むきだしの岩のあいだをぬけ、風にむちうたれる雪田のほとり、けたたましく叫ぶ鳥がとび交うあたりを行く、やがて氷河。私はいつも山にのぼるとき、このように季節が逆転するのを興ふかく感ずる。しかし私にとつて山がほんとうに美しくなりはじめるのは、生がおわるといふか、むしろ生のいとなみが、徐々に風化してゆく岩石や、走る雲霧や、だまつていながら永遠にうごいて止まぬ氷河の巨大なかたまりなどによつて、わずかにあらわされているところからはじまるのである。まわりの景色はわれわれがのぼり行くにつれ、たまらなく雄大かつ莊重になつて来た。今までだまりこくつて気むずかしかつたタルタランも、この魅力にうたれていることははつきりとうかがわれた。

“いい気持ちではないですか？”——と一休みしたところでかれにたずねて見た。かれはすこし息をきらしていたが、答えた。——“ありがたい、下界よりはずつと工合がいゝ。見たまえ、人間社会からタッタ二三時間のみちを隔

てられただけで、もう俗事の記憶はずつとうすらいでしまう。ちようどあのずつと下のほうで草を食っている羊のむれの鈴音が、かすかに聞えて来るような工合だ。よそでは感じられない何ものかが、この瞬間にわれわれの胸のうちをかすめて行く。われわれの思いは、まわりにひろがる大気のように、かるく澄んで空をかける。ああ、どうしてわれわれは人を有頂天にするようなこの辺の美しさや、われわれが今ひたつてゐる完全なごやかさ、われわれ自身にとつても全宇宙にとつても完全なごやかさが云いあらわせないのだらう？ 山の詩はあまりにも美しく、あまりにもしらが高いものだから、ひとびとはことばにつまつて、他人にわからせることが出来ないのだ。かれのような感受性のつよいアルピニストにとつて、汲めどもつきぬこのような話題をめぐつて、かれは上機嫌でシャベリつづけた。おかげで山小舎までのみちの後半はじつに近く感じられた。二人のみちづれのあいだに、どちらにもおもしろい話が始まると、ながく嶮なみちも、近くやさしくなるのは妙なものだ。

といつてもタルタランがはやく歩いたというのではない。それどころか、かれの歩きぶりは疲れた練習不足なひとのそれであつた。しかしかれはどえらいやせ我慢にささえられ、鍛えあげた若いアルピニストの私のまえて、威厳をたもととし、永遠にわかいかれの愛人に対していなく老人の愛においては、まだまだ一人前だということを示そうとつとめた。そしてすこし足場のよくないところに来るたびに、よろけたり、息切れをやすめるために立ちどまつたりするのを、見られはしなかつたかと、私のほうをふりかえるのであつた。かわいそうに、かれは私に輕蔑されることを気にしているのだ。が、このやせ我慢こそはげにも立派なものなのだ。俗人たちの嘲笑にさらされたため疑いぶかくなつたかれには「見すばらしい老兵」というオヴィッドのことばが心にうかんだのかも知れない。しかるに私は、疲れたからだのうちにこれほどのガンバリを示し、倦んだ心のうちにこれほどの青春の努力をあらわすのを見て、胸を打たれ、この瞬間のかれは、私自身や三十台の私の友だちよりもずつと若いと思うのであつた。

われわれは登路のおわりに近づいていた。そして、峠のうえにたどりついたときには、雪田の斜面に尖峯のかげが

ながく引きはじめていた。その巨岩のうえに乗つかつて、新しい小さな小舎が気もちよげに立ち、こんなに高いところにあることをよろこんでいるように見え、その小さな窓はわれらの愛にこたえる眼のようにわれわれを眺めている。それはごつい岩やいかめしい氷河のさなかにある一つのかよわい小さなつまらぬものに過ぎないのだが、このたつた数枚の板ぎれを打ちつけただけのものが、どんなにわれわれの安全をまもってくれることであらう。

すでに烟突からは一すぢの白い烟が立ちのぼっていた——ガイドの一人が先にのぼっていたのだ——なかにはいると、ストーヴは気もちのいい音をたて、雑炊^{まよな}を煮るための雪は鍋のなかでとけはじめていた。そとでつめたい風が吹きすさむとき、こんなあたたかい小さな小舎のなかにいるのは、何ともいゝ気もちだ。ここで人は安心してきつていゝ。これがその秘訣なのだ。ルクレチウスが「事物本性の歌」のなかでいみじくも云つたように、岸に立つて嵐をながめるとき、人が快感を味うのは、われわれに襲いかかることが出来ない危険を見ることがよつて、われわれ自身の安全感が倍加するからである。高山の山小舎にはいつたとたんに感ずるつよいよるこびと平和の気もちは、まさにこのたぐいのものである。すなわち、われわれはそこにたどりつきさえすれば、これらの峯のうえを荒れまわる破壊力は、まことに山上の「救命艇」ともいうべきこのかよわいけれどもしつかりした小舟に身をよせるわれわれに及ばないことを知っているからである。

われわれはいそいで簡単な食事をすまし、そとに出てしずかに過ぎゆく日の荘嚴な光景を満喫した。われわれはパイプに火をつけた。夕ぐれのパイプこそ高山生活のけがれない楽しみの一つである。

“タバコをすわぬ奴は山を存分に味うことを知らぬ。”——と、タルタランの舌は食後の快適さによつてほぐれて来た。それを聞いて私は、有名なアルピニストの友人で、里ではタバコを吸うのを見た人がないのに、高い山にくとシガレットの魅惑に身をまかせる男のことを思い出した。

われわれがタバコをくゆらしているあいだに、日はおちて、大いなるしずけさが山々のうえにひろがつて行く、そ

してわれらの思いも夕ぐれのなごやかなそこはかない色彩を帯びてくる。この時刻に、この限りないあお空のしたで、このひろい荒涼たる境に、生きているものとはわれわれだけである。すこしまえまで太陽はそのつよい光を雪のうえに投げ、この砂漠の凍った砂はきらめいていた。が、今の地上では何もかも消えて、大空の広場には幾千のともしびがともされる。

高い山のうえの日のくれほど人の心にしみ入るものはない。人は年をとるまでに何十べんとなくこんな光景を見たのだが、いつもはじめて見たときと同じ感激にうたれる。山は、あらゆる器官にはげしい衝撃をあたえる強力な電池のように、人を昂奮させる徳をもっている。山はものかなしいと云う人がいる。そうかもしれない。しかしこんなおだやかさとまれに見る気高さとにみちたものかなしさを起させる山はすばらしいではないか。これに反して近代的の憂うつは、つまるところ、われわれを自分自身にたいしても他人にたいしても意地わるくする気むずかしさなのだ。

こんな高いところに来ると人の考えは健全になる。もしひとびとがこのことをさつたら、かれらはきつと「まい年二、三度はここにやつて来よう。ずつと前からそれをたのしみにし、なおずつとあとまで思いだすことにしよう」というアルピニストのつましい夢に同感するだろう。

タルタランは、あたかもかれのすきな詩人のことばをささやく私のこえが聞こえたかのように、ながい沈黙をやぶつた。——「今日わしがうけた感興は君には想像がつかないだろう。君はわかくはり切っている。しかしわれわれのようなある年配をこえた連中は、山に出かけるたびに、まだ自分は強いと自覚し、いまいちど血をわかすことによつて、一種神秘的な、貴族的とも云うべきよろこびを感じるのだ。現にわしは、いま二千メートル登っただけで、もうだいぶ若がえつたような気がする。

私の答えは——「私どものように、たびたび海辺の港に行つて美しい船のすがたをたゞえる手合いは、遠いあぶない旅に出かける人たちをながめると、旅をするひまと手段と欲望をもち、旅に出かける力をもち合わせている人たち

がうらやましくなるのです。われわれアルピニストは、毎年山に近づくにつれてこんな力を出すし、かけ出しの若ものも年季を入れた連中もこんな刺戟をうけるのです。アルピニスムは永遠の青春です。”

タルランは反駁して——“そんなのは先のみえない話だ。アルピニストは、自分の現在と過去とのへだたりをはかるために、ときどきうしろをふり返えるが、めつたに将来を予測することに思いつかない。アルピニスムのおちゆく運命について気につけず、その日その日をくらしている。しかしこんな思慮のなさを責めるわけにはいかない。活動的な人は——アルピニストもその仲間なのだが——夢をみるひまを持たないし、夢をみはじめると、もうアルピニストでなくなる危険がある。”

こゝで私はかれが私のことを諷しているのかと思つた。が、タルランはおちついて続けた——“われわれの仲間にもし思索家がいたら、われわれの現在の目的や将来の運命について探究し「アルピニスムは何を欲するか、どちらにむかつて進むのか？」と問題を提起すべきである。”

“だが、だれが思いきつてそんな問題をハッキリ提起するものがあるでしょうか？”——と私はたずねた。かれは——“われわれには遠いむかしと見える時代に、ほかの人の名は云わなくても、トッフェル、チンダル、それから君の国のセラのようなえらい人たちがそれを解決している。これらの信念をもつたりばな人たちの云つたことをくり返えすまでもあるまい。そのうち大ぜいの人が、病気のからだを解剖するような工合に、このアルピニスムを分析しようとした。近ごろになつて、君のお国のイタリアでも、いく人かアルピニスムのお医者さんが、われわれをなやます病気の正確な診断書を發表し、治療法を示唆した。しかしわしの考えでは、これらは単にあるクラブの延命策を考えるだけで、アルピニスムを強化する役には立たぬから駄目だ。なおそうとしているのは協会なのか制度なのか？はつきりさせておかなくてはならぬ。わしの云うのは山岳会ではなくてアルピニスムなのだ。クラブは形がかわつてもなくなつてもよろしい、が、アルピニスムは、思想的にも肉体的にもなくなつたらぬ欲求に応ずるものなのだから、

決してなくなることはない。

「会則や規定の改正や、会費の減額や、補助金の増額などが何の役にたつものか？　なぜあの人たちは経営上の問題からぬけ切れないのだろう。解剖分析は二千メートル以上のレベルにひきあげねばならぬのに、かれらはわれらの総会議場の下らないレベルに留まつている。」

「しかしタルタラン先生、あのコンウエイが一八九三年に冗談に云つたことをすこし聞いてごらんさい。」ずっと前からたびたび、アルパイン・クラブのさきは見えてると予言する人がいる。今やアルプスの征服は遂げられた。そして大小の峯々があらゆるがわから登られきわめられ、峠という峠が越えられてしまつたら、アルパイン・クラブの仕事はなにが残っているかと人は問うだろう。会報には書く材料がなくなるし、集会では議論のたねがなくなつて、クラブはその成立の使命をはたしたと声明し、最後の大晩餐会をひらき、解散して地球の表面から消えるほかあるまい。」

「わしは君たちが解釈するような結論には大反対だ——とタルタランはどなつた——君たちは数年以来アルプス探検がなしとげた進歩を忘れてゐる。それは正にアルプス征服が完成したと云われてもよくなつたその日からはじまつたのだ。何よりもアルピニスト仲間の探究心がすぐするどくなつた。というのは、われわれの間ではむずかしい登攀の材料が出つたので、アルプスで処女峯を見つげ出すためには、以前にもつと手ごわく且つ高い奴にのぼるために要した技能より以上に、もつと要領よくもつと念をいれて探さなければならなくなつたからだ。」

「それで毎年——と私は口をはさんだ——新登攀や、すでに登られたのちよつとちがつた登路の長いリストがあらわれて、門外漢をひどく驚かすのです。またむずかしい初登頂の自慢ができない連中は、腹いせに第二登でいばかり、ガイドなしで初登したとか、それまでになかつた女づれで登つたとか。子供づれ犬づれで登つたとか吹聴するものが出て来ました!!　しかしこんなのはくだらない自己満足であり、金持ちの食卓からこじきがひろい集めた残り

ものであつて、はげしいがいつこう役にたたぬ、もつたいぶつた順位あらそいがおちであり、泰山鳴動して論争の「下らないねずみ一匹」がとび出すのです！

「いや、わしはそんな風にアルピニスムの進歩をもつて行くのではない——とタルタランは眉をあげて答えた——わしはアルピニスムがひろがつて行くところにわれらの理想の精華を見るのだ。イギリス人やそくばくのドイツ人、それに君の国イタリアの一二の人は、遠い地方に探検を試みて、そこに発見と新しい見当のひろい分野をさがしてゐた。これはアルピニスムだけでなく、文明のために大きな貢献である。またほかの人たちは——そのなかに君やわしの国のすぐれた人も二三いるが——ほかの分野でアルプスの経験を科学のために応用し、アルピニストが建てた避難小舎は科学の実験室となり、そこで天然現象を観察研究したり、高所における人体の抵抗力を実験したり、平地でのように厚い大氣の層にさまたげられずに星の光をしらべたりした。この人たちもまた新しいみち、すばらしいみちを指し示した。じつにアルピニスムの勇敢さが科学のこんな思いきつた仕事をつくり上げたのだ。

「君のような若い人は、何でもひとの云うことにはすぐ反対するくせがあるから、こんな思い切つたことは少数の人にしか出来ない」と批評するだろうし、遠い地方を探検したり、科学の高遠な問題を研究したりする人たちは一種の貴族であつて、これからは貴族のことを語るべきではなく、大衆について考えることがよいと云うだろう。よろしい。この方面でもわれわれは安心していいのだ。五十年まえにはわずかの山好きしかいなかったのに、いまや登山クラブや協会の会員は万をこえている。そしてわれらの草わけの協会のいくつかでは、会員がふえないかまたは減つているとしても、山を知る人の数は一般にふえている。だから、わしは初代の登山クラブのあとをついで新しい組織がちかごろ生まれることを心配せず、かえつてよるこんでいる。かれらがどんな工合にやつて行くか見ようではないか。そしてもしうまくやつたら、しらがまじりの髭をはやした古るいクラブは「うまくやるね！」と喝采するだろう。

“わずかな人たちのものであつた山に対する興味は、今や大ぜいの手にはいつた。そして大衆から顧みられないことを嘆いていたえらい登山家たちは、いまでは群集がかれらの領分にわり込んで来ることを憤慨している。君はイギリス山岳会の名だかい会長が、その講演のなかで、高所における山小舎の建設をなげき、大陸の岳友がアルプスのあらゆるところに避難小舎をたてる悪癖をもつていると非難するのを聞かなかつたかね？”

“君はまた有名なアメリカの登山家が、じぶんで征服した頂上を、本気で大事にするあまり、難所に固定繩をつけたのぼり易くしようとする人たちから守らねばならぬ、と論じているのを読まなかつたね？ 君の仲間の一人さえもが、高い頂きにりつばな山小舎をつくと、山なれぬ連中がおしよせて、小舎をよごしいつも満員になるから、と苦情をいうのを聞かなかつたかね？ こんな手あいは高いところにある小舎には「俗人を好まず、その入るを許さず」と書きだしたいのだろう。これらは、文明社会のほかのすべての制度と同じように、アルピニスムも民主化しつつある明らかな証拠ではないかね？”

“新らしくこのみちに入つた人たちは、あまり威張れないようだ。かれらは先人がかれらのために登路をしるし、ホテルや小舎をたて、むずかしい登攀の技術を教え、ながい困難な、時として惨酷なまでの体験の遺産をのこしてくれたところに現われた。”

今や新人は、いわれなきおそれから開放され、自信をもつて、船乗りが海を知つていのように山のことに通じた人たちにみちびかれて、氷雪の世界にふみ入るのである。今や初心者は先輩のアルピニストよりもよく山を知つてゐる。かれらは、無知なために、先人のことを思い出さず、感心もしないかわりに、まだ生えそろぬ髭の下で、先輩をあざわらうことは充分できるのだ。”

この最後のことをタルタランが口にするとき、そくばくのにがにがしさをたゞよわせたが、この夕べかれはすべてのことを樂觀した。そして、退職した老將軍のように、私にむかつてながながとアルピニスムの弁護をした。私が

イタリア山岳会のもつとも活動的な支部に属していることを知つてゐるものだから、私に対するやさしい心づかいから、われわれのやつてゐる学生の登山旅行やわれらの大会のことを、かれの議論の引きあいに出してくれた。

“十九世紀の半ごろに、ほかのだれが子どもの登山隊をブライトホルンやモンヴィゾの頂上につれて行き、そんな冒険の責任をしい込むことを取ってしまったものがあるか？ 年かつころも条件もちがつた二百人もの若ものを、山や谷をわたつて、グランパラディゾの小舎までみちびき、三千メートルのところ、あたゝかいめしやロースビーフにトマトをそえて食べさせる男がほかにあろうか？”

私は多少得意になつてつゝまじやかに答えた——“私どもの支部は特別で、万事うまくやるほうです。みんなクラブの仕事に興味をもち、会合では大ぜい発言するし、講演は辛抱よく聞くし、七百人の会員のうち少くとも六百人は本格的のアルピニストとして知られています。われわれの仲間ではいさかいがなく、なかまわれせず、みんな仲よく一緒になつて共通の大目的のために働いています。だから幹部は、こんな風にみんなに助けられるので、仕事はやりやすく、名譽にもなり、クラブは大たすかりです。”

タルタランはため息をついて——“残念ながら、タラスコンではそんな風にうまく行かないのだ。そこではお互いにうたがい合い、少しでもいゝ事をやるとそねみ合うわるい癖がある。アア、クラブの会合でアルピニスムについて一言でも云うひとがいる心配はないのだ。集会ではなにか個人的な問題か、役つきの選挙あらそいぐらいが多少ともひとびとの興味をひく位のものだ。それがすむと、まつたく山に關係のない手柄^{フック}ばなしをゲラゲラとやる。気のいい男が居あわせて、今でもクラブで山の話をすることが出来るという錯覚をもつて、登山談を友だちに聞かせようとする、そのまわりはからになつてしまうのを、君は見るだろう。”

“しかし、タルタラン先生、山に入つたときだけしか山のことを語らないアルピニストや、登山を商売にして自分の生涯の義務をおこたるようなことをしないアルピニストがいちばんいいと思ひになりませぬか？ 私は、シンから

山がすぎでありながら、決して山の話しをしない、勇敢で謙遜なわかものを大ぜい知つてゐることを名譽と思つてゐます。わたくし自身、もう山のことは話さず、口に出すことをはばかつてゐます。家庭では愛する人たちを心配させまいとしてだまり、集りではひとをうるさがらせまいとしてだまり、友だちのあいだでは引っぱりまわされまいとしてだまり、せいぜい心をゆるした山のぼりの相棒だけとときどき打ちあけ話しをします。かれはお互に共通のふるい記憶を思い出させるとよろこぶのですから。そして、アルピニスムの価値について知つたかぶりの議論をする人たちとまざつたときにも、私はやはり黙つてゐます。というのは私が反対したとて相手が見解をかえる筈もなければ、私がかれらの反駁をきいて信念をかえる筈もないと思うからです。”

タルタランの答えは—— “そうだ、君も君と同じとしごろのみんなと同じように、自分の思想におびえて、無關心になり、おくびのような利己主義に身をしずつめようとするのだ。こんな無關心こそ君たちの生涯をそこなうものであり、君や君のまわりの連中から精神力をとり去つてしまふものなのだ。この精神力がすこしでもあれば、感激という形で、君たちの弱くなつた力に活をいれるのだが、君たちはそれに気がつかない、なさけない人たちだ。アルピニスムがこれまでに何ごとかをなし遂げたということに疑をもつ人があると、もうそれだけで君たちはこの仕事が老衰してゐると思うし、われらの目的がとげられると、君たちはそれから遠ざかつて行く、魂を向上させるべきなのに、身体をもちあげるだけしかやらない。だから、わしはアルピニスムの氣高くりつぱな使命には確信をもちつゝけてゐるのだが、その将来の使徒については疑をもちはじめたよ。”

“いや先生、現代の若ものに対するこんな非難は、新しいものではないところに、大きな無理があります。歴史を読むと、どの時代もつぎの時代について同じような悪口を云つてゐることがわかります。先生のおぢいさんは先生の、先生は私どもの、そして間もなくひまごが出来たら、私どもはかれらの悪口を云うでしょう。どの団体にも立派なひとが居り、時代によつてちがつた人物が出てきます。クインチノ・セラ（イタリア知名の政治家で山岳会の創立

者)はド・ソーシュールとわずかの共通点しかもたず、われわれはすでにセラの時代からよほど遠ざかっています。”

タルタランは叫んだ——“残念なことだ！ 君たちは枯れてはいるがまだしつかりしたあの太木のおかげを蒙っている。が、君たちのあとから来る連中はかげのかけしか見出さないだろう。理想によせる信念がなくなつたら、協会も組織たおれてしまう。その救いを見つけるのは君たち若いものの仕事だ。先ず君たち自ずからをたたきなおすことからはじめるがいい。希望をもちたまえ。君たちは、少人数の勇士の一部隊のつかれきつたしんがりだと思つているかも知れないが、じつは平和的で役に立つ大軍の前衛に外ならず、しかも君たちの戦いは有利に転ずるのだ。頑張りなさい！ 君たちの次の時代の人たちは、君たちがいい仕事をしてくれたことをみとめ、君たちよりさらに多くの仕事をさらにたやすく続けて行くだろう。君たちやわしらの時代の努力によつて、アルピニスムがほんとうの救世軍とみとめられる日が来るだろう。”

こんな名文句を吐いたのち、タルタランがまだどんなことをつけ加えたか、私はハッキリ覚えていない。まだながながと話しつゝけたようだった。暫くして私は力つよい腕にゆりおこされ、やさしい声で「さあ君おきたまえ、こんな高いところで、夜そとで寝込んでしまうのはよくない、かぜをひくよ」と云うのを聞いてわれに返つた。かれは父親のようなしぐさで私を小舎のなかにおし込んだ。そこで私は棒のようにたおれ伏し、一日のつかれとわが師の長広舌とでかくも気もちよくねせつけられた夢路をつづけた。

翌朝眼がさめてガイドたちとは見ると、いつも山小舎でやるように食事の用意をしていた。もうだいぶんおそいらしい。戸をあけて外に出て見ると、すばらしい天気だった。私は何時だろうとたずねた。

わが詩人の答えは——“何時だつて？ こゝで時刻を知りたいなら、風にたずね、地平線にのぼる太陽にたずね、かたむく月にたずね、空気のあたたかさにたずね、雪のやわらかさにたずねるがいい。自分の胃の腑にたずねるのは

いいが、決して時計にたよつてはならぬ。ここでは、時間や、われわれが暮している日までも無視しなくてはならぬ。山のうえでこんなことを知つていて何の役にたつだろうか？ 人生日ごとの煩いもこゝまではついて来ないし、新聞もとよかない。だが生活とは何だ？ われわれが下界で「生活」と称するものは、高い山のうえの生活とは何のかかわりもない。ここでわれらの生活を律するものは、無意識なたのしみであり、こゝろの本能的で自然なはたらきであつて、下界でのように、あわれむべき人間の享樂をきざんで整頓しその自由を規制する、義務という時計のおそろしい針ではかられるものではない。ここでは分もなければ、秒もない。時は馳せ去り、季節は影をかくし、残るものは永遠のみだ！

これは山を論じた実にいい文句で、大いに氣にいつたから、すぐ私の手帳にかき止めた。この朝タルタランは詩興にめざめていたので、私はかれの心境につけこみ、アルピニスムについて書くことのよしあしに關して私のいだくそくばくの疑問をといてくれとせがみ、山岳文学についてシヤベラせた。私はかれに向つて、アルピニストは話したり書いたりするよりは、歩いたり登つたりするほうがずっといいのではないかとたずねた。なぜ人は今でもアルピニスムについて書くのだろうか？

彼はこゝろよく語りはじめた——「アルピニスムや登攀について書いてある本のすべてが似たりよつたりであるのを見れば、そんな問題について新らしく云うことは何もないと思うのはあたりまえだ。ところが書く人は絶えず、書く種が少くなると見えるにつれて、山岳文学はかえつてふえて行く。見たまえ、君のところの山岳会の出版物は、会員の寄稿が少なく、悪口や批判がどつさりだが、年を追つて貫録をましてくる、自分たちのことは何もかも打ちこわすというなおらないわるいくせを持つてゐる君の国では、たぶんそうではあるまいが、感情にはしらず判断するほかの国では、たしかに重んぜられて来た。しかしもつと広い分野に移つてみよう。近ごろ一むれの綿密ですぐれた探究者や精確な編集者があらわれて、登山の記録を熱心にあつめ、本の目録をつくり、登路を記載し、初登者の名をしら

べ上げた。これら山岳文学の学僧は大いに報いられてしかるべきで、かれらの労作は実益があり、ながく残るだろう。しかし君やわしは真似する気になるまい。こんな分析的の仕事はわしに出来るとは思わないし、万一書けるようになったとしても、気がむくまい。日付けや標高だけでは食いたりないアルピニストでも生きながらえて、筆をとる権利はあるのだ。

“じぶんの印象を記憶にとどめ、じぶんの精神状態をバロメーターではかることを知っているアルピニストは、高い山のうえてじぶんの精神状態を観測して、ある瞬間には幸福で気もちよく、べつの瞬間には自信がなく気がよわくなつてすることに気付くことがたびたびある。それはかれの気持ちの山を反映したからだ。山の気持ちが愉快なら、むずかしい筈のこともやさしく且つ愉快になる。又その逆の場合もある。かれにとつて高い山ですごくすくすく肉体的だけでなく精神的にも一種特別の状態であり、かれは無意識のうちにいつもよりも芸術家になつた気味なのだ、というのはいつもより開放的になり高尚になつてゐることなのだ。こんな心境の由来をさがすことはやめよう。疲労によるはげしい昂奮の結果であるか、或は逆によい健康とか適当な肉体の疲れとかのためかも知れない。とにかくこの瞬間に人は平常の状態で味うよりも遙かに享受する程度が高いことは事実だ。高いところで人はじぶんが拡大され、中身はおなじでも、うんとつよい能力にまで押しあげられたように感じる。

“こんないい気持ちになつたとき、この感動をほかの人に物語り、この感激と感謝の讃歌を、しばしの間でもわれわれを自分以上に高めてくれたこの場所に向つて歌いあげたい欲望が生れるほど自然なことはなかるうではないか？ ああ、そうとう骨を折り、またなれない筆のはこびはたどしくても、こんなに楽しくすごしたときの記憶が消え去ろうというやつをじぶんの意にしたがわせ、このつよく美妙的な印象や、かくも稀にかくも貴い肉体と精神とのすこやかさを、じぶんの筆で再現できる人はなんとめづまれているのだらう！

“かれらにおいて登山の記述は事実よりも感覚の記録になり、しばしばわきみにそれて話しの明瞭さをきずつけ

ることは事実だ。しかし、わしはほかの連中のひどく短かいのやくそまじめなのよりも、かれらの漠然としたほうが好きだ。

“ここに山岳文学のただ二つの真の流派が対立する。アルピニスムの博識派と詩人派だ。この二つは相反するように見えるが、じつは一つの共通の目的において融和する無尽蔵の山の領域で、もの知りは山に関する一連の事物をすくない数のみじかい方式にまとめる。この方式は事物を記述するがそれを描写しない。この事物と場所と事件とをいきいきと描き出すことこそ、いま一つの流派が志しているところなのだ。両方ともおなじ真実を再現するのだが、一つは端正な線でえがき、いま一つは色であらわす。

“この文体のちがいを来たすのは民族の性格よりも、個人の傾向のちがいによる。イギリス人のなかにもイタリア人のひどく大袈裟なのと同じくらいに冗長すぎなものあれば、イタリア人でまったくイギリス式簡潔をまねるものもある。

“だから知つてゐる通りを書き、感じた儘を書きたまえ。じぶんで確かめたことのほかは決して云うものではなく、真実に直面して感動したときでなければ書いたものの中で感動するものではない。なかんずく、いちど筆をとつたらほかの人が君のことや、君の書いたものについて何と云おうと決して気にかけてはいけぬ。こんな無邪気な人たちのみごとな無頓着さを、わしは初期のアルピニスムの記述のうちに見出すのだ。そこでは夢中になることをちつとも耻かしがらない。そうすれば、さつき君が云つたような、アルピニスムについて最後のことばまで云いつくされたというような疑惑が生れる余地はない。というのは、最初の一語を云いはじめると、美しく力つよい感激がわき立つのだから。わしは好んでこれら初期の登山家の書いたものを読みかえす。かれらが山のむずかしさに立ちむかつたときの恐ろしさをすなおに白状していることの方が、あらゆる危険をだまつて軽視しているよりも、はるかに好ましいと思う。このあとのやり方は何の教訓にもならず、人を墮落させることがある。

今日でも山に関する議論は、その感激をつねに清冽な真実の泉からくみ取るのだから、永遠の若さを保っている。

そのおかげでわれわれは、現在のような懷疑的、実利的な混乱時代においても立場を見うしなわない。

アルピニストの仲間には学者もあれば芸術家もあり、道楽者もあればおとなしい苦行者もあり、科学者もあればディレッタントもあつてよろしい。けれどもアルピニズムには、しんからの信者でないものの間にも、大ぜいの篤信者がのこつてゐる筈だ。こんな風に、アッシジの聖フランシスコのような聖人たちは、その信仰を自然からくみとり、その俤は、今日のような不信心な時代にでもなおあがめられている。”

タルタランがこんな確信をもち、こんなに熱情をかたむけて私に話しかけたことはいまだ曾てなかつた。私がかれのこころの弱点、すなわちたぶんその生涯のもつとも美しいあこがれにふれたので、かれは、正直な無邪気さから、山岳文士としての大望を私にうちあけたものと感じられた。きまじめ男の朗らかな脱線、武骨もののきわみなき風流、リリズム。

恐らくかれは、じぶんの登山経歴の黎明期にふるさとのタルタランの新聞紙をひらいて、そこにじぶんの登山をほめた記事をつけたときに感じた、あまい感激を思いだしたのであろう。それはかれの生涯にあたらしい方向をあたえて、かれをまつしぐらにアルピニズムの本流になげ込んだ最初の讃辞であつたし、またかれがはじめて仲間をまゑにしてやつた講演についての好意的な批評であつた。かれの友だち——その頃はまだ大ぜい居た——はこれは天来の妙想だと云い、かれはそれを本当だと信じた。友だちはかれに書くことをすすめて、かれは筆をとり、ときどきはほかの連中より見どころがあるとうぬぼれた。ところがだんだんほかの仲間は……（かれらの云うところを聞いてみればわかる。）

このとき——“だんな、朝めしが出来ました。”——とガイドの一人が知らせに来て、私の考えの腰を折つたのはうれしかつた。というのは、タルタランのことばを聞いて私の唇にうかんだ満足の微笑は——何ともわるいくせなの

だが——だんだん皮肉な笑いにかわりかけていたし、おまけにこの朝はえらく腹がすいていたから。じつのところめしはうまかつた。フランスの鰯、イタリアの麵、アメリカの牛鐘、北海のエビ、地中海の魚とインドの香料入りのビスケット、世界の半分がこの山上のつましいたべものを供給した。

ガイドたちは手ばやく食いものを片付けて、小舎のそとに出て岩のうえにトカゲをきめ込み、このすばらしいお天氣の太陽のあたたかさを満喫していた。私もおなじように気もちよくやりたかつた。が、タルタランは私を引きとめて、また一席やりはじめたので、私は、かれに敬意を表するために、小舎のなかに止まつて拝聴しなければならなかつた。しかし私の書いたものを読んでいられるみなさんは、ご遠慮なくこの本を閉じ、小舎を出てポーチの下で煙草をのんで下さつてけつこうです。

先生はますます熱心になつてシャペリはじめた——「マルモンテルは、音楽を論じて、人間にあたえられた才能のうち、これだけが自分ひとりで楽しめる唯一のもので、そのほかのものはみんな立会い人を要する。」と云つた。おなじことはアルピニスムについても云える。これこそは、その進展に立ちあつて、そのやり方を評価する人がいなくても、完全にたのしめる唯一のスポーツなのだ。このひとりでもじゆうぶんに楽しめるといふ効用をあらわすことが出来るのが、アルピニスムに特有のものであつて、スポーツと呼ばれるほかの運動とひどくちがうところである。

若くたくましいギリシャ人は競技場で走り、ごほうびにオリムピヤやコリントの美しいご婦人がたから額にオリウの冠をつけてもらつた。いまの元氣な青年は、競輪場で二人のり三人のりの自転車をはしらせて、同じくきれいな見物から、プレスからも喝采を博し、勝者の名はむかしのように、すべての人の口にかたり伝えられる。

しかし、どうです。みなさん、アルピニストは名譽心がつよいとおつしやるが、われわれが山にのぼつて、眼もくらむような懸崖や、今にもたおれそうな氷塔セラツツとたたかい、暴らしを冒し、星夜の下にねむるとき、だれがそこまで来て、われわれを見てくれるものがありますか？

われわれは、きれいなお嬢さんやあてやかな夫人たちの喝采をもとめるでもなければ、高貴なご婦人から優勝カップをいただくのでもなく、世界選手権や世界記録をめざすのでもない。われわれは報酬のために争うのではない。われわれにとつての報酬は奮闘と勝利であり、われわれの登行はまったく金銭と縁はない。

こんな金目のごほうびこそ、若いものをアルプスの由緒ある競技場から引きはなし、山岳のひろびろとした空際のかわりに競輪場の柵のなかに送りこむのだと考えてもごらん！

そこで私はつつしんで申し出た——「タルタラン先生、チョツと異議を申したてさせてください。どうもあなたは、あなたの先輩がたがやつたように、登山熱がだんだんさめて行くのを、現代青年のころを征服した最も新しいスポーツのせいにしたがつておられるように、私には見えるのです。何もかも罪を自転車競技にしよわせるのが今のはやりになっています。かわいそうなのは自転車で、ほかのスポーツの凋落のせめをしよわされるのです。馬にのるすべを知らなくなつた。自転車のせいだ。ボート漕ぎがはやらなくなつた。競輪のせいだ。山岳会員がへつて行く。これも愛輪クラブが引っぱり込むせいだ。という風に、自転車はあたらしい時代の精神的怠惰の責任までしよわされることになりました。フランスのごく新しい傾向の新聞紙上で、若いものが本を読んでいたよき時代をおしむことばを読んだことがあります。それによると、自転車によつて移動がたやすくなつたために、勉強や読書に注意を集中することがむずかしくなつた。つまり、自転車は書籍にとつて最もおそろべき敵だ、と云うのです！」

「しかしこんな変化がみんな自転車のせいだというのは、いつたい本当でしょうか？ タイヤのなかよりも、むしろ現代青年の一部の動揺するところのうちに、もつと重大な、もつと深刻な理由があるのではないでしょうか？ 自転車よりほかのものがいるなら、芝居もあれば、酒場もあり、何ならけんかでもいい。じつのところ、若い人たちは俟約になりました。モリエールの芝居に出るケチン坊のアルパゴンのように、すこしのおかねで「うまいもの」を手にいれようとする。そして心がけ相応のものにありつくのです。登山による高尚な満足はかれらにとつてあまりにも

エネルギーと準備とおかねがかかるので、山に立ちむかわないで、もつと安あがりのところで満足する。いい気なものです！

“私はかれらを非難するのではなく、なげかわしく思うのですが、同時にかれらがそだつ場所のすぐそばで、新しいスポーツがたやすくかつどえらく発展する理屈はわかります。登山というスポーツは舞台が遠くにあり、おまけに、氷河の尖端にのつかつてバランスを保つ要領は、二つの車輪の上にのつかつて駆けまわることを教わるように、三四時間のレッスンでたやすくのみ込めないのですから！”

“そういう風に君は自転車肩をもつのか？”

“どういたしました！ 私はこんなたぐいの乗りもののにつかつたことは一度もありませんし、ウンベール印の自転車のわる気のないゴム輪で、罪とがもない市民にぶつかつたこともありません。が、私としては、よくわかつて見ると、このスポーツも有用なものであり得ると思うのです。”

“それで、われわれの仲間が、山での遭難を弁護するため、自転車のりが手足を折るはなしをするのは感心しません。私はこゝで、競技の日に、うつくしいご婦人がたの眼のまえて、群集の陽気な大さわぎのさなかに、コースのうえに鼻をぶつつけると、山にのぼつて、われわれの感激の唯一の見物人である永遠の自然のまえて、たつた一人、すべり落ちると、どちらが気がきいているかを議論するではありません。”

“しかし、みんな筋肉をきたえると云うおなじ最終目的のためにはたらくのですから、じぶんのやりかた以外のものにケチをつけることはないでしょう。これは職業的の卑劣なやきもちに過ぎません。スポーツ社会はこの種の矛盾だらけです。私自身ある年山で大しくじりをしたおり、ポーツマウスちかくの海上で、競走用のヨットが転覆し、五人が海中に葬られた記事を読んで、軽卒にもみずから慰めたのでした。ところがこの惨事にも拘らず、一週間後にはおなじ海上で英国皇太子と独逸皇帝とがヨット競走をしたのです。”

“人間とはこんなふうに出てくるのです。ごらん下さい。何と気やすく大衆は競馬場で騎手のいのちをかけ、したり、夢中になつてあんな人間のルーレット（玉ころがし）にかけつけるのでしょうか。しかもこんな遊びが公の催しであり、まじめな人たちからは認まれ、政府は賞金を出して奨励するのです。

“しかし人はあぶない出来事に立ちあうと、いつもひどく人間の力を感じるし、自分で危険にぶつかるときはなお更らです。

われらのいのちに何のねうちがある？ 軽く見るので十分だ。

危険にかこまれ、夢中になるのがご満悦……………

三途の川ぶちまで押しつめられ、うまく戻ればなおご満悦。

“もしそうでなかつたら、スペイン人がむごい闘牛にのぼせあがるのを何と説明しますか？ 向うみずで、気高い——おそらく何の役にも立たないだろうが——この種の気分がなくては、あのあぶない登攀に伴う陶醉を何と説明しますか？ 危険をなくしたら、むずかしい登攀のいちばんたまりないところを取り去ることになります。”

タルタランは答えて——その点について君の云うところはだいたい正しいようだ。しかしこんな試練が役に立たなくならはせぬかと疑うのはまちがっている。危険に立ちむかい精神を緊張させて楽しむのは、危険を避ける訓練になるのだから、いつでも役に立つことだ。こういう試練によつて、われわれはつねに、自然を直視する勇氣をもつものにのみ自然が与える教訓を、会得するのだ。しかし君は本当にアルピニスムは君が云うような残酷な遊戯でなくてはならぬと思うかね？

“残念ながら、山や平地や、陸や海で、死をのがれるためのたしかかな方法を書いた教科書もなければ、経験も忠告もはつきり教えることは出来ない。が、戦闘的登山のリーダーたちが慎重に行動することによつて、山の遭難はずいぶん防げるだろう。無経験や不注意によつて、また近ごろでは初期のアルピニストの抱いたおそれが軽蔑され無視さ

れたことによる当然の運命によつて、あまりにも多くの惨事が起つてゐることを君も認めるだろう。わしらのクラブや、特に君たちのクラブでは、数年以来あれこれの仲間の喪に服してゐる。われわれの悪口をいう連中は、近ごろの山岳会は最も進歩したアメリカの二三の都市にあると云う自殺クラブの一種に過ぎず、ガイドはこんな氣狂いを死にみちびき、時には自分もいつしよに死ぬという、金はもうかるが危険きわまる商売だと云う。

「君たちは山を戦場にしてしまつた。そこには死者傷者がみちみちて、山みちには墓じるしの十字架がちらばつてゐる。もし君たちの冒険が木々に花を咲かせ実をむすべたとしたら、同時にその枝にはたくさんの刺を生やしたのだ！」

このあらの手のわる口にいためつけられて私は叫んだ——「しかし先生、ここに一つへんなことが起つてゐるのをご存知ですか？ われわれの少年時代にはいつも放蕩と柔弱にならぬようお説教されたものです。プルタークの英雄伝をよまされ、カトーやセネカを崇拜させられ、この二人の自殺した英雄に見ならつて、生命を軽んじ力闘と高尚な疲労とを愛することを学ばされ、ありとあらゆるクラシックなことばで「健康なる精神は健康なる身体に宿る」と耳にたこが出来るほど聞かされ、フェネロンを読まされて、テレマクがちよつとした軽はずみをしたとて高い崖から海におきとした（墜落にならずためだつたかも知れないが）硬教育のやり方がいいと呑みこまされ、お年玉にはヴェルヌやメーヌ・リードの冒険旅行記をもらつたものです。そして……。そしてわれわれが、一人前になつて、これらの氣高いむかしの先例を頭にいつばいつめ込んで、ド・ソーシユールやウィンパーの足あとを追うのに夢中になり、つらい山のぼりの長い訓練をやつたのち、やつとけわしくむずかしい山に立ちむかうことになる、われらの先生がたのご承認を得られるどころか、無謀きわまる山きちがい扱いされるのです！ これではまるで話しがちがう！ というよりは、われらの国はまだこんな力闘にまで成熟してゐないというなさない証拠です！」

「それから、われわれの仲間でいゝ意味の競争心が起つて、だんだんむずかしい登攀をせり合うようになると、あ

なた方はそれを罵倒なさるゝだ、昔のえらいかたがたの偉大な勇氣が競争心にもとずいているのなら、なぜわれわれにそれを拒みなさるのです？

「われらの先生がたは、あらゆる手をつくして、われわれを神の造られたものの美しさに熱中させ、都会のけがれた奴隷状態を忌みきらわせ、高尚なあこがれの源であり、たのしみと力との清純な泉である自然をわれわれに詩化してきかせる。ところがだれか若いものが、学校のベンチからかい間見させてもらつたこの理想境の本ものを探し求めて、石突きをついた杖を手に家を出ようとすると、たちまち父か母かはソツと肩に手をかけて云う「行つてはいけない。きものが汚れるし、鼻の皮がむけるだけのことではないか」——しかし一度ぐらいはあなた方の息子にいゝガイドをつけて山に出してやり、ズボンをやぶき額の皮をむいて帰つて来たらよろこんでやつてほしいものです。

「何か遭難があるとすぐスキャンダルになってしまう、こんな病的な感傷からぬけ出すときが来ているのではないでしょう。ある種の人たちはわれわれをなさけもなければ分別もない男と思つています、だからわれわれをあざ笑われわれを罵る人たちから、われわれを守るのはわれわれの為すべきことなのです」

「私にもずつと若いころのむこう見ずな、不安もなければ悲歎もない、もつと楽しい時代がありました。それは私が山に入りはじめたところで、理想をいだき友情に燃えていましたし、まだ一人弟と一人の友を山で死なせて泣いたことがありませんでした！……」

「かゝる夢ははや過ぎ去りぬ。」

「山のみちには十字架がちらばつてゐる。と先生はおつしやつたが、われわれ敬虔なアルプスの巡礼は、信仰のためにわれわれが血と涙を流すごとく、われらの血と涙をしぼつた墓標のまゑに跪づくのです。もしわれわれがそうしなかつたら、そこそわれわれは心ない男だと云われてもいいのです。」

私がかたり終つたとき、タルタランは、かれのいわゆる現代青年の一人がかくもはげしい反撥力を示したのを見て

驚いたようすで、しばらくの間私を見つめていたが、感動して叫んだ。

「見上げた若ものだ、君の云うことはわしを驚かすが、君の熱意はわしを慰めてくれる。わしも知つてゐる。登山家の家庭で死別のかなしみがたび重なると、われわれを非難する人たちのするどいカンデキの爪が、新らたな力をもつて現われるので、家庭ではこわくなつて子供たちを引きとめ、わしらのところに来ないようにする。だからある遭難事件でクラブから一人の優秀なアルピニストが奪われると、結局たくさんの登山家の卵が減ることになる。これがわれらのクラブにとつて本当に大きな損失だ。だからこれからは悲壮な山のぼり時代は打ち切つて、奮闘も血なまぐさくないものでなければならず、新しい土地の征服に突進することはやめて、平和に開拓せねばならぬ。

「あるもの知りのいうところによれば、経験とはわれわれを傷けたあらゆる武器でくみ立てた^{トロフィ}賞牌だ。もしわれわれが本当にわれわれの理想を愛するならば、今からのちはこれらの武器が人を傷けないようにし、また世間がわれわれのことを気にかけないようにしよう。われわれが世の人々のために謙虚に熱心にだまつてやつた善いことは今にわかるだろう。君たちのアルピニズムの将来はひどくむずかしい単独の登攀のあるのではなくて、手のとどく程度の峠や山頂に出来るだけ多くの人を引きつけることをつとめるにある。マッターホルンに十べん登るよりも、モンヴィゾに百べん登るほうを選びなさい。

「山に対する人間のこのみはまだ新しいものだから、ずつと前から存在する根ぶかい反感に大きな影響を与えることが出来なかつたのは事実だ。このことはフレッシュフィールドが云つてゐる。——しかしまた、アルピニズムの悪口を云つたり書いたりする連中の多くは一度も山にのぼつたことがない手合いで、山に対しては全く去勢されてゐるのだということも事実だ。わしはこのことをハッキリ云う。三千メートルのところでは全く去勢されてゐるのだという朝の四時にのむ小さなコップ一杯のコニャックと、同じように徹夜をしたあと同じ時間に「カッフェ・ド・パリ」でのむ同じ液体とは、その目的もその意味合いも全く別ものだということがかれらにはわからないのだ。

「しかし、都の若い衆の生氣を失つたあお白い顔色——十六世紀の懷疑論者の顔にあらわれたようなセンチメンタリズムから来るあお白さとはちがう——よりも、山から帰つたアルピニストの陽にやけた顔つきのほうが、われらのご婦人たちのお氣に召すのではあるまいか？」

「さあ山に来て疲れを味つて見たまえ。自分のものを何もかも持つて歩いたむかしの哲人のように、山中の簡素なくらしに絶対必要なものだけを肩にして。町のくらしではのろまと見える才能をみがき、かくれ勝ちのみちを見つけたり、ひろいひろい天際の遠くを見わけたりすることに目をきたえ、やけつくような渴にのどをならし、すこしの食いもので足りるように胃袋をならしたまえ——服装はごく粗末に、」

「すべてこんなことをしたとて君たちに感謝するものはだれもないだろう。が、いづれ君たちが自分自身に対して感謝するだろう。また君たちの一生のうちに、このような労苦に慣れたことが君たちにも他人にも役に立つような時が来るだろう。君たちの世代には、前代の人たちを勇敢にし不滅にした「祖国の回復」（訳注、イタリア統一を指す）という大きな理想の力つよいいぶきが欠けている。」

「君たちは戦争することが出来ないから、ほかの方法で戦いたまえ。力つよい人たちを新らしい文明の競争に備えさせなさい。君の国のレオバルドは蹴球の勝者にしらべ高い詩を歌い上げた。新らしい時代の詩人が、これに劣らぬ氣がまえで最も高尚な遊技として、アルピニスムについて歌うことが出来たらどんなにいいだろう。」

私はかれに答えて——「われらのえらい先輩（訳注、初代のイタリア山岳会長クインチノ・セラを指す）は丁度そんな風に感じて、われわれのクラブに愛国心の高いいぶきをふき込んだのです。イタリア統一が出来あがつた上は、イタリア人を作らねばならぬ、とかれは考えた。そしてこの天才にとつて山は若人を鍛えて、勤勉、勇敢、質実、沈着にするのに適していると思われました。ですから、今日でも本もののアルピニストを導いているこんな理想よりも広大かもしれないがそれほど純真でない理想をもつて、われわれの身近いところやほかのところでのわれわれのク

ラブを創立した人たちの立派な鹿爪らしい顔つきを思い浮かべると、われらの理想がもつよさは、自信のたりないわれわれが感じてゐるよりも、ずっと大きいものであることが思いあわされて愉快です。

「われわれイタリア人にとつて、この理想は生活や性格からするとちりぢりのように見える人たちを一体にまとめるものであつて、アルプスやアペニンの山脈のように、われわれの国土の強大な背骨であり、われわれをつなぐ一連の鎖です。」

「アペニンは別として、海をめぐらしアルプスがかこむ」この美しい国では、山のすがたが見られぬ町はわずしかない。イタリア全土はたゞ一つの山です。だからわれわれのところこそアルピニズムの真の本拠があるので。もしもイタリア人が「神のかれらに示したまえるところ」をよく聞きわけなければ。

「マッターホルンに雪煙をたて、モンブランの絶頂に吹雪をまき起すその同じ風が、エトナの噴火口のまわりに旗雲をなびかせ、アルプスの大氷河のうえに冷たいつむじ風を吹きあげたのち、下つてはアペニンのなだらかな脊稜をかるく吹きぬけ、「こがねのまほら」(パレルモ郊外)の空にやさしく吹きよせて、レモンや夾竹桃の香りをまきちらすそよ風となるのです。」

「多分まだわれらの山なまのの間には、わが都市国家時代の遺産である塔の精神がすこしは残つてゐるらしいです。しかしわれらの塔は少くともわれわれのまけぬ氣にふさわしく、アンテラオと云いモンヴィゾと呼ばれ、グランサツソと云いエトナと称する。荘嚴な建物の輪劃でこれよりも立派なものがありましようか？ 寺院の尖塔でこれよりもスラリとそそり立つものの、円屋根でこれよりも壮大なものがありましようか？」

「これらのうちどれかのいたゞきに登ると、むかしの都市国家のふるい塔から見おろすように、近くにはお寺の鐘樓が、遠くにはほかの国の堂塔が見えます。われらの理想を平和的に争おうとする広大もない共通の場を眺めるのです……………」

いまやタルタランと私とは意見が一致した。われらの思索が生をうけるアルプスのしらべ高い詩はわれわれを征服して、かれの苦悩を克服し、私の疑惑をといてくれた。そしてこの対話、というよりはむしろこの思想のつみ上げをやつてゐるうちに、ずい分時間がたつて、われら二人のあいだに思考の親しみと共感のひそやかな交歓とが出来あがつた。最後には旧弊人のかれも近代人の私も同じ意見になつた。

しかしこの山のごつい自然との共感と交感とは、あたかも美術家がその思想をとり出そうとする材料と血みどろになつて取りくむように、身をもつて山にぶつかつた僅かのものしか感じないだろう。

自然の大冊子の叢書のなかでも、山の巻はいちばんおそくまで人類に対して閉ぢられていたものの一つであつた。それは蔵書のうちで一度も開かれたことのない大判イソハツのあつく重たい本のようなものだ。この本はまずごく少数の勉強家によつて読まれた。それは開きにくく、ページをめくるに不便であり、あらうことばで書いてあるため、すべての人が読みこなすことが出来るわけでなく、あまりに荘嚴な文体のため、今日でもよく意味がのみ込める人は少ない。しかし毎年いく人かの辛抱づよい読書人がこの大冊の新らしい一ページを開らいて、みなにわかり易いことばに翻譯し、その美しさについて芸術家の注意をひき、学者の研究をうながす。かくて今やたくさんのページが翻譯され、注釈を加えられている。この大きな本のいくらかのページを切つて、われらの先人には閉ざされていたこれらのページを研究家に読めるようにしたことは、われらアルピニストのささやかな誇りであらう。

このまじめな山の本をひとびとはよろこんで開らき、閉ぢるときには読みさしたところに槓をはさみ、都合さえつけばすぐさま駆けつけてこれを開らくのである。

わが友ヴァッカローネよ、いつしよに読んだあの美しい沢山のページを覚えてゐるか？ モンテローザを語る章を読むときわれわれが抱いた無邪気な夢と瞑想と感激とを覚えているか？ われわれはわれわれ自身についてもほかの人たちについても疑念を抱いたことはなかつたではないか。あのイブセンに出て来る病的な人物のように理想に迷つ

たことは決してなかったではないか？ あの時われわれが体験した広大な自由、優越感、最高ならざるすべてのものに対する不思議な輕蔑を覚えているか？ こんな思ひ出は将来きみや私の老年を楽しませてくれるだろう。こんな思ひ出は生涯の幸福を形づくるたのしい時の絶頂であつて、野望をとげたとたんにすっかり価値がなくなるようなものとは較べものにならない。そしてこんな楽しい時は山の生活にはうんとあるし、ありがたいことにはその泉はかれない。

おお／ やかましい理くつはわれらの総会の議場に打つちやつておこう。そこで議論は疑惑をおこさせるだけだ。山のみは優越無限で、われらの心のうちに入りこみ、僅かながらそこに存する美しく純なるものを探しもとめる。だからこそアルピニスムはいかなる批判をも超越するものとわれわれには観じられるのだ。

いまに見てごらん／ いまにアルピニスムはなにかの形で教育のなかに織りこまれ、あたりまえの運動にくみ入れられて、今さら説教する必要がなくなるときが来るだろう。そうなつたら反対も讃辞もいらなくなるだろうし、シテムも、クラブも、会則も大会も、ひとびとが理想をひろめるために工夫したものはみんな問題にならなくなるだろう。しかしそのときには君も僕もこの世にはいないだろう。われらの仲間のブッデンは講釈をやめるだろうし、ゴネラは山小舎を建てなくなるだろうし、僕はシャベラなくなるだろうし、君は案内記を書くことをやめるだろうし、サラガトは笑わなくなるだろう。

こんないろいろの考えがわれらの頭を去来したのはみんな高い山の上で、大地と大ざらとの境もさだかでないところであり、そこでは正常な氣圧が足りないせいだろうか。人はじぶん自身からぬけ出して、身も心も風と空想とのまにまにさまようのである。

高いところでこんなことを語り合つたり考えたりするのはすばらしいことだ。ところが同じことを下界に持ちかえつて、町のあたたかい室のなかで披露したり、「会報」のつめたいページにのせたりすると、まるで場ちがいのものに

なつてしまふだろう。くだらない役者でも冷徹な哲学者の役がつとまつたり、つまらない人でもちよつとの間英雄氣どりになれるためには、舞台、しかもこのようなすばらしい舞台が必要なのだ！

どうして山はかくも美しいのだろう！ 山がほほえめばわれらは笑い、山が怒ればわれらは悲しむ！ しかし山が白雪の布をかむり、紺碧——むかしの画家がマドンナのマントを描こうとするとき絵筆をそめたあのみどり色——の空を背景としてわれらの前に清浄無垢なすがたをあらわすとき、われらは、突兀と天をつき、われらの眼を高く高く引きつけ、われらを唆かし、われらを誘つてやまぬこれらの高根に對して、真の愛、真の信仰の飛躍（トビ）を感じるのである。こうなると誰がこれに抵抗できるだろう？

“あれをごらん”——とタルタランは私に云つて、山小舎の扉をあけ放つた。すばらしい金色の落日であつた。諧調のとれた色と力づよい線との勝利、光りかゞやくアトム（原子）の躍動、何とも云えない静けさ、その間にも嵐の雲は北のほう遠くにかたまり始める。そしてわれらのまん前にはマッターホルンの王座が聳えていた。

タルタランは、心にくくも、この氣高い山のまだ汚さない斜面を私にさし示した。そこからはまだ誰も登つたことがなく、昼夜落石がたえぬので登攀は手ごわく危いにきまつている。ファウストも聖アントニオも曾てこんなところに手を出したことはない。

“今夜出かけます”——突如として私はかれに云つた。この危険きわまりない岩壁をやつてみようかと決心して。この瞬間、理屈も用心もこのような魅力のまえでは何の役にも立たない。おお、世間の人たちがわれわれを何と悪く云おうがご勝手だ。われわれがこゝにいる限り、われわれはわれわれだ。われわれだけで、自由で、本當な人間であり、自分自身のぬしであり、万物のぬしなのだ！

“どうです、先生？”と私はかれにたずねた。

“羨ましいね”——とかれは言葉みじかく答えた。これこそ本當に山を理解した男なのだ。

私は夜半にガイドから出かけましようと思ひ起された。私はタルタランの眼をさまさないように黙つて起きあがり、一時間あまりかかつて出発の用意が出来た。ところがこの夜タルタランは落ちつかなくなつた。私のガイドは一晚じゆうかれが床の上で身動きするのを見たし、私もかれがうなるのを聞いた。気の毒にかれはくるしんでいた。私はこんな容態を空気が稀薄で、胃のこなれがわるく、日中あまりしやべつて昂奮したせいにした。かれの口から、夢でも見ているように、キレギレのとりとめのない言葉がもれ出た。

外では、たけり狂う風が山小舎を巖から根こそぎにする勢で、そのひよわい壁に打つかり、小舎はゆれてミシミシとうなり、小舎を巖につなぎとめている針金のはげしい震動によつて、小舎が力のかぎり嵐に抵抗するさまが感じられた。この小さな家は突然として起つた大異変にむかつて勇敢にたたかっていた。そして風が小やみになるチョットのひまに一息ついているように見えた。私は出かけるのを思い切るほかはなかつた。

翌朝、曙光がまだ厚い雲のうえにひろがると見る間に、風は静まつた。が、天気はまだ陰悪であつた。山はくらく氷河は陰気に黒く、その峠の下に裂目^{クレワッス}が獲物ほしそうな口をあけていた。気温はなま暖くドンヨリとして荒天がまだ終らぬことを示し、マッターホルンはすっかり笠雲に覆われていた。

私は小舎のまゝで、せまいプラットフォームの上から、山をうかがつていたら、タルタランが私のそばにやつて来た。かれはゆううつで何か気がかりなように見え、じぶんの胸のうちを打ちあけねば気がすまないらしく、ゆうべ見た夢の話を私にするのであつた。かれは山岳会長として、悲惨な遭難事件の責任を問われて、法廷に引き出され、世論から非難され、もつとも危ないスポーツの推進者として新聞紙上でたたかれる。全タラスコン市民はかれの敵にまわり、かれの善意にみちた、公明正大な生涯をかけた理想にひどい憎悪と、それよりもつとひどい嘲笑をあびせかける。彼みづから裁判官の前にあらわれて、自分とアルピニスムを弁護し、先蹤者や学者のかがやかしい名前をならべ立てる。するとこれに応じてすさまじい口笛のひびきがかれの声を吞んでしまふ。

これは昨夜の風のさけび声であつた。しかしかれには、檢察官が冷酷な調子で、こんな気持ちがいはむしる病院に閉じこめるべきで、教育的と称する団体の長にえらぶべきでないと論告し、感動の色をしめす陪審員にむかつて、新時代の若ものが気軽に山で自殺するのをキッパリやめさせるために厳肅な見せしめを求刑するのが、まだ聞こえるような気がしていた！

かわいそうにかれが自分のつかれ切つた頭脳にやどつたこんな幻想を話すとき、子供らしい苦悩がかれの胸にあふれていた。それでも私はかれを慰めて云つた——「偉大な思想家や、人類の運命を導いたえらい人たちはみんなこのような苦悩のときを経験したのです。しかるにあなたはご自分の理想をまじめに追及し、あなたの全生涯の事業を有利なものとして信じて来られた、それなのに今それに疑をもたれることがあり得るでしょうか？ いやいや、あなたはこれら少数の大胆だつたか無謀だつた遭難者の共犯ではありません。かえつてあなたの考えやあなたの示された模範がどれだけ多くの人たちにためになる実をむすんだかを考えてごらんなさい。」

かれは感動して私のことばを謝し、つぎのようにつけ加えた——「わしにとつて山はいつも神聖な目標にほかならなかつたことを断言する。わしは自分のやつたことの榮譽にあまり重きをおいたことはない、が、もし君がわしに名譽を与えたいなら、わしの墓にピツケル一本そなえてくれ、それはわしの劔であつたし、わしは山との戦いにおいて勇敢な兵士であつたからだ！そしてわしには山々のあいだに墓場をもたせてほしい。わしはあの不朽のユーゴーの詩句を思い出す。」

おお！ わがさだめ来りなば……………

われをこの高き山々のふところに葬れかし、

よそ人の、その頂きを仰ぎて

いずれの山こそわが墳墓ならんと探しもとめのために！

“おや、これはあなたの遺言ですね、タルタラン先生？”——と冗談まじりに聞いてみた。

“どうだかわからないよ”——とかれはまじめくさつて答えた。それから、少しずつ天気がおさまるように見えたので、私は自分の計画どおり出かけた。

八時間後に私はヘトヘトになつて小舎にもどつて来た。山は私につらく当つたので、私は癪にさわつて仕様がなかつた。ガイドと私はタルタランにわれわれの帰りを知らせようと、遠くから大声でさげんだ、が、小舎からは誰も答えなかつた。

もう山にはうす気味わるい夜のときりがおきて来るころ、われわれが小舎に近づくと、一人の男が両手で頭をかかえて小舎のまえに座つているのが見えた。それはタルタランのガイドであつた。われわれがそばに寄ると頭をあげた。かれは泣いていた。「会長さんは死にました」と言葉みじかに告げた。

タルタランはこの日、自分でも気づかないうちに静かに死んだ。小舎の中に横たわり、まだ高いところを見ているかのように眼をひらき、おそらく自身や自分の理想に最良の幻想をかけて、おちついた微笑をなかばあけた口もとに泛べていた。

そのほかのことは何も云うまい。その翌日このかなしく莊重な場所を立ち去るまえに、かれの最後ののぞみをかなえてそこに葬つたのち、ガイドは岩の上にひざまづいて、その一人が信心のこもつた調子で経文の最初の一句をとえ、光にこたえていま一人がいつものように次の句をつづけ、私は真心をこめてこれに和した。ずい分ながい年月のあいだ私はこんな心こめて折つたことはなかつた。あたかも自分の魂のために折つてるように思えた。しかし私が呼びかけていたのはわが山岳会にむかつてであつた。なんじの耳をわがねがいの声にかたむけたまえ。なんじもしもろもろの不義に目をとめたまわば……」かわいそうなタルタラン、かれがいろいろな欠点を持つていたことは事実だが、あれほどアルピニスムが好きだつたのだから、仲間から許してもらうだけのことはあるのだ。

タルタランは永久に消え去つた。かれは自分の時代を作り上げた、が、かれと共に一種独特のタイプが絶えた。かれの法螺とともに、まっすぐな情熱のあの気のいい快活さも、あの羨しいほどの無邪気さもなくなつて仕舞つた。いくたりかのたぐいがない天才のように、後つぎもなく死んでしまつた。それで今君たちは笑うのだ。死んだタルタランを笑い、もしまだそこらに見当るなら生きてゐるタルタランの亜流を笑う。私をも笑いたまえ。しかし私はわが小さなタルタランをばいつまでも生き生きとわたしの心のなかに抱き、私みずからの最上の部分としていつくしむだらう。

この長話しの教訓^{モラル}を知りたいならば、「タルタランはおシャベリが過ぎて死にました。」

もしまた、君たちのように、この話を聞いていつまでも悲しくなるような感傷家があつたとしたら、アルプスのむこう側（訳注、フランスを指す）に住むあの人のいいお坊さんが、キリストのご苦難についてお説教をして信者を泣かせすぎたときに云つたように私も云いましょう。「みなさん、そんなに泣きなさんな。こんなことがあつたのは遠い遠いむかしのことなのだし、それに、ひよつとしたら本当じやないかも知れないのだよ」と。

あ　と　が　き

一、このギド・レイ（一八六一—一九三五年）の一篇ははじめ「アルプスの前奏曲」Preludio Alpino という題で、一八九七年に刊行された友人との合著「四つ這いのアルピニズム」Alpinismo a Quattro Mani に発表され、ついでかれの死後一九三九年刊行の「アルピニズムの終焉」La Fine dell' Alpinismo のなかに「タルタランの死」La Morte di Tartarin となつて収められた。

ところが、前者は後者にくらべていくらか短かく、マッターホルンの処女壁に挑もうと気負いたつ若者に向つて、タルタランが「羨ましいね」と答えるところで終つてゐる。

ギド・レイが当時先人未登のフルッゲン尾根にはじめてぶつかり、八日間に三回の連続アタックをかけて敗退したのは一八九〇年、頂上からの下降をこゝろみて成功しなかつたのは一八九六年であり、一八九九年になつてはじめて頂上直下のテラスまでよじ登つたが、それから上がのり切れず、数日のうちに改めて頂上から繩梯子の助をかりテラスまで降下して志を遂げたのだから、この稿がはじめて書かれたのは、かれがこの尾根の征服に心をくだいていた頃のことと思われる。

なおこれは、レイの著書の多くを仏語に訳して天下に伝えたかれの親しい山友でフランス山岳会の雄エミール・ガイヤールによつて仏訳刊行された「登山の物語りと印象」Recits et Impressions d'Alpinisme のなかに「邂逅」Rencontre という題で採録されている。

「タルタランの死」は、前者にくらべると、ところどころに補修された部分が相当あり、最後にタルタランの死を弔うところを加えてある。この部分がいづ書きなおし書きたされたのであるかはよくわからない。ただかれが自分より二十年したのウゴ・デ・アミチス（クオレの作者として知られるイタリアの文豪エドモンド・デ・アミチスの子）と山行を共にしはじめたのは一九〇四年からであり、いわゆるアルピニズム・アクロバチコ（アクロバチック）の岩のぼりに苦楽を分けあい、山に対する熱情を発散した山行は一九一三年までつゞき、その羨しいばかりの友情は死ぬまでかわらなかつたのだから、この交友が紙背にうごいてゐるのは見のがせない。この文をよむと、漸く老境に入ることを見出したしらがまじりの岳人と、新進鋭氣のたくましいアルピニストとが、山中随時随所に、とりとめのない議論やそこはかない対話をとりかわしてゐるさまが想い浮かべられて、ほほえましくなる。

そのためであろうか、文中とところどころひとりよがりの楽屋落ちめいたところがあり、いささか冗長なところやくどいところが

目について、前者のほうがスッキリしているようにも思われるのだが、このほうが、山を愛し、山を敬い、山にとけ入ったかれの気持ちや云いつくしているようであり、その頃の欧州登山界や青年層のようすがわかつて面白い点もあるのだから、この改訂増補された分を、近ごろイタリア山岳会の手で編集刊行されたギド・レイ全集第三巻所載のテキストにより、出来るだけ忠実に訳出して見た。

二、本訳稿は特にイタリア山岳会を通じ、発行者モンテス社から「山岳」誌上に掲載を認められたものである。その好意に厚く謝意を表し度い。

三、主人公のタルタランは、もちろん、アルフォンズ・ドーデー（一八四〇—一八九七年）の筆になる「陽気なタルタラン」（タルスコンのタルタラン）や「アルプスにおけるタルタラン」で先刻おなじみの、陽気で、法螺吹きで、気がよくて、そつかく、いかめしい装備に身をかため、ありふれた山に氣負った登山を敢行するあのタルタランをかりて来たものであることは、云うまでもなからう。

タラスコンは、その近くのアルルや、十四世紀に久しく法皇庁の所在地になつていたアヴィニョンとともに、ローヌ河下流に沿い、南仏プロヴァンス地方特異の風物と人情風俗によつて知られ、今日でもイタリア本土以上にイタリア古来の風を存して、すべてのイタリア人にとつてなじみ深いところなのである。

四、この機会に拙稿「ギド・レイのこと」（山岳第四十六・四十七年所載）について一二の訂正をさせて頂きたい。

(一) レイは最後までウゴ・デ・アミチスと登山を共にした。一九一三年からの最後の山行となつたトファナとアンテラオのぼりについてはウゴの著「小さな人々と大きな山々」*Piccoli Uomini e Grandi Montagne* の中にいきいきと記されている。トファナ・ディ・ロチェスは自動車ですぐ下まで行けるが、岩場はとも手ごわく、アンテラオでは雨にやられて大いに苦しんだ。従つて拙稿中

(イ) 「これらはむずかしい岩のぼりの部類にはいらない」（五九頁第十行）と

(ロ) 「一九一二年までは」（七九頁第十五行）とを削る。

(三) 附録第二「ギド・レイのおもな著作」に左記を加える。

なお全集第四巻にはレイ逝去の一九三六年伊山岳会々報所載ウゴ・デ・アミチス追悼文（一四頁）と編者バリアノの手になる一四四頁にわたつての詳細をきわめたレイの評伝をのせてある。*Opere complete di Guido Rey*（ギド・レイ全集）四巻—アドルフ・バリアノ監修—一九五三—五四年

（一九五六・八・二二）

ネパール紀行

——一九五五年——

成瀬 岩 雄

カトマンズ

ネパールにはここ三年来多くの仲間が入つて既にその話や映画によつて色々見聞していたので、特に所謂「異国」に足を踏み入れるような気もしなかつた。実際、低い山に囲まれた盆地の中のカトマンズの飛行場に降り立つて見ると、さきに日本で二年の勉強を終え、日本人のわれわれよりは余程詳しく日本の全国を歩き廻つて家内工業や農業政策について勉強して帰り、特に二宮尊徳を崇拜の的としネパールに帰つたら二宮尊徳のあの立像を建てるのだとまで語つていたクリシュナー君がまず嬉しそうにレイを持つて近寄つて来た時は、如何しても「異国」に來たような気がしなかつた。日本留学中は文字通り朝早くか

ら夜遅くまで二宮尊徳そのもののような勉強を続けていたクリシュナー君は、此度われわれより一足先にここに赴かれ、旬日前に帰国されたばかりの彼が旧知の農政学の泰斗、那須皓博士をこの国に迎えたことについて如何にも嬉しそうに、また誇らしげに語るのであつた。

クリシュナー君はわれわれのために特に郊外の静かな宿舎を用意してくれ、日本でも田舎の旧家や豪族の邸宅によく見受けられるような外壁を囲らせた白壁の邸宅に旅装を解くと、窓からの景色は日本とチットも変りなく、時折牛や鶏の長閑な声が軒下から洩れて来るのを聞くと、松本近郊の農家に休んでいるような気がしてならなかつた。その上尋ねて来る人も既に聞き覚えのある名ばかりで、ネパールまでわざわざ飛行機で飛んで來たような気は全然起らなかつた。日本を出る時に桜の苗木を沢山持つて來てこの国に植えて帰ろうと計つたものの、既に時期が遅いのだと苗木屋さんの一笑に附せられたことをまたフト思返したりした。ただ違ふのは遙か遠くの低い山合いの彼方にガネッシュ・ヒマールやランタン・ヒマールの白い山肌が徒らにわれわれの気をそそののみであつた。見晴のよく利く日はエヴェレストも見えるという。

カトマンズはお寺の街ともいふべき静かな落付いた所で、この街に最近出來た旧ラナ將軍家の大邸宅を改装したヨーロッパ風のロイヤル・ホテルの屋上に上つて見ると、なるほど工場の

煙突の如く四方八方にお寺の塔が聳え立っている。その日の午後、ここ三年日本登山隊の遠征にあたり、生前特に好意を示されたが不幸にしてつい前月他界せられた国王に敬意を表すべく、その遺体を茶毘に附したというピチャパティ寺の参拝に出掛けた。この国では靈魂の不滅を信じ、お墓はない。聞けば四国八十八個所のような霊地めぐりもあるらしく、遙々印度から来たという家族連れの印度商人と一緒にわれわれも靴を脱いで合掌した。日本隊とは顔馴染の案内役、バーベア少年の耳打ちにフト眼を向けるとお堂の傍に樹下仙人がいる。既に一年以上も絶対に立つたまま坐らず立食立寝の修行をつづけているという。立ち続けるので足のムクミを防ぐためゲートルを巻いている。傍らにある簡単な炊事道具と古ぼけた洋傘一本、そして不屈の精神がこの仙人の全財産なのだ。

カトマンズはネパールの首都といつても町の端から端まで車で走つても卅分とは掛らないような所だが、町の中心というべきところに緑濃き芝生の練兵場がある。ここの真中に一段と高く円形に造られ直経卅米位の高台がある。その真中に高台全部を覆う日傘のような古木が一本植つていて観兵式や運動会の節は国王の玉座ともなる。事実われわれが、翌日ここで行われた陸軍の運動会に招かれた節も新国王と王妃がこの玉座に臨御せられ高位高官が傍に侍っているのが見受けられた。運動会といつても別にスパイクシューズを穿いて走るわけではないし素足

の選手が短距離や中距離を走つたり、リレーや綱引をやる位のもので甚だ幼稚なものであつたが、ただ変つていて面白いのは最後に行われた竹馬行進であつた。恐しく高い、それこそ梯子でも掛けて乗らなければ届きそうにも無い一段高い竹馬に乗つた指揮官の後ろに、数拾人の兵隊が隊伍正しく太鼓に合わせて行進して来るさまはちよつと珍らしい風景であつた。円筒形の太鼓を首から下げ平手で打鳴らす太鼓の響はこの国の乾燥しきつた五月の澄空に快よく響き渡り、いわばラッパの代りのようなものだ。引続き行われた賞品授与式には国王自らトラックに降り立たれ陸軍の最高指揮官、キラン將軍が傍に侍して賞品を賜るのである。日本の粗末な和紙のような紙にネパール語で印刷された当日のプログラムと招待状は、私にとつてはさつぱり判らないが何よりもよき記念品である。

ネパール人は服装こそ異なれ顔、形はチットも日本人と変わらない。印度人は色が黒いからすぐ判るけどネパール人は言葉さえ聞かなければ日本人そっくりだ。事実、われわれも国王の拜謁や王妃の尊父に面会の節は特に新調のネパール服とネパール帽という第一公式の礼装に身を固めて出掛けて行つたのだが、永らく滞在して既に充分顔見知りになつていたはずのホテルの主人もわれわれが参代を終えて帰つて来た時には、スワ、ネパール高官の到着とばかり、玄關に迎えを受ける光栄に浴した位、ネパール人と日本人は似ている。ネパール服を着たわれわ

れとこのホテルの主人夫妻と一緒に撮ったカラーフィルムもそんな意味で私には忘れられぬ記念写真だ。

ホテルといえば従来ネパールにはホテルらしいホテルは一つも無くて今まで各国の登山隊も弱つたようだが、このホテルは八ヶ月前に開業した由。さすがはラナ將軍の大邸宅だけあつて建物は勿論敷地も広大なもので、最近まで登山隊や少数の仏教関係以外の人の入国を許可しなかつたこの国も、一週間以内の滞在なら誰にでも入国査証を与え観光立国を唱へ出したので、このホテルは必ずや将来スイスのようなホテルになるであろう。この国の実状からして大工業や大商業地として発展するようなことはまず難かしいと思うが、大ヒマラヤという大きな特産物を持つたこの国のこのホテルの将来は洋々たるものがあると思う。また、私としてもそれをひそかに望むものである。まだ客室に使用している数も僅の十室位ではあるが一応ホットウォーターもチョットひねれば何時でも出るし、王宮の近くのせいか夜の電灯も明るし、今のカトマンズにはおよそ過ぎたるものという別天地である。昔、ラナ將軍が盛んに猛獣狩りを楽しんで当時の写真が至る所に掲げてあつたり、日本の山水画が架けられてあつたり、玄関には大きなワニの剥製が置いてあつたりしてある。この国独特の酒、ロク酒の製造で巨万の富を得、この邸宅を買取つてホテル開業を始めたという白系露人のボリスという親父は、英国生れの美しい夫人と共になかなか相尊も

よく、われわれに向つてルーブル以外のお金なら何んでも御支払いいただきますとか、夫人は夫人で来年日本隊が来る時には「サケ」(酒)を持つて来て呉れなどと愛嬌を振まいたものだ。緑濃き広大な敷地の一隅に今年のスイス隊は天幕を張つて泊つて行つたから、日本隊も来年はここに天幕を張らないかなどともいつていた。町の中心に近いところもあるし、といつて門から玄関まで奥深く、第二王子が常に楽しめるテニスコートもあるし、夜は庭に螢が乱れ飛び誠に町の中の別天地という感じのするところだ。

事実、此度ジャクソン夫人を隊長とし、婦人だけでジュガル・ヒマールへ行つて二万呎の未踏の山を登つたというスコットランド隊も、このホテルから出発したというし、われわれのいる間にもアメリカ人、スイス人が代る代るこのホテルに泊つて行たし、将来のヒマラヤ登山隊の連中の足溜りとなり、このホテルのロビーはヒマラヤ婦りの連中の話題に賑わう時代が来るのではないかと独り想像したりした。ホテルのロビーで知り会つた、ハラーの「Seven Years in Tibet」を読み耽つていたスイスの青年は、この国の建築を見に遊びに来たのだと語つていた。

今までヒマラヤといえは大掛りな準備でなければ出掛けられないと思ひ込んでいたわれわれも、ここに來て見るとカトマンズから往復二週間位で氷河に行つてヒマラヤを楽しんで來られ

る所はまだまだ沢山あるということを知り、現にこのスコットランド婦人隊の行つたジュガル・ヒマール等は一週間で行けるとか。まだエヴェレストでは登頂寸前に惜しくも引返した例のスイスのランベールも、今年は二人という小輕装でランタン・ヒマールに来ているということもここで聞いたのだ。現に僕はこのランタン・ヒマールの下の同名の村でチーズを作つてゐるというシュートレ、スデーゲンターレルという二人のスイス人に当国農林省で邂逅、その自宅も訪ねたら、実は二、三日したらまたその村に帰つて行くから一緒に来ないかと随分誘われ、地図を前に僕の「山日記」に日程表まで書き込んで呉れ、大いに食指は動いたのだが如何しても時日の余裕がなくて諦めざるを得ないのは残念だつた。ランタン・ヒマールとは既に一九五一年にティルマンが最初に足を踏み入れ、その著書「ネパール・ヒマラヤ」で激賞していることはわれわれもよく承知しているところ。ティルマンみたいなヒマラヤのベテランでさえも永らく閉国を続けていたネパールが開放したとあつては遊心押さえる難きものがあつたのであろうか。あの「The Langtang」や「The Langtang again」紀行は如何にも読者をして「楽しい旅」という感を抱かしむるものとして僕の愛着措く能わざるの書の一つでもあつたし、その上、つい先日この町のアメリカン・ミッションスクールの山好きの神父さん、モレーン師の家でランタン・ヒマールやゴサインタンの素晴らしいスライドを見た

ばかりだつたので、何んとか都合してランタンの村までも同行したいのはやま／＼だつたのだが諦めざるを得なかつた。まだ漸く歩けるくらいの子供は背負つて連れて行くのだというこのチーズ作りのスイス人夫妻。主人はどう見てもロダンのビクトル・ユーゴーそつくりの顔だつた。

ポカラ

しかしこのランタン・ヒマールの代りに、といつてはおかしいが後日ポカラに遊び湖畔の一八〇〇米程のカスキという小山の頂に寝ころんで、アンナブルナの連峰やドウラギリの景観をほしいままにした時は文字通り感嘆の連続であつた。話に聞いてはいたものの、あんな近くヒマラヤの本物を仰ぎ見られるとは夢にも思つていなかつただけに夜明から五時間ばかり飽かず眺めた。雪線の境まで判然手に取るように見ることが出来た。

フト、僕はその昔、僕等を徒らにうならせた長谷川伝次郎さんの「ヒマラヤの旅」を思出したりした。「七哩の彼方に見るナンガパーバート」。あの写真こそは当時如何ばかり僕等を感激させたことか。老父の秘蔵の重い蟲眼鏡を持出して、何度も右手で持つたり左手に持し返したりして「七哩」の誘惑を勝手な想像を交えて飽かず眺めたことか。爾来、僕はこの七哩という数字は單なる数字の「七」ではなかつた。僕にはこの「七」が対ヒマラヤ觀の僕なりの標準数字でもあつたのだ。今眼前に首

の痛くなるほど見上げるアンナプルナの連峰は僕には七哩の現実化でもあつたのだ。

そして、マナスルの隊員の誰からか、このアンナプルナの四つの頂を含む連峰は白馬から乗鞍までの距離だと聞いていたので心中ひそかに、まあ仮にこれを四等分として、白馬―鹿島鎭、鹿島鎭―鳥帽子、鳥帽子―槍、槍―乗鞍、くらいかなと考えて見たりした。

ボカラには湖もあるし、このアンナプルナを仰ぎ見るに手頃の山もあるし、将来は、恐らく観光一等地となるであろう。今はカトマンズから隔日に飛行機が出るし、この間四十分位の飛行中がガネッシュ・ヒマール、ヒマール・チュリー、マナスル、アンナプルナ、ドウラギリとヒマラヤ遊覧飛行みたいなのだ。カトマンズから飛び立つてここに着陸する飛行機は、まるでアンナプルナの懷に突き当るのではないのかと思わずくらい、まっすぐにこの山の懷を目掛けて着陸姿勢を取るのだから堪らない。

しかしこれが工場の煙突とか大きな建物であつたら思はずハッとして恐怖感に襲われたに違いないのだが案外、冷静に、この大白壁に吸い込まれるような感覚に、僕は完全にとらわれてしまつていた。初めて近づくヒマラヤのこの大壁に恐怖感等は忘却の彼方に消え去つてしまつていたのだろう。

例のローヤル・ホテルの親父も近き将来この湖畔にバンガロ

ー式のホテルを建てるといつていたからその時は是非マネージャーに雇つてくれと冗談を交わしたりした。今はホテルも無いし仕方なく知事の世話で共同組合の二階にベットを置いて貰つて泊つた。ダーブはあつても走る道路が無い程町も石畳のデコボコしたところだが、時折街角から仰ぎ得られるアンナプルナの威圧する程の近い景観はこの街全体の一つの白い屋根のようなものだ。後日、シュルパのことでダーズリンに立寄りカンチエンジンガも眺めたが、これも確かに大きいには違いないがボカラのアンナプルナの景観にはとても及ばない。ダーズリンのカンチは「ながめる」という感じだがボカラのアンナプルナは「仰ぎ見る」という感じだ。

ボカラに來たのは実はもう一つ目的があつたからだ。日本人として最初のヒマラヤ経験者ともいえる河口慧海師が明治三十年代にすでにここを通過つてチベットに入られたことは周知のことながら、このことがボカラの小学校教科書に載つていいると聞くことを聞いたからだ。日本を発つ前に慧海師の十回忌をやつたばかりでもあつたので、ぜひこの教科書を探してこようと思つた。早速、知事に探して貰い、まだ健在の慧海師の御遺族への土産にと、また僕自身も本屋をあさつて見たが残念ながらどうしても見つけれなかった。

ピラトナガーとダーラン

カトマンズからダージリンに出るには以前はパトナで飛行機を乗換えてダージリンの近くまで飛べたというが、今はこの空路はなく、一度カルカッタまで戻つて別の空路によらなければならぬ。旅費の節約や変つた所を見たいという欲望もあつてわれわれはダージリンに向うのにピラトナガーまで約一時間飛行機を利用し、以後は汽車で行くことにした。時間もこの方が早い。しかしダージリンのシエルパの連中がカトマンズに来るのは皆このルートを探り、ピラトナガーで汽車を棄てて以後カトマンズへは徒歩で来るのだから日数は掛るわけだ。

ピラトナガーとは一九五一年のシプトンのエヴェレスト隊や、米、仏のマカル隊の出発地点として僕は百も承知していた。しかしこの地には何か引付けられる思いがしたし、ネパール王侯連の虎狩りもここから三十哩離れたジャングルで行われるということを知っていたので、ついでにジャングルの見物もして来た。ネパールと印度との国境を带状に何百哩と走るこのジャングルを抜けるとダーランという田舎街がある。シプトン隊もマカル隊もここが彼等の山に掛る最後の街らしい街である。ピラトナガーはカトマンズと違つて見渡す限り平坦な関東平野の中央みたいな処だが、ネパール唯一の工業地帯でここには前ネパール首相コイララ氏もおり、また現国王の秘書ローク・ダルシャン君の兄弟の家もあつてわれわれはこの家に厄介になつた。翌朝早速ジープを仕立ててダルシャン君の甥、コイララ前首相

の甥との四人でダーランに向つたが途中三十哩の直線路を無蓋ジープで強烈な太陽の熱射を浴びつつ、塵舞う悪路上の驚進は相当なものだつた。途中、イチヤリという小村でジープ故障のため思わぬ時間の浪費をしたものの、結局ダーランの知事邸に一晚泊めて貰うことを余儀なくされたことも却て今となつては楽しい思い出の一つであつた。ジャングルはなるほどその中央を貫くダーランへの自動車路より一步横に踏み込めば、うつそうつたる密林で、これなら虎でも象でもいるだらうと思わせる。その入口に近い民家も南洋のそれのように床下が二間もあるのは猛獣の不意の来襲を怖れてのためだとの話を聞いた。われわれもあわよくば虎でもと思つて一応猟銃だけは用意して行つたが結局「虎ぬ狸の皮算用」となつてしまつた。

ダーランの街は直ぐ後ろに山を背負い、結局この山合いの低い処をまず越えてエヴェレストの麓、ナムチェ・バザールに一步を踏みだすわけだ。シプトンが来た時は未だモンスーンの明けきらぬ時でもあつたのでここに来るまでの一日の自動車旅行ではすこくぬかる悪路に悩まされた。シプトンの後を追つて遅れて発つたヒラリーが泥沼のような悪路の水溜りに裸体になつて、トラックを持ち上げたりしたところもこの辺だ。われわれは反対に未だモンスーンの前だつたから凄じい塵に悩まされたわけだ。その夜は運良く久振りの俄雨に見舞われ、うすら寒さを覚ゆる位であつたが知事の公邸の客となり思わぬ歓待を受けた

りした。薄暗い電灯の元に地図を拡げてシプトンの五一年の報告書を独り思出したりした。この後ろの山を越えさえすれば、後一日でエヴェレストやマカルーを七十五哩の彼方に眺めることが出来るということは、その中にも書いてあつたことだ。

戦後ネパールが初めて入国を許可するようになって、エヴェレストをネパール側から試みられるようになった当時に見れば、一応ナムチェバザールへは最短距離のことが起点とされたことは当然のことながら途中難路が多く、結局カトマンズからの路に変えられたということは後に記されてある通りだが、ネパールのこんなへんびな街でも僕にとつてはシプトンの「五十一一年の報告書」が存在する限り忘れられないところだ。

ダージリン

ダージリンでは旧知のヒマラヤン・クラブのヘンダーソン夫妻の御世話になり夜はストーブを囲んで語り明かした。早速、イギリスのカンチェンジュンガ隊の様子を聞いて見たが夫人は「それはいいない。あなた方は毎日新聞の代表であるように私はタイムズの代表なのだから……」と微笑を浮かべながらの意外な返事にわれわれもチョット驚いたのであるが、如何にも意味ありげな夫人の返事は、今から考えればもうその頃はカンチ登頂のニュースは夫人の元に入つていたのかもしれない。事実、カンチ隊のポストラナーは一応この夫人の元に来るの

であるから。そのカンチのボーイスも帰つて来るからハムを何十ポンド用意しなければならないとか、この食卓はカンチのボーイスのために大きくしたのだなどと夫人は如何にも楽しそうだった。

いまは時めくテンジンも、元はこのヘンダーソン氏の経営する広大なお茶畑の茶摘み男として育てられた。ダージリンのシエルパの殆んどはこの夫人が育ての親なのである。ヘンダーソン夫人は部厚な「シエルパ経歴書」をわれわれに示し、次回の日本隊のシエルパについて話し合つた。

「シエルパ経歴書」といつても彼等を使つた各国の登山隊の隊長が彼等に対する忌憚なき批判を書き加えた、いわばシエルパのエン魔帳みたいなものだ。

「……………次いで五月二十八日、二七、九〇〇呎のところまで荷上げをやり、結局テンジンを除いては彼が一番最高到達のレコードを保持した。難かしい所や、高いところに来ると益々その実力を発揮する、実に珍らしい人物でその底知れぬ実力については誰しも驚嘆せざるを得ない奴だ……………」等というのはハント隊長自筆のアン・ニマ二号(ヒマラヤン・クラブ No. 76)に対するチットの一節だ。

後日、第三次マナスル隊のシエルパの最後の決定に当り、このアン・ニマ二号を何んとしても欲しいと申込んで置いたものの、結局、彼の永年のサブ、ロバート少佐の御供で出掛ける

ので当方には来られなくなつてしまつたが、ヘンダーソン夫人よりの最後の来信 "He appears disinterested in the lower heights, he is not happy unless he is going high but once there he is just wonderful. I say he may be available, as I know he hopes to be going as a personal servant to Major Roberts with whom he is very friendly." それに何分相手がロバーツとあつては此方も手を引込めざるを得ない。此方にとつては巨鯨を逸した感がないでもなかつたというのが、マナスル登頂以前の当時のわれわれの心境でもあつたのだ。

事実マナスル登頂後、皆がこのロバーツとアン・ニマ二号がマチャプチャリの偵察に来ているのにポカラで邂逅したそうだが、チベット語もネパール語もペラペラなロバーツ少佐とアン・ニマ二号とのコンビネーションを見せつけられては、とてもとても歯が立たないといつわらざる告白であつた。

イギリスは勿論、各国の登山隊は一応このヘンダーソン夫人を通じてシェルパの申込をして来るが、その依頼状のつづりだけでも数冊に及び、僕はこのつづりをあたかも愛児を抱える如く見入つた。各国の山岳会が趣向をこらしたレターヘッドを見ているだけでも楽しいものだつた。それは一面、ヒマラヤの歴史でもあるが、何十年かのちには世紀の宝典となるであらう。もちろんわがマナスル隊のもこの中にチャンとつづられてあ

る。

ここ三年来、日本隊のサーダーをやつたガルツェンも個人的にはいい人間であり、またその経験も立派なものだが部下の統御力に乏しいとの定評があるので、次回は他の適任者があれば代えたらとの話も従来の隊員の間にもあつた。聞けばガルツェンは今度ダージリンに出来た登山学校の先生になるので隊について行くことは出来ないということも、既にヘンダーソン夫人からわれわれがカトマンズにいる間の来信によつて知つたので、如何しても次のサーダーを決めて来る必要があつた。

テンジンにも合つたし、ガルツェンと有名なアンターキーもやつて来た。この二人はいわばシェルパの中でも頭株に属する方だから勿論学校の先生に選ばれたわけだが、このアンターキーは部下の統御力という点からいえば第一人者だから、アンターキーを次回のサーダーにしたらというヘンダーソン夫人の助言がまず最初にあつた。

アルプスの登山史に若し合言葉というものが許されるならば「クリスチャン・アルマーとクエリッジ」などは誰しも異論のない処、しかし若しヒマラヤにもこの言葉が許されるならば「シプトンとアンターキー」等も異論なからう等と僕はアンターキーの前で独り考えたりした。

一九五一年、シプトンがネパール側からのエヴェレスト偵察に出掛けるに際し、十何年振りかでアンターキーに再会し、その

アンターキーが最近ではダージリンで商売を初めたり、アンナブルナでは抜群の功績を立てたりしているので、その道では一応偉くなり、或は功成り、却てよくあり勝ちのように人間がスポイルされてはいないかと心配したが、そんなことは杞憂に過ぎず、あの見事な弁髪を切り落して身の廻りこそはスマートボーイになつていけるけど、昔の通り無口だが、時にはあのユーモアを飛ばす彼はチットも変らずあの純真さは失つていないので安心したというようなことや、エヴェレストへの途中久振りで、錦を着て故郷のソロ・コンブに帰るアンターキーを始めシエルパ連中に村人達が家毎にする歓待、談笑のおすそわけにあづかりながら、彼が永年、理想郷と夢見ていたソロ・コンブを楽しく通り過ぎてエヴェレストに向つた等というのはシプトンの最近の感想なのだ。

「シプトンとアンターキー」について書けばいくらでもあるのだがそれは後日のこととしても、事実、僕はあの時は、アンターキーを前にして、ヘンダーソン夫人との会話などウワの空で、われを忘れて、ただ走馬灯の如くシプトン、アンターキー、アンターキー、シプトンと数限りない想をめぐらしてしまつていた。

しかし、このアンターキーも、従来のガルツェンと同じく学校の先生になるのだから、ガルツェンと代えることは難かしからうということで結局第一候補にパサン・ダワ・ラマをわれわ

れに推薦された。彼は目下スイスのドウラギリ隊のサーダーとして出掛けているので会へなかつたが、既に五四年のポストモンズーンにオーストリヤのチョー・オユー隊のサーダーとして非凡の活躍を示したことは、われわれも“Mountain World”によつてよく知つていたし、ソロ・コンブのラマ寺の出身で勿論チベット語もよく話すし、サマの昨年の事件のようなこともあつた後だから是非第一候補にしたらとヘンダーソン夫人は勧められた。ただダージリンのシエルパ組合には入っていないけど、との話であつたが、そんなことは問題でない。現に今年のイギリスのカンチェンジャンガ隊などはダージリンのシエルパは一人も連れず、全部ソロ・コンブの連中を連れて行つてゐるのだ。

実際あのチョー・オユーの彼の奮闘振りは旦那も相当なものだがシエルパもまた、正に男の中の男ともいうべきか。オーストリヤ登山界の伝統とシエルパとの完璧なるチームワークの結晶であつたといえよう。

第二の候補としてガルツェン、ヒマラヤン・クラブ一四五号——従来のガルツェンとは同名異人——を勧められた。これも今はフランスのマカル隊のサーダーとして不在だったので会えなかつたが、彼の五四年のイタリーのアピー隊の活躍振りはあまりにも有名な話。フランスの二度のマカル隊のサーダーをやり、今度はついにその登頂の栄を獲ち得た一人である。そ

れにも増して僕をして直ぐ思出させたのは、シプトンのカシニガール総領事時代のブライバートサーバントとして彼がシプトンに仕えた時のことだった。「Mountains of Tataria」やシプトン夫人の著書「Antique Land」には彼の名前が一杯出て来るし、ムスタグアータやチャクラギル、ボグドオラーの登山にはシプトンの片腕として或はシエルパとして或はサーバントとして縦横に活躍している。

まあわれわれとしても以上の二人ならまず何れを貰つても文句はないと決めて掛つたわけだ。たが一度会つて置きたいとは思つたが、今時このシーズン酣にダージリンでウロ／＼しているような奴ならどうせ碌な奴じやないのだから、却て目下山で活躍するといふだけでもこの方にとつては有難い位だ。

(注、その後ヘンダーソン夫人よりの連絡によりパサン・ダワ・ラマに交渉したところ、彼は既にアルゼンチンのドウラギリ隊のサーダーとして契約済みの由。本人としてもドウラギリを登るまでは何処の隊へも行かぬという決意の程を披歴したとの通信があつたので、第三次マナスル隊は先遣隊以来ガルツェン一四五号を採つた次第である。既に五四年、五五年と再度ドウラギリをやつた彼、パサン。あのチョー・オユーの覇気をもつてすれば彼の言葉も決して単なる虚勢ではない。むしろ彼のためにドウラギリの栄冠あれと祈るものである。)

カリンボン

当日のメニュー「Lunch a la Base Camp」は「カリンボン・ビヤール。ロングブック・チーズオムレツ………God Bless Kalimpang」。

とはその昔、一九二四年、未だエヴェレストが試みられて漸く三回目の時の報告書「The Fight for Everest」の中の珍らしい一節であるが、エヴェレストから永のキャラバンを続けてようやくカリンボンも間近くなつた或日のキャンプの夕食の一齣として或隊員はこんな即席の献立表まであの尨大な報告書に掲げているのも矢張、都会に近づく待遇しさと、キャンプ食に飽きたらしい食欲感を表わした一節としてカリンボンという地名は僕にはエヴェレストの名と共に妙に印象に残つていたし、それに近くはハラーの「Seven Years in Tibet」や多田等勸師の講演によつてダージリンなどとは違つた意味で是非立寄つて見たいと思つていた所だつたので、今度ダージリンの帰りにカリンボンに立寄ることが出来たのは年来の夢の現実化でもあつた。

遠くチベットから大廻りしてエヴェレストを専ら北側から試みていた当時は、このカリンボンが今のカトマンズの役割を果していた所なのだ。エヴェレストの連中はここで最後の準備を整え勢揃して出発して行つたのだ。

エヴェレストの連中が盛んに泊つたというチベット人のお婆さんの経営するヒマヤン・ホテルにも立寄つて見たが、色鮮やかなプーゲンビルに囲まれたこの静かなロジ風の建物はホテルというよりは Family という感じだ。

それはホテルのロビーにいた東洋哲学を研究しているという物柔かな英国婦人にまず言葉を掛けられたからでもないが、今度ネパールから印度に掛けて歩いたホテルの中でも一番落着いたホテルであつた。勿論、フレッシフィールドのいう「米の果物の楽園」の環境もまた先入観だつたかも知れないが、カンチは勿論いながらにして見えるし僕にとつてはさながら桃源郷という環境であつた。

カリンボンも近頃は中共のスパイの巢窟だから面白くないという話も聞いたが、そんなことは政治には全くウトイ僕にとつては何ら関係ないことだし、時間の都合で僅か二時間位しかここにおられず、一泊も出来なかつたのは如何にも残念だつた。

しかし、チベット通いのミュールの溜りやチベット人相手のホテルも見に行つたが、百頭余りのミュールの間を紅い布の長靴を穿いて鍔の広い帽子を冠つたチベット人が右往左往している光景を見ただけでも、ここに寄つた甲斐があつたような気がした。その昔、多田等勸師がラッサに入られるのここで暫らくダライラマからの許可書を持たれたというお寺は、この街の外れの小高い丘の上、遙かにカンチを望み得るところだ。

この街の有力なチベット人の商人の話ではラッサから香港へ直通の自動車路が完成したため、かつては物資の交易地として栄えたこのカリンボンも今はさびれるばかりだとの話だつた。

聞けばハラーの“Seven Years in Tibet”は最近英国のある映画会社によつて映画化されるそうで旬日前に撮影隊が奥地に向つたばかりだとの話だつた。

先年来、北京に軟禁されているといわれたダライラマ十四世が最近ここを通つてラッサに帰るとの噂もここで聞いた話だ。

日本からチベット語の勉強に来ている金子君はこのホテル所属のバンガローにおり、また民族学の研究に来ている仲根嬢は近くのタゴールの別荘で勉強していた。

ラッサまでは大体二十日位だとの話を聞いた時、僕は「カトマンズからサマまで、二十日位……。同じ二十日ならマナスルとラッサ。どつちがいいかな……」と心は遠くチベットの彼方に走つていた。

日本山岳会五十年史

近代日本登山史抄

沼井鐵太郎

内 容

序 言	五八頁
第一期（明三八—大五、一九〇五—一九一六）	五八頁
第二期（大六—一五、一九一七—一九二六）	六二頁
第三期（昭二—一〇、一九二七—一九三五）	六六頁
第四期（昭一一—二〇、一九三六—一九四五）	七二頁
第五期（昭二一—三〇、一九四六—一九五五）	七九頁
末尾のことば	九九頁

序 言

本篇の意図とする所のものは既往五十年にわたる日本山岳会の歴史とそれを通じてわが国登山界の業績推移の概要を記録しようとするものであるが、昭和十年（一九三五年）以前のものについては黒田孝雄が「日本山岳会三十年」ならびに「日本山岳会誌（一九〇六—一九三五）」として山岳三十年二号に発表しているので、本篇においてはその「三十年」を整理摘録すると共に補正の筆を加え、爾後の時代の史実につき新たに起稿編纂してここに「五十年史」として一括収載するようになった。ただし文化史的観点からする会員諸氏の著作図書その他作品の時代的通覧は本篇から割愛せざるを得なかった。総じて史料及び記録は「山岳」、「会報」等の記事その他広く公認されたものによつたのである。また敬称は略させてもらつた。

第一期（明治三十八年—大正五年）

一九〇五—一九一六

わが国の広義近代登山の黎明期は、明治の初期ミルン、ゴウランド、チェムバーレン等諸外人、次いで本邦人学者・探集家等の学術的並びに一般的国内探査登山に始まつたが、スポーツ的純粹登山は明治二十年代ウオルター・ウエストン師の日本

北アルプスその他高山の探検登山が嚆矢である。ウェストンは明治三十年代にも日本南アルプス等に登り、その豊富な開路的登山業績、その著書、及び後進本邦人への絶えざる指導によって、本邦近代登山の父と仰がれる第一の先覚者である。本邦人の先蹤者としてはやや遅れて本州中部地方に大量登山を流行し後年「日本の山の父」と呼ばれた木暮理太郎、明治三十年来日本北及び南アルプスにけんらんたる探検登山をしてその文学的作品をもって早くも本邦登山界の第一人者となった小島久太（鳥水）がある。これよりも先に、自ら登山はしなかったが、新しい風景上の観点を紹介し、わが国独特の山岳美・溪谷美を説いた「日本風景論」の著者志賀重昂の登山界に与えた影響はまた大きなものであつた。

明治三十八年十月十四日東京で日本山岳会最初の会合が行われた。それはまず日本博物学同志会の支会としての山岳会設立の相談一決であつたが実際問題としてその日は日本山岳会の発祥ということに外ならない。その出生は間接にはウェストン、志賀両先輩の指導と影響、直接には小島鳥水「日本山嶽志」の編纂者高頭仁兵衛、日本博物学同志会の武田久吉・河田黙・梅沢親光・高野鷹蔵・鳥山悦成、山草会の城数馬（以上鳥山を除き発起人）の熱心な協力実行によつたものであつた。それに会の創立に關して相談相手になつた志村寛その他の人々もあつた。高頭が会の当初の経営において個人的に基礎的な財政援助

保証をしたことは知る人ぞ知る。会の機関誌「山岳」が創刊されたのは明治三十九年四月五日である。

明治四十二年五月「山岳会」という創立当時の名称が「日本山岳会」と改められた。しかしながら支会という従属的の肩書は既に「山岳」創刊号から影をひそめてしまつてゐた。会の目的は当初から現在に至るまで山岳に關する研究という筆頭項目は不変であり、行為としての登山を尊重する精神は不易であるが、時代の氣風に相應してその表現並びに細則的重心の在り方には変遷がある。また事務を処理する役員は「本会は会長を戴かず、幹事若干名を置きて事務を処理せしむ」とあり、この規定は昭和六年まで何の不都合もなく守られた。この伝統精神は社団法人となりかつまた日本体育協会への参加団体となつた今日においても颯々として貫かれ、會長制となつてもそれは謙虚な、会員のための公僕であり、役員全体の組織・待遇・会務運営において徹底したアマチュアリズムとデモクラシイの横溢するものといつても過言ではあるまい。

日本山岳会の会員数は創立當時三九三名であつたが、明治四十二年頃から六〇〇名前後となつた。

会の事業の内主要なものは、初期にあつては機関雜誌「山岳」の毎年三回発行と年一回の會員大会とであつた。次いで「高山深谷」という写真集が大正六年までに八輯出版された。自ら登山会と標榜しない日本山岳会は、戦後国体行事に参加するまで、登

山会を主催しないのを誇るべき、しかし一面頑健な伝統として打ち続けていた。けれどもこれは会員の登山活動を毫も阻止することにならず、かえって会員各自または小グループの会員と同志に自らの創意に基づく先蹤行的登山の実践を刺激し奨励する結果ともなったようで、それこそ後年現役学生を主体とした諸学校山岳部その他の特殊性を持つ山岳団体の勃興発展を来した一素因であつたようにも考えられる。とまれ会員個々の登山業績は「山岳」誌上の会員通信動靜、集会における講演報告、機関誌その他での報文、写真等の図版となつて現われて、行事に伴われない会の公認記録となつた。勿論会の報告「山岳」各号は創立以来国内諸会の外に英国山岳会を初め世界諸国の関係諸会に送られて、その名その内容は専門的ではあるが広く知られていたのである。

第一期登山新業績を通覧するに、この時代会員の足跡は略、日本アルプスに限られたといつてもよく、開略的記録がその山系で次々に作られている。明治三十九年小島久太の燕（二七六・三・四米）・常念（二八五七米）、志村寛・高頭式の針木・立山（三〇一五米）、林並木の槍（三二七九・五米）・笠（二八九七・五米）、辻本満丸の鳳凰（二七六〇米）・地藏、荻野音松の新沢峠（二二二〇米）・三伏峠（二五八〇米）、志村の烏帽子岳（二六二一米）・鷲羽（二九二四・二米）、武田・梅沢・鳥山の西側より、の甲斐駒（二九六五・六米）、四十一年石崎光瑠の立山・針木、

三枝威之介の白馬（二九三三・一米）・五龍（二八一四・一米）縦走、小島・高頭の白峰三山・地藏・鳳凰、四十二年辻村伊助の槍・烏帽子、鶴殿正雄の穂高（三一九〇米）・槍初縦走、明治三十三年の柴崎測量隊に次ぎ石崎光瑠の剣岳（三〇〇三米）、辻本の薬師（二九二六米）・上ノ岳（二六六一・二米）、高頭・小島・高野・三枝・中村清太郎・茨木猪之吉の悪沢岳（三二四六米）・赤石岳（三一二〇米）、山川黙の三峯川・荒川岳（三〇四六米）・仙丈（三〇三二・七米）、四十三年辻本・中村・三枝の鹿島槍（二八八九・七米）・針木峠（二五四一米）、中村・三枝の薬師・双六（二八六〇・三米）・槍、小島・高頭・高野の槍・薬師、辻村の高瀬川よりの槍、四十四年辻村の四月積雪期上高地、小島の穂高・槍・明神岳、榎谷徹蔵・長谷川如是閑・戸直蔵の鹿島槍・針木・蓮華（二七九八・七米）・七倉（二五五一・一米）・烏帽子・槍の縦走、吉沢庄作の黒部川北股・柳股・黒薙各溪谷、高野の白馬から祖母谷下り、辻本・星忠芳の鋸（二六七〇米）・駒・地藏、四十五年鶴殿の奥穂高・西穂高（二九〇八・六米）、小島の甲斐駒・鋸岳最高峰・仙丈・間ノ岳（三一八九・三米）・塩見（三〇四六・九米）、中村の光（二五九一・一米）、赤石縦走、及びその年から三年間ウエストンの北アルプス諸峯登山等が明治末期の主な記録的登山であつた。

大正年代になつて会員の目指す新地域は更に拡大、かつ登山形式の変更も見られるようになり、大正二年田部重治・木暮理

太郎の案内人夫なしの槍・薬師・立山・剣、武田・梅沢の三峯川・荒川岳・仙丈、三年小島一行の双六谷廻行・笠、冠松次郎の広河原から白峯（三一九二・四米）、木暮の上河内岳（二八〇二・九米）・赤石、四年中野善太郎の飛騨側から奥穂高・西穂高、木暮・田部の毛勝（二四一四・四米）・猫又（二三七八米）・剣・黒部川・赤牛（二八六四・四米）・黒岳（二九九〇米）・野口五郎岳（二九二四・三米）、小倉伸吉の赤石・塩見、そして大正五年には伴野清の槍・穂高、田部・木暮の朝日（二四一八・八米）・雪倉（二六一〇・九米）・白馬・針木の縦走等が報告された。

かくの如き日本アルプス登山新記録の黄金時代に、国内他地域にも相当注意するべき登山が行われた。明治四十年大平晟の飯豊川からの飯豊山（二一〇五・一米）・月山（一九七九・五米）・鳥海山（二三三〇米）・マツカリヌプリ（一八九三米）、城数馬一行の朝鮮白頭山（二七四四米）、野呂寧の台湾大武山（三三三一・八米）、大正二年野呂の台湾合歡山（三四一六・一米）・合歡山東峰（三四一八米）、三年野呂の南湖大山（三七四〇・七米、文化史的初登は実は明治四十三年小島仁三郎・坂井時彦両警部の一行）。因みに大戦前日本最高の新高山（三九五〇米）は明治二十九年九月長野義虎中尉一行によって初登されたと推定されてる。

また、奥秩父の山々が注目され出したのも明治四十二年頃で

同年秋に南日（田部）、木暮が三峯から甲武信（二四六〇米）・金峰（二五九五米）まで縦走したのに始まり、奥秩父の谷は木暮、田部、中村、辻本、冠諸先輩者を主としてあらゆる時期に会員達によって踏査された。また、尾瀬の山岳・湖水・湿原は、夙に山岳会創立当時早田文蔵の研究旅行、大下藤二郎の画筆の山旅にその真価を知られ、武田久吉の日光・尾瀬採集登山となり、志村鳥嶺、関口泰等の踏査もあって、燧岳（二三六〇米）、会津駒ヶ岳（二二三・四米）等幾度も登山され、尾瀬西境での最高点至仏山（二二二八・一米）も大正三年星大吉及び沼井鉄太郎の登頂記録する所となった。

以上登山記録は特に記さない限りは夏山のそれである。

第一期最後に日本山岳会員の海外での登山に触れなければならない。明治四十三年八月加賀正太郎は歐洲アルプスに遊んでユングフラウ（四一六七米）に登山したことを報じ、その他にもアルプス行の日本人は若干あるにはあったが、国内登山界に大きな影響を与え好刺激となった最初のものは、大正三年瑞西に遊んだ辻村伊助の行動とその名著「スウキス日記」であった。特に近藤茂吉と同行、スイス山案内達と共にベルナー・オーバーランドの山々を登り、最後にグロス・シュエックホルン（四〇八〇米）よりの下山で雪崩にあつて遭難し、まず大過なきを得たが、その行程は邦人パアティとして始めてのアルプスでの險路であり、優秀な登山技術を要求されたものであった。

右の海外での邦人登山と共に、或いはそれ以上に国内人心に影響を与えたものは、第一期中頃における白瀬・中尉の南極探検隊の業績であった。明治四十三年十一月開南丸で二十七名出帆、四十四年三月ロス海から引返してシドニーで再挙をはかり、四十五年一月鯨湾から南極大陸に上陸、白瀬隊長以下四名の突進隊は同月二十八日南緯八〇度五分、西経一五六度三七分の地点まで進み、一帯の水原を大和雪原（やまとゆきはら）と命名した。また沿岸支隊はエドワード七世半島に上陸してアレキサンダー山を探検した。この探検最後の一九一二年ノルウェーのアムンゼン隊が最初の南極点到達を果したのであった。

第二期（大正六年—十五年）

一九一七—一九二六

第二期において日本山岳会の変遷の内最大のものは大正八年の会則改訂であり、その時新たに規定された評議員制度は、性格的に現今なお保持されている。また創立以来幹事は発起人の外に第一期に辻本、中村、三枝、辻村、木暮、近藤茂吉等が選ばれたが、第二期には田部、冠、鳥山、六嶋、高田の外に、各学校山岳部出身者及び関係者の榎有恒、藤島敏男、沼井鉄太郎、別宮貞俊等が加わって、時代の推移に相応した。また、会の事業にも第一期からの有志晚餐会と年四回の小集会が加わった。この小集会は学会の定例報告会、競技団体の記録検討公認機関

にも相当するものであつて、懇親の目的を達成すると共に新研究・新報告を聞き自由討論談話する有意義な会合であり、勿論現在まで色々な形で活潑に存続されている。なお大正五年秩父破風山（二三一七・六米）における一高出身者等の遭難事件で、登山の危険が一般に問題とされて来たのに鑑みて、大正六年六月「登山の注意」という小冊子を日本山岳会が発行頒布したことも特記されてよい。

第二期における会員の登山記録として残るものは、前期の如き日本アルプスの新記録は夏山では少くなって、その中頃からの傾向として日本アルプス以外の山岳の記録が多く見られる。

一般登山界の日本アルプスに対する興味は、先輩達からまず学生群に拡がり、第一期に始められた縦走登山形式は直ちに若い世代の人々に熱心に信奉実践された。

その学生群は日本山岳会の支援もあって、大正の初期から諸学校に現出した山岳部、旅行部等の人達を主とするものであった。学校山岳団体内記録上最古の創立は明治二十五年（？）四高旅行部、次いで四十三年一高旅行部、四十五年北大スキー部であるが、大正に入るや陸統として各校に設立され、大正十五年までには富山葉専、慶大、東京高師附属中、五高、二高、三高、七高、学習院、商大、早大、東大、京大、関西大、新潟医大、立教大、日本医大、中央大、青山学院、東京農業大、法政大、明大、松本高、成蹊高、山形高の諸学校に山岳部、スキー部、

スキー山岳部、旅行部等種々な名称の学校登山団体が設立され、箇々の登山活動の質的量的発展と共に、同学同年輩による堅い団結のパーティ精神と高い理想のクラブライフを着々と体得して行つて、後年日本登山界を代表しリードする程の一流登山家を輩出する萌芽を育くんではいたのであった。

日本アルプスにおいてこの時代までに取残された未開発領域の一是溪谷であつた。前期にも双六谷探検の如き著しい例はあつたが、第二期最も顕著な溪谷探検は黒部川峡谷に見られる。

まず冠松次郎が御山谷を下つて黒部に入り平に溯つた大正七年頃からがいわゆる黒部川時代である。その後黒部の絶嶮下廊下を目指して入った人々は、冠、近藤、木暮、中村、沼井外数名があり、大正九年田中喜左衛門が平から薬師沢出合まで上廊下を溯り、大正十四年八月冠・沼井・岩永信雄の一行が鐘釣から榊小屋沢落口を経て平ノ小屋まで溯行を完成して黒部探検の第一期を終り、次いで釼沢・黒部別山・内蔵助沢・御前沢そして上廊下等の絶嶮を中心とする第二期の精査探検が、冠を中心として岩永、別宮、渡辺漸等との共同の組その他のパーティによって遂行されて行つた。ただしこれは本篇の第三期にかゝっている。

日本アルプス登山の新分野は、スキー界の発達そして邦人海外登山の直接間接の啓蒙による積雪期登山と、夏山冬山をひっくり返るの所謂ヴァリエーション・ルート（登路変更）、岩登りを主とする困難な側の登攀である。後者の著しい記録は、大

正六年夏齊藤新一郎等慶大山岳部の釼岳主稜（北尾根）小窓まで完全通過、十一年夏舟田三郎等早大山岳部一行の槍北鎌尾根を独立標高点ピーク（独標）まで案内人夫を伴わない第一下降兼往復と殆んど同時に板倉勝宜等学習院一行の高瀬川源流から通しての文化史初登攀を記録、十二年夏慶大青木勝等の小槍完登、早大一行そして別箇に学習院一行の釼・ハッ峯初登攀、十三年夏青木勝等慶大山岳部員の穂高淵沢からの前穂高北尾根初登攀、十四年夏藤木九三等R・C・C・メンバー及び早大山岳部一行の別々の穂高滝谷初登攀、三高山岳部OB今西錦司・渡辺漸の釼源治郎尾根初登攀、そして開路の著しい記録をも兼ねて大正十年七月冠の聖沢・聖岳・遠山川通過がある。

日本アルプス以外では、奥秩父の開路記録は大正七年頃で終り、以後木暮、田部、冠、岩永、黒田正夫等が笛吹川・荒川の源流地探検に新味を見出すに至つた。上信・上越国境界限の山岳が注目され始めたのは第二期からで、大正五年辻本の笠（二〇七五・八米）・横手山（二三〇四・九米）、中村清太郎に次いで日高信六郎の武尊山（二一五八・七米）、六年森喬・日高の白砂山（二二三九・七米）、七年辻本の岩菅山（二二九五米）、十年木暮・藤島の利根川水源地の山々、藤島の仙ノ倉（二〇二六・二米）・茂倉（一九七七・九米）・谷川岳（一九六三・二米）、十五年松本善二の蓬峠（二五〇〇米）・三国峠間の上越国境山稜縦走、群馬県庁一行の利根川源流・丹後小洞・大水上山

より縦走等の先蹤者記録がある。尾瀬・南会津・北越地方にもこれに相応した記録と流行が見られた。特に尾瀬は赤城山（一八二・八・三米）及び日光の山々（最高奥白根山二五七七・六米）と組合せて、学校山岳部の夏期日本アルプスに入る前の班などにとり入れられる風潮ともなった。

次に奥羽地方の山々は、第二期において大正五・六年頃二高山岳会によって南蔵王諸峰（最高昇風岳一八一七・一米）の新境地などが紹介されたが、奥羽地方で最も複雑性と相当な高度を持った飯豊山塊、朝日連峰などが注意され始めたのは大正の中頃からであった。大正十一年夏期安齊徹教官以下の山形高校山岳部一行の朝日連峰縦走記録、沼井・別宮・小林文平の飯豊川・羽越国境・飯豊山・大日岳（二二二・八米）・玉川溪谷・地紙山（一八四九・六米）・石コロミ沢の頭（二〇二・四・八米）・米飯豊山、十四年中由伸直・坂岡奈保志・河田寛の大井沢・出谷川・以東岳（一七七・一・四米）・大朝日、十五年吉沢一郎の川野・大朝日・以東岳・大鳥池等の記録がある。

北海道の夏山については、この期小泉秀雄が植物調査を主として大雪山（二二九〇・三米）などの中央高地を跋涉し、竹内亮が石狩川上流の山々を登山し山中風物とその生活を具さに紹介して以来一般の注意をひいた。学生群中では大正九年北大學生が十勝岳（二〇七七米）に登り、同年慶大田中三晴等がトムラウシ山（二二四・一米）・石狩岳（一九八〇米）に登っている。

次いで日高山脈・夕張岳（一六六七・八米）という順に地元の北大の人々によって登られているが、その多くは積雪期登山であった。

翻って本州中部の妙高山（二四四五・九米）を含む頸城山塊では、火打山（二四六二米）焼山（二四〇〇・三米）の一群が大正六年田中薫、十年冠によって登山紹介された。

最後に東京近郊の山として大菩薩連嶺（最高二〇五六・九米）や丹沢山塊（最高蛭ヶ岳一六七二・六米）が注意され始めたのも第二期のことである。これに少し遅れて道志山塊・御坂山塊（最高黒岳一七九二米）、武相国境の山々などが冬の低山という一種の魅力で見直されて来た。その他関東にあっては西上州の山々、関西にあっては六甲その他の岩場群、京都附近比良、名古屋からの鈴鹿の山々も、大都会からの短時日の景観々賞、鍛錬或はリクリエーションの立場から取り上げられて来たことも今期に始まった特色である。

さて次に第二期における積雪期登山の記録であるが、既に第一期以前から寒中または雪中富士登山が旧登山講中や學術調査隊等によってしばしば反復された。しかし近代スポーツ登山としては大正二年鶴見宣信一行の吉田口からの富士スキー登山、次いで三年一月角倉邦彦の御殿場口からの富士登山がある。また上高地方面には大正の初期独逸人のスキー条痕がつけられたが、判然たる記録としては、七年三月田中喜左衛門・関西スキ

イクラブ員の徳本峠・上高地・平湯スキー行、八年三月板倉勝宣の常念・上高地・徳本峠スキー行、九年三月慶大の杓子岳、十年三―四月笹川速雄一行の越後側からの白馬、四月四高の輪かんじきによる針木越、同月板倉一行の常念・槍試登、十一年三・四月慶大三田幸夫等の立山・剣・及び同青木勝等の薬師・太郎兵衛平、慶大・帝大混成バアテイの槍登頂、早大の乗鞍・上高地、五月早大の槍・南岳（三〇三二・七米）、十三年一月早大の槍、三月四高及び伊藤孝一一行の前後しての針木越・立山、十四年及び十五年一月早大の大沢を中心とした針ノ木連峰、十三年一月榎谷徹蔵一行の上ノ岳（二六六一・二米）、八高バアテイの木曾駒本岳（二九五六・三米）、三月慶大大島亮吉等の溜沢からの奥穂高・本谷からの北穂高、同青木等の前穂高、四月早大舟田三郎等の西穂高、学習院の岡部長量等の岳川からの奥穂高、慶大の燕・大天井縦走、五月一高バアテイの赤石岳、十四年三月四高バアテイの薬師岳、成蹊高バアテイの笠ヶ岳、三高西堀栄三郎等の仙丈・北岳・間ノ岳、四月一高バアテイの爺岳（二六六九・八米）、十五年一月慶大の甲斐駒・仙丈、三高の黒部東沢からの黒・赤・野口五郎、赤牛岳、四月三高の杓子及び五龍岳等を主要な新業績とする。

以上日本アルプスの分の外に、本州中部奥羽、北海道においても積雪期登山の新記録は少からず、大正九年三月慶大の小谷温泉・乙見山峠（一五四〇米）・笹ヶ峰牧場越え、十年一・二・

十二月慶大の蔵王山（一八四〇・八米）・吾妻山東部（最高一九四八・九米）十三・十四・十五年冬期沼井・別宮・岩永・小林文平・吉田稔己の大朝日岳（一八七〇・三米）、十五年一月慶大の尾瀬燧岳、四月高橋文太郎等明大バアテイの至仏山その他のスキー登山などの外に、特に北海道の冬山につき著しい記録の果進が見られるがここに掲記できなかったことを遺憾とする。

さてまた第二期における本邦の属領地及び海外での登山業績をも一覽してみよう。まず樺太においては、大正九年三月鈴谷岳（一〇二二米）が六鹿一彦一行によってスキー登山されている。また朝鮮では大正年代杉本良その他の諸バアテイによって再三白頭山が登山されている。しかし属領地の内最も特筆するべき登山業績は台湾の高連山地で作られたものであった。即ち当時日本の第二位の高峰次高山（旧名シルビヤ山、三八八四米）は前期末の大正四年財津久平等測量隊の一行によって登頂記録され、大朝尖山（三五七三・三米）へは大正五年財津・伊藤太右衛門・石田貞助の一行の試登があった。新高山に大衆登山の第一回が大正七年に見られて、台湾も内地と同じく探検時代が終局に近づいていることを示した。数々の探検登山と文化史的初登（内地登山界の初登も殆んど総てがこれである）があるけれど、大部分の記録は官庁警察の調査または討伐登山で、日本山岳会員としての分野は、僅かに大正十五年五月北田正三一行の沙里仙溪・新高北山（三八三三米）・主山（二九五〇米）・東山

(三八八三・六米) くらいが新記録になり得るのみである。

次に第二期における日本山岳会員その他邦人の海外での登山であるが、大正十年九月、榎有恒はアルプス諸峰を登った後に、スイス山案内のアマター、ブラヴァンド、ストイリ等と共にアイガー(三九七五米)、東山稜を初登攀完登した。この山稜は世界一流の登山家・山案内達が数回試登して撃退された程難峻とされていたものだったが、榎のバアティは釣付特殊ポール以外は何等のサポートもなくして登攀を完成したものだ。前期末の辻村とこの榎、両正統派登山家の言行と著作(榎には山行の名著がある)、指導が本邦登山界に与えた影響は甚大である。そして榎のアイガー登攀以後日本の内外における近代登山の発展は著しいものがあり、大正十四年夏期には榎有恒、三田幸夫、早川種三、岡部長量、波多野正信、橋本静一等の一行が細川護立侯、大毎・東日新聞社後援の下に日本山岳会主催の名目で、カナディアン・ロッキイに峻難をもつて識者に注意されていたマウント・アルバータ(三五九八米)に遠征し全員初登頂するという大記録を挙げた。一方また北米太平洋岸に在住する日系市民並びに渡米日本人でレイニア(四三九二米)、シャスタ(四二九一・五米)、フッド(三四〇一・五米)、ベエカア(三二五一・五米)、シュクサン(二九六九米)等に大正年代登攀した者が少からずあり、古谷久三、東良三、小島鳥水等の登山記録及び北米山岳に関する著書等文化的寄与をも忘れては

ならない。また大正七年モンスーン後に鹿子木員信がカンチエンジュンガ(八五七九米)南方のオクラタン氷河に達し黒カブア等に登攀したことは、明治三十二年来河口懸海師の六ヶ年二回に渡る印度・西藏・ネパールの山越え、その後矢島泰次郎または青木文教師の西藏入り等前期の業績、今期石崎光瑤等画家の奥地サンダクフ行等と共に、本邦人ヒマラヤ接触先蹤者記録として記憶されるべきものである。

最後に特筆するべきものは、第二期末英国に滞在されていた秋父宮殿下が大正十四年夏スコットランドのベン・ネヴィスに登られ、同年冬瑞西アレッチ氷河からグリムゼル峠へのスキー山旅、十五年八・九月ベルナーオーバーランド及びヴァリスの高峰を十余座登攀されたことで、それは国民に大きな驚きを、そして登山する者に大きな喜びと励ましを与えられたのであつた。

第三期(昭和二年—十年)

一九二七—一九三五

昭和六年日本山岳会は会則を變更し、役員として会長、副会長、評議員、理事(十五名)及び監事を置くことになり小島久太が初代会長になつた。そして九年からは高頭義明、十年十月からは木暮理太郎がそれぞれ会長になつた。副会長は初め高野、榎、九年から木暮、松方、そして監事は木村鉦吉であつた。理事(昭和六年までは幹事)は昭和四年に松方、岩永、田

中菅雄、渡辺漸、五年にはその増員により松本善二、角田吉夫、藤田信道、関西側より榎谷徹蔵、田中喜左衛門、山崎彦麿、七年から茨木猪之吉、神谷恭、伊藤秀五郎、中原繁之助、加納一郎、津田周二が新任、八年からは毎年理事定員数の三分の一を新陳代謝することになった。

さて日本山岳会の事務所、会計取扱所、編輯所等は創立以来便宜上役員個人の居宅に別々に置かれてあつたが、昭和四年會員有志の基金を得て虎ノ門の不二屋ビル三階に図書室兼集會室を新設したのを機として、六年に編輯所、八年には事務所も其処に移つて、始めて会の運営箇所が一括された。関西支部も十年七月から大阪に確立されたそして九年十二月末で會員総数は八百十九名となつた。

会の事業としてまず集會は、年次大会、小集會は前期同様継続され、関西でも小集會が開けるようになった。その他に二十五周年、三十周年紀念講演会または大会、山岳図書展覽会などがあつた。また出版では年三回の「山岳」の外に昭和五年十月以降月刊の「会報」を発行し、親睦・速報・情報の機關とした。更にまた劃期的の試みとして昭和五年六月「山日記」一九三〇年版を出版、以後重要な会の事業となつて毎年資料を更新して出している。山日記編輯当初には役員角田吉夫の献身が最大のものであつた。なお昭和十年三十周年紀念事業の一として山岳遭難救助機關設置に関する懸賞募集をした。

さて日本山岳會員個人の登山記録が日本一の代表的かつその殆ど総てであつたのは第一期から第二期の初め頃までであつて、前期後半以来岩登り、積雪期登山の分野における記録と、また残る所の開路的新記録までも、個人よりはパーティまたはチーム、特に諸学校山岳部の現役学生及びO・B群の手に移つて行つたが、第三期以後は別してその感が深い。しかしながら一時日本の登山界の主導性を把握しようとした登山学生連盟の如きも、結局はリーダーの多くが日本山岳会の陣営に發展的に介入し化感されるようになって今日に及んでいるため、日本山岳会史の内に大部分その団体会員である学校山岳部・山岳団体の著名な登山記録を包含しても決して無縁の座ということは出来ない。ただし記録取扱いの困難さは「日本山岳会三十年」の著者のいう通りである。

大きなルートの開路の登山は、日本アルプスでは前期末で終つたが、岩登りを主とするヴァリエーション・ルート（登路変更）の開拓は今期に至つてますます盛になつた。峻険な、困難な側の登攀とそれを楽しむための便宜上、放射線の登高形式が取り入れられて、穂高瀧沢生活、剣沢生活、鹿島のカクネ里生活などが各学校山岳部の計画中に加えられるに至つた。新登路記録は一々ここに収録する余裕はないが、たとえば穂高方面では小檜西壁、奥穂高南壁、ジャンダルムと瘤尾根、明神岳東面・南面、前穂高東面、北穂高飛驒側などに今期多くの記録が残さ

れている。また、劍岳ではハッ峰を中心として京大高橋等のその側壁開拓やクレオパトラ・ニードル、三窓チンネなどの初登があつた。また、昭和五年冠等が東尾根から登攀して以来、鹿島槍が岩場として注目され、六年八月R・C・C・の高橋敏三のカクネ里からの北壁試登があつたが、カクネ里に入つてその北壁登攀を本格的に始めたのは今西錦司等京大パーティであつた。京大パーティは南アルプス北岳バットレスにも登攀線をついた先蹤者でもあつた。また、九年九月早大パーティは劍岳生活中三窓チンネ正面・劍長治郎側バットレス直登等の新ルートを開いた。

岩登りと同時に積雪期登山者が異なる分野を本格的に開拓し始めたのもこの時代からである。この冬・春の雪山行も開路的——最も容易安全な——登山から始まつて困難な側からの登攀、時期としても最も条件の悪い厳冬期に待機しての登攀にまでも忽ちの内に技術的に飛躍して行つた。雪崩その他による重なる遭難も毫も若きアルピニズムに燃える新登山者群をひるませず、登攀そのものも著しく科学的に研究・管理されるようになった。記録中重要なものを拾ってみると、槍穂高連峰では昭和三年一月慶大の北尾根からの前穂高、農大の西穂高、六年四月甲南高および早大の天狗のゴル・西穂高縦走、十二月東大の奥穂高南面、同十二月乃至七年一月立教大の槍から前穂高、同期学習院の槍・西穂高縦走、七年一月東大の前穂高三峰北壁・コブ

尾根、三月松本高の奥又白から前穂高、十二月同校の屏風岩二ルンゼ、そして早大山岳部は七年三月以来穂高の飛騨側を目がけて登攀を重ね、ついに九年には積雪期の第四尾根を完登して滝谷登攀史にひとまずピリオドをうつた。

後立山連峰では昭和二年十二月小池文雄等の大冷沢北俣中岩沢から鹿島槍(試登)、五年三月田中伸三の白馬岳主稜初登攀、逸見・小原の布引沢からの鹿島槍、四月神戸商大の鹿島槍鎌尾根、十二月堀田等の同鎌尾根完登、六年二月加藤文太郎の単独西俣から鹿島南槍往復、三月京大の蓮華温泉から朝日岳(二四一八・八米)と五龍・鹿島槍縦走、伊藤恩等の白馬・爺縦走・堀田・小原の黒部東谷からの鹿島槍及び五龍、五月田口一郎等の一ノ沢から鹿島槍東尾根、七年十二月から八年一月にかけて立教大の白馬から爺の種池小屋まで完全縦走、三月小原の天狗尾根より鹿島槍、四月田口二郎等の三ノ沢から鹿島槍東尾根、九年十二月立教大の末端からの鹿島槍東尾根完登、十年春今西寿雄等のカクネ里奥ノ沢右ルンゼから鹿島槍北壁積雪期初登攀等であつた。また、劍岳に関しては昭和四年五月慶大のハッ峰・源治郎尾根、同年高橋健治等の早月尾根、六年三月京大の小窓谷、七年四月慶大のハッ峰、東大・早大合同のハッ峰並びに東大小川登喜男の源治郎尾根単独上下、八年三月同志社大の早月尾根、九年三月立教大の四班に分れての劍岳集中登山等があつた。また北アルプスの他の山では昭和二年三月法政大の笠、

三年京都医大の薬師・上ノ岳、立教大の薬師・上ノ岳・五郎・双六・黒岳・五年末から六年一月にかけて加藤文太郎の薬師・鷲羽・黒岳・烏帽子、七年二月槍肩から双六・笠への往復、八年一月小池文雄の赤牛岳等がある。また、御岳（三〇六三・四米）へは昭和三年一月法政大バアティの積雪期初登、ついで八高、五年には岐阜高農バアティの飛騨側からの登行がある。木曾駒では五年一月八高の本岳・宝剣岳（二九三三米）、五月松本高、六年三月慶大バアティの宝剣岳南稜、八高の南駒ヶ岳（二八四二米）、小池文雄の空木岳（二八六四・二米）の登山があり、ついに十年一月には織田明・田中太郎によつて本岳・南駒間の冬期縦走が完遂された。

南アルプスの積雪期登山では、昭和二年一月早大バアティの塩見岳、四月一高バアティの塩見・仙丈・白峰、十二月慶大バアティの赤石・悪沢・聖、また立教大バアティは同年三月鳳凰・地藏、同三年一月慶大の北岳、五年一月立教大の赤石・悪沢、慶大の鋸岳がある。なお北岳・塩見岳間の長い縦走ルートは昭和十年三乃至四月高木正孝・織田明・小林太刀夫・田口二郎の一行によつて果された。

上越国境谷川岳へは昭和二年三月大島亮吉・大賀道員等が始めてスキーで入り雪穴の試みもあり、五月大島等は芝倉沢を登りマチガ沢を登攀したのが、同七月一ノ倉・幽ノ沢等の偵察行と共に谷川岳登攀史の初期の頁を形造るものであつた。上越の

他の山々、奥羽地方、北海道においても数多くの積雪期登山記録が生れたが、登山家群として北海道における北大山岳部の行動と指導的立場は広く認められたものであり、その指導者中の木原均、加納一郎は後年それぞれアジア大陸内部探検に関する学界並びに極地研究に名をなすに至つた。

第三期における本邦外地の登山業績もめざましいものであつた。千島の山々が登山家の側から如実に注目されたのは、北大山岳部が大正末期阿頼度富士（二三三九米）に登つたのが最初であつたが、その後昭和四年岡田喜一・長谷川伝次郎・瀬川孝吉がチャチャスプリ（一八四五米）に、六年岡田は千倉岳（一八一五米）・後鐵岳（一七七二米）に、七年小泉秀雄が單冠岳（一六三九米）に、同年三高と同志社大学のバアティが千倉火山列に登り、八年京大及び三高が国後島に遠征隊を送っている。

台湾では第二期末年台湾山岳会が創設され、一高・東大先輩の生駒高常・杉本良と沼井鉄太郎等が中心となつて活動し、急速に近代的スポーツ登山の發展を遂げて行つた。本邦領土内高峯で人類としての初登頂が昭和二年八月生駒・沼井等の一行によつて大霸尖山（三三三・三米）の巨岩峰に試みられて成功したのを初め、三年夏これに次ぐ峻峰中央尖山（三七〇三・四米）が台北一中隊・鹿野忠雄の組によつて登頂記録され、五年一月沼井等の新高山各峰の岩登、同四・五月吉井隆成等官庁側探検隊のシンカン山（三三八一）・雲峰（三五六九一）・ラゴ

スタウラ山(三六一・一米)・ブラクサン山(二九九・一・八米)の大規模の縦走、同五月八木久左衛門一行の関山(三三六・六・七米)登頂、小林勇夫一行のロンダブン山(二九四・七・六米)・丹大山(三三七・〇・九米)・関門山(三〇五・二・四米)・王武塔山(二〇一・三米)縦走、同月英人マレー・ウォルトン、ケー・シー・グロース及び沼井一行の次高山北方山稜・カラントックン(三七五・八米)及びムトロップ(シミタ、三七二・一・一米)二高峰の登頂記録、同六月近藤盛雄一行の尖山(三三二・一・六米)、同十一月山林調査隊の丹大山・ウラモン山(三八〇・六・一米)間主要部分の文化史的初登がなされた。昭和六年には一月中崎大三郎・浦上郡太郎の冬期大覇尖山登攀、同三月台湾山岳会・台北高校合同パアティの春雪期同山登攀、同七・八月本邦無双の高連峻峻所謂「聖なる稜線」の大覇尖山・次高山の縦走は台北高校、北田正三・井上一男・宇佐見守一行及び台湾鉄道部山岳部員一行の三組によつて遂行され、特に北田は大覇尖山岩壁南面チムニーのルートを単独初登攀し、全縦走路中の最難関シミタの嶮もその一行によつて完成通過されたのである。また、鹿野忠雄は次高山附近を精査した後台湾山系中部最深奥の地域にウラモン山等の新方面よりの登頂、南玉山(三三九・一・二米)、新高東山北東ルンゼよりの新登頂、九月になつて東郡大山(三六〇・四・五米)・マシヨゾカン山(二二四・六・一米)縦走、マリガナン山(三五六・六・七米)・ウラモン山縦走等長期大量

登山を果たした。また、七年畢祿山(三三七・〇米)・中央尖山・南湖大山を一貫しての大縦走が台湾山岳会の千々岩助太郎一行によつて遂行され、山地蕃人々夫統御上の難問題をアマチュアとして解決した一好例であつた。昭和八年には冬期新高山、中央尖山、寄萊主山(三五五・八・九米)にパリエーションと岩登りや、中級以下の山岳に新味ある登山も見られたが、も早大きな開路の登山は見られなくなり、内地同種の岩登りを混える登山者主体の近代登山形式が冬山にも見られた。その内夏期の台湾山岳会(沼井)、立教大(小原勝郎ほか三名)、同志社大(児島勘次ほか二名)の三者合同になる新高山各峰登山を行い、その内新高東山東峰北稜Iから児島・入江保太・沼井の初登攀が最も顕著な記録であつたことと、児島・塩見正の大覇尖山・次高山縦走中ムトロップ山(シミタ)北壁を児島及びタイヤル族のウタオ・ナウイの二人が下降を敢行したこととの二つは代表的記録である。九・十年も台湾での傾向はますます中央登山界のそれに近づき、積雪期をも交えてより困難な側のルートの開拓が、新高山、南湖大山、中央尖山でなされ、南湖大山・畢祿山・合歡山・寄萊主山・能高山(三三四・九米)の断続的大縦走も神戸商大パアティによつて九年七・八月に行われ、大武山・霧頭山(二八二・一・一米)の縦走も千々岩等一行によつて十年一月に果された。また、十年二月渡辺義孝は合歡山で台湾高山上最初のスキー条痕を印した。都市近郊、低山岳地での岩登り、谷

渉りの研究的小登山も内地流に活潑になつて来た。

さてもう一つ大きな本邦外地朝鮮では、昭和二・三年長沢佳熊・渡辺武男によつて冠帽峯（二五四〇・九米）・机山峯（二二七七米）・兜峯（二三三四・二米）の小長白山脈と白頭山に登られている。朝鮮山岳会は昭和六年十月設立され、創立当時の役員は、代表者中村両造、理事福田登、飯山達雄、中村両造、宮島敏雄、斉藤龍本、下出繁雄、監事加藤要、七年三月末現在の会員数二十三名であつた。昭和四年から六年まで飯山等は金剛山崑崙峯（一六三八・二米）の冬期登山を反覆し、七年には夏期金剛山の遮日峰（一五二九・二米）に下出が、彩霞峯（一五八八米）に原正典・泉靖一が初登攀した。小川登喜男等東大バアティも同年夏岩登りを専門的に彩霞峯から派出する集仙峯の各岩峯に登攀して幾つかの新ルートを完成した。九年の秋には児島勘次が小長白山及び白頭山に、次いで九年末から十年にかけては京大が厳冬期の白頭山へ大規模な遠征を試みて成功、登山及び自然科学研究上多大の貢献をしている。この白頭山冬期遠征登山は本邦登山史上一つの劃期的事象であり、種々の意義を有している。第一が遠征登山の実質的發展、次に極地法（ポーラー・メソッド）として次代日本登山界第一線バアティの間に渴仰信奉されて流行的ともなつた根拠地・前進キャンプの組合せとキャンプ間必要品の輸送連絡、登攀隊・支援隊・後方部隊システム等の有機的登山方法の完全な採択であつた。

遠征登山は内地から台湾、千島、樺太等にも屢々試みられたことがあるが、山麓の文化最終点から最も遠い高山地とその峻厳寒冷の氣候とにおいては、北朝鮮の山岳地帯が本邦領土中冠たるものであり、海外のヒマラヤ登山その他の巨大山岳への遠征を理想目標としての訓練には、恰好なものとせざるを得なかつた。また、極地法登山形式は既に昭和六年十二月より七年一月にかけて京大西堀・今西等十名が富士山大沢口でテストし、キャンプVまで作つて剣ヶ峰（三七七六・三米）に登頂しているのが最初といつてもいいであらう。白頭山へはその直後、朝鮮山岳会と京城大学の一行がやはり厳冬期に登つている。その隊の編成や装備・行動などは京都大学のオーソドックスの登行よりも簡略かつ速攻的であつた。

最後に第三期海外登山の新記録を一覧するに、まず昭和二年松方義三郎・浦松佐美太郎はアルプスにおいてアイガーのヘルンリ・グラートの初登攀、翌三年浦松はヴェッターホルン（三七〇三米）南西稜を初登攀して、榎有恒がかつて始めて築いた日本人登山家の国際的高水準を確保したのである。また同年八月カナディアン・ロッキーマウンテン・キャンプ（三五五・一米）は北田正三の参加したカナダ山岳会主催の一隊によつて初登された。また、六年には印度滞留の三田幸夫はクル溪谷源流のロータン峠（三九五四米）附近の冬期登山を試みたが目的のピアスリッキ峰（四五四五米）には至らなかつた。ひ

るが、つて昭和三年秩父宮殿下が英国アルパイン・クラブ名誉会員に推薦せられたことはまた、日本人の榮譽と力になり、アルプス、ロッキー等における邦人の登山も量的質的に増加して、かつて世界の未踏巨峰に対して抱いた夢のような憧憬は、真摯な研究と現実に逸早くも進展して行つたのであつた。

その最後の事情は、確かに第三期そして第四期にも不斷に続いた文獻的收穫の影響でもあらう。十指に余る文学的名著を含む幾多の登山関係図書、「山岳」以外の登山雜誌、学校山岳部・倶楽部の部報類等、最も重要なものだけでも本篇では到底取扱い切れない程である。登山団体も夥しい数に上り、昭和十年度山日記の調査によれば、登山団体数は四四一、その内東京で三分の一を凌駕している。山小屋も全国で一四〇以上となつて

いる。かくて文獻、登山団体、山小屋及び登山案内組合の数量増加は、登山の一般化と頻度の増加を物語るものであるが、登山に伴う遭難事故も残念ながら累進している。特に積雪期登山の勃興以後漸増した傾向があり、瀬本三雄の調査に従えば、昭和二年八件十二人、だつたものが、五年十九件三十人、九年三十一件四十人と記録されている。熟達した登山家、たとえば大正十二年立山における板倉勝宣、昭和二年針ノ木峠龍川谷における家村貞治等早大山岳部員、三年三月前穂高北尾根における大島亮吉、五年一月銀沢における津田他吉郎等東大・慶大山岳部員、同月

北岳における野村実、七年三月常念一ノ沢における名案内者中山彦一等の遭難死は種々の問題を投げたが、要するに困難な山で困難な条件での登山が増加したことにも相関性が見出されるであらう。

第四期（昭和十一年—二十年）

一九三六—一九四五

第四期において日本山岳会の組織に大きな変革が見られるに至つた、即ち有志団体たる日本山岳会から社団法人日本山岳会への切り替えである。昭和十三年頃から高まつて来た会員の要望に応じて役員側はその設立準備に着手し、十四年度会員総会の決議に基づき当局に申請した所十六年一月十六日附で厚生大臣より許可があり、同年二月二十七日東京市内日本橋区日本商工倶楽部で創立総会を開催、旧日本山岳会の財産及び事業を継承し、新定款により法人としての会の活動をすることを決議した。改組当時会務執行機関としての理事は、木暮理太郎、冠松次郎、鳥山悌成、榎有恒、西堀栄三郎、中原繁之助、今西錦司、監事は木村鉦吉、黒田孝雄、事務を分掌する幹事は吉沢一郎、交野武一、福島昌夫、逸見真雄、松井久之助、塚本繁松、村尾金二、湯浅巖、早川義郎、前田光雄、金山淳二、横山直介、青木昇、新定款による評議員は額田敏、沼井鉄太郎、松方三郎、田部重治、三田幸夫、加藤誠平、角田吉夫、茨木猪之

吉、中村清太郎、藤島敏男、中司文夫、三木高峯、榎谷徹蔵、そして会長に木暮、副会長に榎、西堀が推挙された。なおその後三月四日の役員総会で小島久太、高頭仁兵衛、武田久吉、大島堅造、藤木九三の五名を顧問に推薦し、補欠幹事に山口稔一、望月達夫を選任、また同日理事会において木暮、榎、西堀、島山の四名を常務理事に決定、同じく評議員会で別宮貞俊、津田周二の二評議員を推薦、かつ沼井、茨木、加藤、角田、藤島、中司の六名を常任評議員とした。

法人となつてからの日本山岳会の事務的活動は定款細則委員の仮制定やその成果の審議・実施、例年通り「山岳」、「会報」、「山日記」、「高山深谷」等の編輯発行や、「山岳語彙」等の蒐集編纂、常時事務担任者として主事を原則的に設置すること（塚本幹事を任命）、経理会計事務、山小屋建設研究、研究部の充実、集会として講演会、展覧会、小集会、有志晚餐会の外に学生懇談会、登山技術講習会、海外遠征・装備等に関する研究会、映画観賞会等を加え、多岐にわたる活動を開始した。精確な「登山年譜——日本登山史」の編纂も十六年来木暮会長の下に担当者も決つて着手したが、何分多年多方面の調査を要する難事業でもあり、大戦その他の事情で中絶した。部分的に登山史料管見が会報に報告されたものが契機となつて特志家から会報に登山史寄与があつたり、または同様文献が他の登山専門雑誌に提供されたりしたが、それも全史的ではないのである。

なお日本山岳会の本邦登山界における主動的地位を再々危うからしめたものに、今期から強力になつた学生山岳連盟、一般社会人の日本山岳連盟、そして大日本体育会との關係がある。

特に大戦後半の時代には純粹登山（スポーツ登山）は、戦力涵養を建前とした所謂行軍山岳の行き方が政治的社会的に優勢となつて、日本山岳会伝統の自由かつ雄大な愛山行動、他意のない研究的個人登山はその姿を見失われ勝ちでもあつた。しかしついに岳人としてのおおらかな堅い団結は、学徒その他の心ある登山者群の支持をも受けて、實際最後に山岳会のルームが戦災にあつて焼土と化しても、本邦代表の日本山岳会の正統を精神的に守り抜いたのであつた。

定款のその後の変更も、物価變動に伴う会費の値上げと役員々数の増加が主たるもので、末期の国家的総力戦時代になつて会の目的及び事業の項目が変更を余儀なくされようとしたこともあつたが、實際上には關係ある他団体との調整だけにとどまつてさほどの變動はなくて済んだ。また、会の事業の一として昭和十二年に上高地に設置された近代日本登山の父ウエストン師の寿像が、世界大戦勃発後狭量な国粋主義者流の圧力によつて取外しをせざるを得ないことになつたが、戦後再び現地に恢復できるよう保存されたことは幸いである。

さて第四期における本邦登山の記録的業績はどうであつたか一般的傾向として時間的に余力ある学校山岳部等では、前期よ

りも加速度的に外国及び日本勢力圏への遠征が盛になつてきて、まず昭和十年十二月から十一年一月にかけて加藤泰安を隊長とする京大の大興安嶺遠征が行われ、密林地帯一八三五米の連嶺中最高峰へヒマラヤの寒気零下四十度前後の条件下の踏査登山を果した。また、入江保太を隊長とする同志社大の一行は酷寒の地樺太東北山脈に同年十二月から十一年一月にかけて遠征し、馴鹿輸送を利用して、見晴山、振戸山、北沖見山、川崎山（いずれも千米級）などにスキーまたはストー（樺太土人の雪具）で登った。また季節的には同一の十年十二月渡辺漸を隊長とする東大の一行は冬のチャチャヌプリに遠征冬期初登頂し、同月乃至十一年一月朝鮮濟州島漢拏山（一九五〇米）の冬期初登頂に宮崎武夫を隊長とする関西学生山岳連盟と泉靖一を隊長とする京城大との合同遠征があつた。また南方台灣高山の積雪期三・四月にも同年田中薫を隊長とする神戸商大の一行が南湖大山及び桃山（三三二三・六米）・次高山・大霸尖山の登攀を目的として遠征を試み、登山そのもの及び學術・藝術方面に寄与する所があつた。

しかしまた第四期初め昭和十一年で最大の記録は、日本山岳会及び大毎・東日新聞社後援の立教大学学友会山岳部バアティの印度ガルワル・ヒマラヤのナンダコート（六八六〇米）遠征であり、隊長堀田弥一、隊員湯浅巖、浜野正男、山県一雄、竹節作太（大毎特派員）がゴリ河マルトリから入つてベースキャンプ

上四箇所に前進キャンプを設け、十月五日シエルバのアンツェリンと共に全員登頂し、無事下山帰国した事である。この初登と同じ頃に更に高いガルワルの盟主ナンダ・デヴィ（七八一七米）も英米隊により初登されたが、ヒマラヤの七千米に垂んとする未踏峰へ日本から最初の遠征登山を試みて見事成功し、かつその隊が一学校山岳部のものであつたことは、本邦登山界を著しく刺激して一躍世界の巨峰登攀への野望と自信を高めた。組織力の高い著名学校山岳部の幾つかは、前々からのヒマラヤ遠征計画をますます充実に進展せしめて行つたが、事志を得ず滿州事変、支那事変、第二次世界大戦と、事態の悪化に従つて、ついに立教大のナンダコートのみの記録にとどまって、その実現は戦後にまで持越すの止むなきに至つた。

しかしまた、たとえヒマラヤ行が現実とならないまでも、ヒマラヤの頂点への到達を最高そして必然の理想として、本邦及び附近での遠征はもとより国内積雪期——嚴冬の可及的長大困難な山岳へ、遠征形式の実験的登山が熱心に採用され流行して来たのも当然のことだつた。雪崩、悪天候、悪条件下の悪場、高処雪中野営、極地法による天幕その他の装備、食糧、本隊・登攀隊・支援隊・医療班・科学調査班・輸送人夫隊・後方本部等の有機的連絡及び行動、かかる大部隊としてのリーダーシップの再確認、隊全体のための隊員のあり方、平素の訓練等について、明治・大正初期では想像もつかなかつた研究と試験と反

省と検討とが熱心に繰り返された。次にそれ等主として学校山岳部の行った記録的に大きなものをあげてみる。

昭和十一年末から十二年一月にかけて、前期末富士山、遠見尾根及び北壁からの鹿島槍などで経験を重ねていた早大・山岳部では、朝鮮小長白山脈の机山峰から冠帽峰連峯へ難波隊長の一隊を派遣し、十年三月及び十二年一月地元京城大の冠帽峰主峰積雪期初登及び第二登に続いて、主峰第三登並に西冠帽峯（二四三二米）の積雪期初登を果した。同部はさらに十三年十二月より十四年一月にかけて台湾の新高山群に亜熱帯下の氷雪被う大きな岩場に若干の初登攀を了し、その三月から穂高明神岳東稜で峻峻地における極地法登山を始めた。十五年一月及び三月にも同所に本格的に一層進歩した登攀が行われた。そして早大山岳部は昭和十五年十二月から十六年一月にかけて再び冠帽峰連山へ雪嶺（二三三九・六米）・虹台峰（二四七一米峰）を経て行き、関根隊長指揮の下に四箇の前進キャンプを設けて、再登かつ通信その他種々の科学的試験を行った。

北朝鮮の冬期山岳に対しては、十五年三・四月の頃片山良一隊長の大阪商大バアティも入つて、鴨緑江源流から白頭山へ登頂している。その他京城大学、朝鮮山岳会などのバアティが、遙かに簡易な装備・隊員数で試みて、京城大等の度々の白頭山行、十五年冬の北白水山（二五二二・二米）、十六年一月蓮花山（二三五五・三米）のいずれも方炫等による登山等、注目す

べき例もある。また、夏山ではあるが満州国側から十五年撫松県主催竹内亮等の長白山（白頭山）綜合調査登山、十六年間島省主催の同様登山が大規模に行われたことがある。

早大と共にしかり行き方は異なるが大学・山岳部及び先輩群の内、最も絢爛たる遠征の業績を挙げたのは京都大学であつた。前期劃期的な白頭山冬期初遠征から続いて、今期は滿蒙方面の大地形・地域に焦点を向け行つた。十年十二月に始まる大興安嶺行（既記）に次いで、十三年七月からは本原隊長の學術調査隊と鈴木隊長の学生班よりなる内蒙古調査旅行、十四年には小興安嶺への遠征、十七年五月乃至七月大興安嶺を北方から長期探検し英吉里山・オーコリドイ山（一六〇〇米）に登つたものなど、大小の遠征隊を夏冬共に派遣しているのであつた。一方ヒマラヤへの大きな峻峻の遠征に備えて、十二年一月多人数による積雪期高処野営を主眼として富士山大沢口に合宿登攀、十五年四月東日・大毎の航空部と共同で冬期登山に関し富士山での空地連絡試験なども登山界を先導した仕事であつた。

また、第二期以来連綿として登山活動・研究の中絶していない早大・山岳部では、内地諸高山へ貴重な登山体験を反覆するに伴い、積雪期登山における高処野営・雪洞（雪穴）生活を本格的に前期昭和八年一月以来続けて研究実施し、加藤喜一郎、山田二郎等は長期にわたり雪洞（雪穴）のみによる登行を体得した。雪洞（雪穴）については、昭和十五年三月寺田彦次が単独

で北海道大雪山麓の忠別岳（一九六二・六米）で極めて簡単な装備・食糧で九日間の長きに渡つて雪穴に籠り無事下山した記録もある。

また、北大その他北海道の登山家群は恵まれた地方的条件によつて、慶大とは別に雪洞（雪穴）の研究実験登山を組織的に実行し、エスキモーのイグルー（氷塊構築）に類する幕営法が北大、二高あたりの山岳部員で研究されたことも注意されてよい。

上記遠征登山等の外に第四期における登山記録には、まず本邦代表かつ高度の登山技術を要する高峻複雑な槍・穂高グループを対象として挙げなければならない。穂高には湖沢・岳川谷・横尾本谷・白出谷・滝谷・明神岳・前穂高東面と又白谷・屏風岩等の登攀の区分があるが、この方面の先駆者慶大山岳部を始め、東大、早大、三高、六高、八高、松本高、R・C・C、学習院、日大、甲南高、同志社大、東京商大、大阪商大、日本山嶺会、成蹊高、法政大、東京農大、京都医大、登走溪流会、明大、日本登高会、慈恵大、大阪薬専、京大、OKT等の団体その他個人によつて、種々様々な稜、溝、面が厳冬期を含む各季節において、種々の登山形式のもとに試登、初登攀、再登攀または完登されてしまった。その詳細な記録登攀史は諏訪多栄蔵著「穂高岳登攀ルート図集」等に明かであるが、一山岳部として重点的に対象とした穂高の部分に早大の滝谷、松本高の奥

又白谷があることも興味深い事実である。また、小槍西壁のフエース・クライムが谷博等京都医大のパーティによつて新たに記録されたのは昭和十二年七月であるが、槍北鎌尾根の夏期登路変更、積雪期登攀も今期精細に研究され、なかならず法政大学山岳部は昭和二年來連続して千丈沢から積雪期の北鎌尾根及び赤岳・硫黄岳尾根の諸登攀を略々完了した。

第四期穂高のように極度に集中登攀された地域は他にも少からず、北アルプスの劔岳附近、白馬の不帰岳東面、劔沢及び黒部下廊下附近、鹿島槍北・東面、木曾駒山脈、南アルプスの白峰北岳バットレス、そして中級山岳地では集中研究登攀の精細なること穂高以上でしかも遭難及び死者もこれを凌駕する上越国境の谷川・岳連峰がある。また、地方所在のため中部日本山岳程登山者は無かったが、注目するべきものに奥羽地方の飯豊・朝日の二山塊、北海道ペタギリ岳その他の日高山脈、山陰地方大山の峭壁、九州阿蘇の岩場、台湾新高山各峰、大都会に対する地の利をもつて大衆の流行をも来たし東京附近の三峠山屏風岩と丹沢山塊の深谷、さらに都会に甚だ近くて低い六甲その他阪神一帯の岩場群、朝鮮京城附近の岩山などがある。

なお日本山岳会の「山岳」及び「会報」に掲載された記事を主として後世残るべき記録を拾つてみると、昭和十二年前年十二月から年始にかけて台湾山岳会平沢亀一郎隊長の一行は新高山・雲峰・関山越（二九三〇米）・関山間の長大稜線を文化

史的初縦走、同三月北大山岳部岡彦一等は樺太^{トカ}敷香岳及びアルカリ沢三角点登山、同月東京商大小谷部全助等の鹿島槍荒沢奥壁北稜の積雪期登攀、同五月入江保太等関西学連一行は阿頼度島子場山にキャンプ二箇所を設営して登攀、同年夏期東北帝大山岳部一行は飯豊山の胎内川峡谷に入り、台湾山岳会千々岩助太郎一行は秀姑巒山（三八三・三米）・ウラモン山・丹大山の縦走を完成、大阪薬専山岳部一行は新高山から南玉山南方稜線をトレースした。昭和十三年三・四月THEV及び八高山岳部員は合同して積雪期末會駒山脈を縦走、同年夏期台湾平沢等一行は卑南主山（三三〇四・五米）・雲水山（三〇一〇・三米）・小関山（三二五四・五米）・ハイノトナ山（三一七五・二米）・関山を縦走記録し、また同年八月にこれは海外記録ではあるが田口一郎は瑞西グロッシュレックホルン（四〇八〇米）東北壁初登攀等その他前後に数多くのアルプス諸峰を登攀した。

昭和十四年一月には前年末からかけて台湾山岳会木田文治一行の南面山（二八四〇米）を含む新高山麓南半の縦走があり、三月関西大の剣・仙人谷出合・黒部川・東谷山尾根・東谷・鹿島槍・大冷沢、大阪商大の五龍・黒部川・剣の二つの北アルプス横断があり、七・八月には竹中要等京城大学々術班を中心とする北支小五台山（二七八〇米）への事変下遠征登山があつた。十五年の厳冬期には織田信彦等東京農大山岳部パアティの黒部川から仙人尾根を経て剣への長ルート積雪期登山（剣登頂

は果さず）があり、また一月初め台湾では木田等台湾山岳会一行が南湖大山未踏大地域たる西面の南湖溪からの登頂を新たに記録した。同年三月には東大パアティにより鹿島槍荒沢奥壁南稜が積雪期に初登攀された。また、第四期中頃からドイツに滞在していた高木正孝は、昭和十五年（一九四〇）独逸山岳会の登山指導者講習会（フュラー・クルス）に参加し、ウィルダー・カイザーのカルク・アルペンでトーテンキルヒル（二一九三米）、プレデイクテウシュテール（二二一五米）、フライシュバンク（二二八七米）等の各階級コースで岩登技術を勉強したことを報じている。

昭和十六年夏期松本高校山岳部の渡辺仁、春田俊郎は台湾に遠征、南湖大山から中央尖山、それから未踏の南湖溪支流源流の悪場を通過下降した。また、十七年には飯豊山の頼母木川が二高山岳部一行によつて通行され、またその秋には陸軍報道班員山口隆一外十数名の軍人からなる一隊がボルネオ島最高峰キナバル（四〇七七米）に登山し、十八年には海外ではニューギニア島北東部における北本工作隊の三千米級山脈越えに続いて、九千名に及ぶ陸海軍大部隊が南岸ラエから北岸キアリまで撤退作戦の途サラワケット山（四〇七六米、恐らく未踏）の肩を九・十月の候に二十日間乃至二ヶ月間にわたつて越えたが、兵力の損失確認七百に過ぎなかつたという事蹟がある。同年国内では一月に北大山岳部のベテガリ岳（一七三六・二米）積雪

期初登、三月には日本医大の立山川東大谷から剣登攀、関西学院の遠見尾根・カクネ里・天狗尾根・荒沢・東尾根・鹿島槍のトラヴァースがある。また瑞西滞在のまま大戦のため帰国せずにとどまった田口二郎はアルプス登山の経験を重ねていたが、その内十八年七月アルペン尾根からオーベルガーベルホルン（四〇〇〇米）を踏破した直後、一流の難場といわれるヤング尾根から二人のガイドと共にブライトホルン（四一四八米）に登つた。また、二十年七月高木正孝・田口二郎の二人は瑞西のダン・ブランシュ（四三六四米）のフェルベックル・グラートに登攀した。

以上は全日本登山史観よりすれば或いはほんの一斑に過ぎず、しからずとしても標式的記載たるを免れないが、実際簡単に史乗の要点を捕え全業績を手際よく要約することが至難である位に、第四期以後の登山は、初級一般なると高級専門的なるとを問わず、数量的に夥しく増大し、も早登山は本邦各地各生活層に日常の要素として浸透したのである。

昭和十八・九年度山日記による日本全国登山団体数は、東京三六五、大阪六九、兵庫五八、福岡五〇、愛知三三、神奈川三一、京都二三、新潟一九、山梨一五、長野一三、群馬一二、北海道一一、台湾九、朝鮮四、樺太一、関東州一、その他計八三九の多きに達し、山小屋の数は北アルプス一二五、東北地方八三、富士山・愛鷹山・三峠山七三、秩父・丹沢山七三、北海道

地方六二、南アルプス五〇、上信国境五〇、中央アルプス及び恵那山三八、九州地方三四、近畿地方二九、奥日光・尾瀬・武尊山二九、八ヶ岳連峰二八、御岳二五、守門・魚沼駒・八海山二五、利根川奥・上越国境附近二一、朝鮮二一、台湾一八、四国地方一五、中国地方一五、頸城山塊八、加賀白山五、合計八一二を算している。また職業的山案内人の組合は北海道九、東北地方三六、関東信越二七、秩父山塊七、八ヶ岳・美ヶ岳三、頸城山塊三、北アルプス一四、木曾御岳三、中央アルプス及び恵那山五、南アルプス一五、富士山・愛鷹山二、加賀白山二、近畿地方一〇、中国地方三、四国地方四、九州地方一一、計一五六という数字を示している。これ等の数字を見ても日本の内地及び近接外地に如何に登山というものが発達して来たかが判るのである。遭難の多くなつたことも、一つには登山が大衆化したこと、二つには困難な時期・困難なコースまたは従来未踏で不可能と信じられていた部分への試みが繰り返されたことによるものと考えられるもので、本篇にはその記録と数字の一切を省略するが、これまた山岳関係図書雑誌類の汎濫と列んで登山界全般の発展を物語る実証でもある。

なお第四期末期即ち大戦終局前には、当時の国情に應じて団体登山、行軍鍛錬歩行及び登行が改めて検討され、純粹登山から離れての行き過ぎは確かにあつたが、一面図らずも次期新時代の国民体育的集団登山への先駆となつたことも強ち否定出来

ないであらう。

第五期（昭和二十一年—三十年）

一九四六—一九五五

日本山岳会の復興。この期は大戦終結後の年から昭和三十年末に至るもので、時代分類上の観念から正確に言えば、昭和二十年八月十五日終戦の日から始まる。しかしながら日本山岳会の本拠たる虎ノ門の事務所・図書室は既に二十年五月二十五日の空襲で焼失し、会員そして役員の有力主要者は或いは戦場に馳せ或いは外地海外に転じ、或いは中央諸都会より疎開し、或いはまた傘下学校山岳部等と共に戦時態勢に変貌せざるを得ない状態となり、方々旅行その他の制限によつて、純粹登山活動は殆んど閉塞するの止むなきに至り、会の機能も停止に近かつたままで新時代に推移して行つた。二十年六月小島久太方で役員総会の後、同十二月再びそして戦後始めて役員総会を開きこれをもつて会員総会に代えている。しかし二十一年二月そして六月の公式会合には、戦後復興の機運をついに掴み、復興緊急措置として会長に松方、副会長には藤島及び三田が推された。そして会の第一段の更生発展手段として、組織を拡大し、全国の登山家・登山団体を一括糾合する意図をもつて、その網領も山岳の研究、知識の普及、自然愛護、会員の親睦等伝統の目的の外に、登山の指導奨励、心身鍛錬等の項目を強調し、実践登山の尊重に比

重を大にすることに改めた。これはクラブ・ライフと機関誌報告のみを重視した四十年に垂んとする日本山岳会にとつては、実に重大な変改であつた。登山実践部門の総師であつた日本登山協会（旧行軍山岳部会）との関係も相互役員の重任の内に円満に調整解決して結局日本山岳会が日本登山協会を融合する結果を生じ、これも戦衣を脱した日本体育協会の傘下に登山部門の国内代表者として参加するに至つた。このことは昭和二十一年十二月二十八日日本山岳会の臨時会員総会を東京御茶の水にある岸体育館内で開催し定款改正を議決したことによつて正式のものとなつた。新定款は新時代に即応する簡素な形とし、その変改の主なものとは会の目的とする所に日本体育協会に参加するべく適当な修正強化を加へ、事務所は岸体育館内に置き、学生部を新たに設け、支部を各地に設置活動せしめるための措置を講じ、役員機構を簡單にして評議員を諮問機関とする等であつた。要するに会自らが登山を主催実践する方策によつて爾後東京をも含めて各支部のオフィシャルな当該地区の登山——集団登山が頻々として行われ、惹いては年々主権地を異にする全国的のいわゆる「国体登山」の準備予選活動となり、本部・支部協力の国体本登山となり、またさらにはこれ等実践登山の結果優秀果敢な登山家を育成発見して将来の大遠征登山の編成に備えるべく努力するなど、会の動向は著しく活動的になつたのである。

新発足の役員は、会長武田久吉、代表理事松方三郎の時代が数年あつたが、次いで会長横有恒の時代が五年間続き、昭和三十年四月マナスル遠征隊長に専念する故をもつて横辞任、新会長に別宮員俊が選出されて今日に至つてゐる。定款は昭和二十九年改正され、副会長制度、学生部の発展的解消、賛助会員制定、委員及び職員の条文化、評議員会の性格、名誉会員推薦方法等種々の変改が加えられた。新定款成立によつて副会長に日高信六郎及び松方三郎が選出され、以後変更はない。そして昭和三十年末現在の理事は入沢文明、成瀬岩雄、小原勝郎、辰沼広吉、沼倉寛二郎（以上常務）、交野武一、渡辺公平、折井健一、外山義夫、吉阪隆正、村山雅美、金坂一郎、千谷壮之助、大塚博美、今村正二、山田二郎、村木庸益及び会長並びに副会長、監事は石原憲治、評議員は沼井鉄太郎、岩永信雄、神谷恭、三田幸夫（以上常任）、辻莊一、堀田弥一、西堀栄三郎、島田巽、早川種三、竹節作太、村井米子、伊藤秀五郎、今西錦司、津田周二、山崎春雄、藤木九三及び各支部長（後記参照）である。しかしまた戦後役員として会務にたずさわつた人々に石川欣一、藤島敏男、浜野正男、藤井連平、望月達夫、谷口現吉、加藤泰安、林和夫、杉本義信、舟橋明賢、田辺主計、富田健一、大洞陽一、中屋健一、塚本繁松（主事）、木藤精一郎、三好毅一、田中栄蔵、鳥山倣成、木村鉦吉、垣内政彦、関根吉郎、中司文夫、吉沢一郎、今井友之助、神山勉、崎田熙、鈴木正俊、

小野幸、織内信彦、原全教（主事）、石原巖、今井田研二郎、田口二郎、高木正孝、灘波清一、後藤幹次、佐野男一、篠田軍治、伊藤巖、安彦六郎、初見一雄、その他前任各支部長の多くがあることを忘れてはならない。

さて日本山岳会戦後再生の事業第一歩は、内部的には四散不明となつた会員と会本部との連絡であり、機関誌発行に着手することであり、外部的には本部及び支部より体協及びその地方代行機関との協同行動、会として一層広い強固な基盤を持つことであつた。常時会全体の本拠となる事務所・集会所・図書室の建設はまた急務であつた。これ等の衝に當つた松方理事その他の人々の献身的努力は並々ならぬものであつた。

まず日本山岳会の会報一三三号が昭和二十一年四月、終戦後の最初の号として発行された。当時は占領下のきびしい制約下にあつたので、めざましい登山報は勿論なく、会員の居所動静を主とした貧しい印刷物であつたけれども、編輯する側、受けとる会員側の均しく岳人として生きかへつた歓喜に溢れる雰囲気にも窮屈な事情が介在してゐて、誌名の必要に迫られ、非公式に仮称した「山」という文字が見られた。この「山」（日本山岳会々報）は五回続いたが、会の改組に従つて全国各方面各層の登山者を広く網羅しようとする運動の一つの現われとして、社会情勢の好転に乘じ、普遍性啓蒙指導の面として「山」を雑誌形

式に独立させ、純然たる会報と分かつことになった。即ち日本山岳会編集発行の「山」創刊号は昭和二十二年九月に生れ、発売は日本交通公社が引受けることになった。従って会報は一三八号から元の形式内容にかえたのである。その後会の純然たる発表連絡機関たる会報は休止することなく年数回発行されているが、「山」の方は経営体が高に移り、ついに昭和二十五年日本山岳会とは全く関係のないものになった。

会報よりも伝統の古い機関誌「山岳」は、本文記事のオリジナリティを尊ぶ建前から原稿蒐集編輯に念を入れるのと物資不足の両面の事情から、昭和十八年十月三十七年第一号を発行して以来、戦後昭和二十三年十一月発行の四十三年第一号まで全く空白であった。巻数をあらわす年度の五年分の中断は、当事者の考えた会年齢・機関誌年度の一致方針から来たものであったが、これには批判の余地が相当ある。とまれ「山岳」は今年毎一冊の予定で刊行され、忽ち戦前の豪華版形式内容を取りかえて行つた。

日本山岳会のも一つ重要な出版物に「山日記」があるが、これも昭和二十三年十一月に至つて神山勉等特志会員諸氏の努力により十四輯一九四九年用版を茗溪堂書店から発行することが出来た。その後毎年更新して昭和三十年二十一輯一九五六年用版発行とまで事業が続けられたが、この山日記こそは再興日本山岳会の指導性、普遍性、科学性等に積極的意図を示す動向を最

も短的に表現する独自の事業面であるといつてもよい。重要登山史記録を織りこんだ日記欄或いは日記欄と別項の世界及び日本登山年表、登山の注意、積雪期登山、山岳氣象、登山の医学、地形と地図、遭難対策、装備、食糧、登山用品、写真、高山植物、山岳語彙、内外山岳高度表、本邦主要峠表、登山行程表、スキー登山日程、山小屋、全国登山団体、山案内、山岳図書、日出日没・月出入時刻、天気図、星座図、日本山岳会沿革・定款・役員・支部一覧、山岳地方地形図一覧、主要山岳概念図、山の歌等参考欄が頁数過半を占めており、登山家・研究者・山岳愛好者の日常座右または登山旅行時携帯に便かつ要領を得た一種の山岳年鑑であり、他に類例を見ない内容体裁であることが年々国内は元より海外にも認識されてきたようである。

さて日本山岳会の事業は以上の編輯刊行、後述の団体登山と海外遠征隊派遣の外にも、戦後恢復の順調な波に乗つて種々記録されている。まず第一に戦時中上高地の現地から撤回させられた日本アルプスの父ウォルター・ウェストン師の肖像を昭和二十二年の春元通りの記念箇所に再建したことをいねねばならない。日本山岳会のこの挙は、日本の山岳及び日本を愛し日本人に対して近代登山の開眼をされた大先蹤者世界人に捧げる永遠の感謝と不断の登山念願であり、誓いである。そしてその年から毎年春夏の候「山祭り」後に改称して「ウェストン祭」が上高地の景勝地で開かれることになった。

次いで日本山岳会図書室・事務所の新築である。日本体育協

会の肝入りでお茶の水駅に近いその敷地内の一角を貸与され、会員その他有志の技術・金品の寄附によつて、シャレー風の平家約十五坪が三友土建株式会社の手で建てられ、竣工引渡が済んだのは昭和二十四年三月十日であつた。戦後幾何も経ずしてクラブ・ルームを持つに至つたのは、前記松方の外に藤島敏男、小原勝郎、加藤泰安を主として特志会員諸氏の尽力が預つて力があつたのである。本拠が出来上ると殆ど同時に、常任事務担当の主事原全教も就任した。

また、日本山岳会には創立当時から引続き名誉会員の制度があつて、長く会に対し多大の貢献をなし本邦登山界に顕著な業績を残した長老会員中から推薦する例になつていたが、戦前から久しく発議されなかつたその推薦が昭和二十五年四月に行われた。秩父宮殿下を始め三枝守博、鳥山悌成、加賀正太郎、中村清太郎、田部重治、近藤茂吉、榎有恒であつて、これに従前からの高頭仁兵衛、高野鷹蔵、武田久吉、山川黙を加へ計十二名となつた。その後二十八年初め秩父宮殿下の逝去、同年六月冠松次郎、辻村太郎の新推薦によつて差引十三名の名誉会員となつて現在に及んでいる。ちなみに二十五年以前には二十三年小島久太、十八年大平晟、十六年辻本満丸、十五年ウエストン、七年白井光太郎、二年志賀重昂が死去、そして名誉会員たることを固辞したままだったという元会長木暮理太郎は昭和十九年

に死去している。

事務所・図書室が出来上ると日本山岳会の小集会、懇談会、研究会と頻々として集りが行われるようになった。役員会や内外事務の打合せは勿論、会員籍のある団体の特殊会合にも快く開放されて、だんだんと昔のクラブ・ルームに立ち戻り、中二階屋根裏の小室がつけ加えられてからますますその感を深めて来た。土曜会などいうなごやかな集りが出来今なおお慰めているのもその二階小室のお蔭である。そして虎ノ門時代よりも便利になつたのは事務所附属の小室に管理者が家族と共に夜間も休祭日も留守居する原則であることで、たまたま初代管理者の原主事が一身上の都合から辞任したものの、二十八年夏以降は津軽不二夫事務員が夫人と共に常任管理することとなつて、日本山岳会ルームの活用も常道を歩み続けている。

右の集会の内では会員総会とか、多人数の参会を期待される講演会（小集会）等では、体協館内の集會室、交通博物館ホール等を借用したことがあつた。なおルーム当番制度を二十八年夏以来復活実施し、会員及び外部との有機的連絡に万遺憾なきを期したこともあつた。

第五期における日本山岳会の集會で、新時代に相応して喜ぶべき傾向として、婦人会員及び婦人登山家を主とした会合がある。東京支部には婦人部というセクションまである。これは登山実践でも同じ傾向であり、本部役員、支部役員にも婦人の進

出を見るに至つたが、その中心活動は村井米子、坂倉登喜子、今井喜美子、川森時子等によるものであつた。

その他の仕事としては昭和二十三年十一月下旬冬富士講習会を初めとして組織的な登山技術講習会、遭難救助、登山実地指導等のための講師派遣、公私関係機関に対する支援助言、登山者保険取扱、外廓登山団体の海外遠征後援等種々なものがあつた。また、研究部の仕事として取り上げた雪洞（雪穴）、ピッケルに関する調査試験の結果は、それぞれその都度、またはまとめて報告されて實際登山上の有力な参考資料となつた。

しかしながら改組日本山岳会として最も全国的に大きい事業は国体登山であり、最も深い追求は海外遠征登山の主催であつた。ただしその記述に入るに先立つてまず支部について一言しなければならない。支部設立の制度は日本山岳会創立以來あつたことなので、明治時代新潟、横浜、飛騨（高山）、関西（大阪）の各地に支部の名乗りをした記録はあるが、熱心な指導者が去れば忽ち解消または同然の従来状態であつた。これ等は支部に組織化の確立しなかつたことと資金難とに由来したと考へられる。昭和十七・八年頃社団法人設立後の定款細則検討においてはこの点が考慮されたが、戦時情勢下の支障のあつたことと共に、やはり積極活動に役立つには不満の更改であることが反応の結果に現われた。かくて消長はありながらも形式は変りながらも兎に角戦後まで存続したものは、大阪に本拠を置く京

阪神中心の関西支部だけであつた。もつともこれは関西在住者中から常に本部役員を置くという重点的不文律の信条に影響されたところもあるようである。そこで戦後改組後の会は各支部の持つ権限を大幅に認め、当該支部会員を極力増加して、支部会費はそれぞれの地方事情によつて本会費以外に徴収できるようにし経営に難なからしめた。また、支部の性格も、体協加盟団体の地方該当部位としてその地方の体協支部・官民諸機関と密に連絡することにより、登山行事の殆ど一切を営むということにした。この方策は大体成功して、支部は各地に次々と設立されていつた。設立された支部の支部長の地位は役員として本部のものに何等変らない評議員メンバーを形成しているが、別箇に支部長懇談会も二十九年九月を初めとして二回開催された。昭和三十年十二月現在で、関西（大阪市、支部長篠田軍治）、越後（新潟市、支部長藤島源太郎）、福島（福島市、支部長伊藤弥十郎）、富山（富山市、支部長中田勇吉）、石川（金沢市、支部長池田知幸）、東京（東京都、支部長松方三郎）、信濃（松本市、支部長高山忠四郎）、山梨（甲府市、支部長三井松男）、山陰（米子市、支部長織田収）、山形（山形市、支部長後藤幹次）、静岡（静岡市、支部長大室員一郎）の十一地方に支部が設立されている。なお東京支部は東京都山岳会として東京体育協会登山部門（国体）担当機関であつたが昭和三十年四月支部規約改正に従つて東京都山岳会は解散し、改めて支部内有

志と東京山岳連盟との合同で組織する東京山岳会でもつて新設
東京都山岳連盟に加盟し、十月から発足するに至つた。かくて
東京支部は本然の形になつたが、その事務所が初めから本部内
にあつても、支部としての登山、集会、支部報発行その他事業
については勿論支部独自の立場で実施してきている。

国体登山は昭和二十二年秋石川県で開催の第二回国民体育大
会に日本登山協会と合体して参加して行つたのが日本山岳会と
して最初の記録であつた。(第一回国民体育大会が昭和二十一
年京都市で開かれた時は日本山岳会は体育協会に加盟しておら
ず、日本登山協会が代つて参加したが、その時は登山行事はな
く、大阪在住本会会員の世話による講演・展覧会が主であつた。)
金沢での大会には日本山岳会本部から松方三郎、浜野正男が指
導者として加わり、石川支部の肝入りで医王山(金沢近傍の名
山)の集中登山を参加者二百数十名でもつて無事に終えた。市
内行事としては勢揃いと登山に関する講演会があつた。

昭和二十三年の第三回国民体育大会は福岡県で開催された
が、日本山岳会一本として加わつた部門行事は福岡市内及び久
住山で行われた。十月二十九日市内平和台競技場で全部門総合
の入場式、三十日九大で登山部門全国地区代表者会議(大会山
岳部会理事長山田光男、本部松方理事長の講演あり)午後講演会
では福岡山岳連盟会長安川寛の挨拶に続いて石岡繁雄の夏期穂
高屏風岩登攀、伊藤洋平の冬期同所登攀、村木庸益の極地法に

よるベテガリ登山、加藤数功の九州の山についての講演があり、
一方二十九日乃至十一月三日には登山用具使用法についての展
覧会があつた。また十一月二日には市内二ヶ所で富士、ナンダ
コート等の映画会もあつた。久住山(一七八八米)の集中登山
は一日に各班百乃至百五十名の人数で四コースに分れ登頂し、
十一時五百余名の全国的岳人登山頂を埋め尽し、秋の山岳高
原美を満喫する快適な山行に終始した。以上福岡支部、福岡・
大分を中心とする九州登山連盟の献身的運営によるものであつ
たが、本部理事側は松方、藤島、谷口、関根、山下、入沢、渡
辺、村井等が参加した。

昭和二十四年東京都中心の第四回国民体育大会での登山部門
行事は十月三十日から十一月三日に及ぶ五日間の富士山(三七
七六・三米)登山が主要なものであつた。ここに主要とする所
以は、第二回国体参加以来検討の結論として、日本山岳会は国
体登山を実践的啓蒙指導面の中心行事として積極的に採択し積
雪期富士山において「相当に高度な技術を持たなくては参加出
来ない登山の実践」を主眼として、これに講習会的側面を与え
かつ技術の認定、講評等を行う方法を案出し、特に今回はこれと
併行して公開自由参加の大衆的な登山その他を行うという、国
体登山に關し日本山岳会の主張を生かし今後推奨型式とした要
旨からである。記録された所では、十月三十日東京ラグビー場
における国体入場式に参加全国の登山代表者及び役員三百余

名、同夜列車で富士吉田に向い深夜に及んで宿泊、三十一日浅間神社で入山式、馬返まで自動車、五合目まで登行宿泊、十一日A班屏風尾根五隊十五名、B班十六隊四名、C班三二隊九六名、さらに全コース各班に四、五名のインスペクターを配置して技術指導並事故防止に当らせ、富士としては稀な好条件で登頂した。二日は雪上技術の講習と別に、監督・見学隊などの登頂が行われ、三十四名のお大半が登頂を完了、選手最年少者は十八歳、最年長者は五十二歳、婦人は九名であつた。三日精進口へ下山、バスに分乗して甲府着、市中を徒歩行進して県会議事堂において盛大な閉会式に臨み、知事、市長、山梨支部長の挨拶、登山技術部長の講評、榎会長の講演があり、解散後湯村温泉に一泊して懇親を深め、翌日分散した。

昭和二十五年の第五回国民体育大会は愛知県担当、名古屋市中で十月二十八日から開催されたが、登山部門は川喜多壮太郎等三重山岳連盟が現地主宰し名古屋山岳連盟の協力を待て準備及び行動し、鈴鹿連峰（最高一二三八米）登山を了した。即ち二十八日湯ノ山温泉で入山式、二十九日出発、A班は釈迦岳・愛知川廻行・根平峠・御座所岳、B班は愛知川・水晶谷・杉峠・雨乞峠・御座所岳、C班は水見小舎・水晶谷・国見岳・御座所岳（藤内壁岩登は予定だけ）で、各二泊後温泉に帰着したが、何等事故もなく成功であつた。三十一日昼全員帰着後本部よりの藤島・関根理事の講演があり、十一月一日下山、四日市市

公会堂で閉会式、大会々長、知事その他の挨拶の後チーフ・インスペクター浜野正男から講評があつて行事は終了した。本部からの参加役員は藤島、入沢、藤井、関根、望月、村山、鈴木正俊、浜野、インスペクターとして各支部からの十五名もあつた。参加者役員共六百名未満、全国で不参加の県僅かに七県という盛会であつた。

第六回国民体育大会は広島県の担当で行われ、登山部門は鳥取県大山（一七一三米）及び米子市においてであつた。昭和二十六年十月二十八日大山寺での入山式に始まり、二十九・三十日の二日間選手団のA・B班（行者谷コース及び正面登山コース）見学団のC班（豪田山廻コース）と数隊に分れて登山行動し、十一日米子市で閉会式を行つた。参加者約五百名、本部からは榎会長以下入沢、藤井、望月、林、堀田、村山、千谷、鈴木九役員が参加、各々指導に當つた。山陰支部長・国体担当理事の佐野勇一、同支部員・国体委員の港叶等支部、地元県当局・各団体の尽力協力は少からぬものであつた。

第七回国民体育大会は昭和二十七年秋期福島・宮城・山形三県合同で行われ、登山部門行事は山形県酒田市及び鳥海山（二二三〇米）で開催された。二十四年富士山国体登山以来久し振りの高度稍高く山麓からの比高の大きい秀技な山岳とて、技術上レベルを向上したい日本山岳会としては冬期型気象条件を内心期待していたが、秋晴れに恵まれて大部隊の冬山技術練磨・大

会記録の刷新にはなり得なかつた。しかし登行々進の合理化登山人の精神的融合団結には得難い成績を挙げることが出来た。時あたかも日本山岳会主催のヒマラヤ遠征マナスル踏査隊を派遣した頃とて、国体登山に集う若人の心と氣講えは、二二三〇米の頃上から八千米級への飛躍へ深く通ずるものがあつた。

十月十九日酒田市に全員集合、技術役員會議、リーダー會議、開會式、支部長會議などがあり、二十日出発、吹浦口御浜小舎、蔵岡口河原宿・滝の小舎・湯の台鉱泉に投・分宿、二十一日全員登頂、新設石造山小舎に泊、仙ヶ洞岩場で技術員新村正一の転落負傷があつたが参加者にはいさゝかの事故もなく、二十二日各班共鶴間池・御中道くめりに暴風雨に遭遇、二十三日下山、酒田市で閉會式、参加者は各都府県代表三百余名、役員、見學団、監督等を加え総勢六百名を越えた。本部からは榎、神谷、成瀬、佐藤久一郎、渡辺、安彦、原、福井、藤井、林、別に全国から三十名の技術役員が参加した。また各支部からは支部長の参加があり、特に藤島新潟及び伊藤福島両支部長は見學団の長として尽力するところがあつた。

第八回国民体育大会は愛媛・香川・徳島・高知四県の担当で、昭和二十八年四国地方松山市及び西条市地区中心で行われた。その行は十一月二十二日全員集結、二十三日から三日間三コースに分れて石鎚山（一九八一米）を盟主とする連峰へ登降、二十六日松山市で無事解散したが、登山選手役員、見學団

共計五百余名、全国中三県だけ不参加という事実上全国的登山行事であり、入山式には高松宮殿下の御出でもあつて、講評側にも登山者の質の水準が向上したことが認められた。地元の愛媛県山岳連盟の肝入りはもとより、日本山岳会関西支部からの応援があり、本部からは榎会長以下多数の役員会員が参加して登山行事を完うした。

第九回国民体育大会は北海道の担当で、昭和二十九年七月二十四日旭川市常盤公園で高松宮、同妃殿下をお迎えして開會式を挙行、四班及び本部班に分れて二十八日まで大雪山（二二九〇・三米）に風雨中幕営を含む登山を行い、旭川市で閉會式となつたが、参加人員監督選手共二三〇名、茨城・滋賀・徳島三県を除く各都道府県の参加であつた。この大会々長は日本山岳会榎会長、副会長は北海道山岳連盟会長川口忠、日本山岳会本部からは渡辺公平、成瀬、小原、交野、林和夫、千谷、金坂その他多数が出席行動した。

第十回国民体育大会は神奈川県の担当で、昭和三十年十月三十一日横浜市三沢競技場で開會式後、丹沢・山塊（最高一六七二・六米）で登山行事が行われた。連日快晴に恵まれ山小屋二泊を含んで山塊各方面四班に分れて行動登山し、三日湯河原で閉會式となつた。監督及び選手二二五名、役員一〇四名、本部役員二二名、その他を合せて實際行動の三七八名、設営関係の三、四百名の多きを数え、徳島及び特別一般参加の沖繩の二県を除

いて全国都道府県の代表集合登山であつた。日本山岳会側は別宮、日高、神谷、入沢、渡辺、折井、千谷、金坂各役員、村木、大塚、石坂、松田各サブリダー及び支部側越後藤島、福島伊藤、関西津田等が出席した。なお第十回国体登山の運営は日本山岳連盟と全日本山岳会連盟と夫々五名宛の合同によるものであつたが、数年前から体協の方針であつた国体運営日本山岳会単一制に対する論争並びに協議の進行経過は、日本山岳会内部からも漸く平和裏に一の遷移点を見出し実行に入らうとする段階に至つている模様であつた。

なお毎年の国体登山に先立つて全国都道府県各地で予選登山というものが行われており、その登山記録も多く知られているが本篇においては述べる余裕のないことを遺憾とする。たゞこの予選登山そしてまたその準備行動をも包含して考える時、国体登山の包容力の大きさとその内から生れ出る一層高邁なものへの将来性を示唆する一つの巨大な運動体が存在することを肯定せざるを得ない。日本体育協会もその故に公開行事たる山岳行事即ち登山を低山岳地域においてさへ行つてもよい意嚮のようである。

次に日本山岳会として創立以来外部的に最大の歴史的発展であつたマナスル登山の踏査及び本格的登攀について略述しよう。

昭和十一年立教大学のナンダゴート登頂が成功を納めて以

来、各大学山岳部のヒマラヤ遠征の熱望と研究計画はとみに旺盛となつて、その準備組織と国内及び本邦勢力圏内での実際登山訓練は次第にそして加度的に専門化するまでに至つたが、事変に次ぐ戦争と国の政情軍事外交上の制約に遭つて、ついに一時代実現の空白を残すことを余義なくされた。しかしながら日本山岳会の有力メンバー中には、戦前遙か遠き昔から優秀学校山岳部員が投じ来つて入会し中核的存在となつていたのであるから、戦後、行為としての登山を事業中に重点的に尊重するようになった改組日本山岳会で、ヒマラヤ登山計画に関する総合研究の議が持ち上つたのは当然である。かくて日本山岳会に昭和二十年以後ヒマラヤ研究会なる小委員会名が見えるようになり、簡別の山名を冠するブロードピーク研究会などが提案されるようになった。

果然ヒマラヤ遠征実現の鍵が昭和二十七年に握られることになつた。ことの由来は昭和七年に遡る。即ち京都大学旅行部を母体とするA.A.C.K. (京都大学学士山岳会) はその年及び昭和十三年度にもヒマラヤ遠征を計画したことがあり、戦後間もなく旧A.A.C.K.メンバーが主体となり京大生物誌研究会が結成されて、三度ヒマラヤへの計画が検索された。かくて二十七年一月カルカタで印度学術会議が開催された好機に、わが国からの出席代表の一人木原均に随行した西堀栄三郎は、ネパールの体協担当団体の幹部クリシュナ・バハドールとの連絡斡旋

によつて首都カトマンズに入り、国王始め有力者達から「日本のネパール探検隊」に賛意諒解を得られたのであつた。西堀は入国登山許可を申請して帰国、慎重協議の結果、この京大ヒマラヤ遠征の計画を日本山岳会へ移譲するの議が起り、折衝会談、終に役員総会で検討調査の上、何等の条件無しに引継を了して、こゝに日本山岳会の企劃実行という形に発展したのであつた。

爾後四月日本山岳会は直ちにヒマラヤ委員会を組織し、委員長榎有恒、委員松方三郎、木原均、日高信六郎、藤島敏男、三田幸夫、今西錦司、西堀栄三郎、堀田弥一、伊集院虎一を推薦、かつ委員会の下に事務局を置き、その局員として理事を含む会員三十名が参加した。五月中旬にはネパール国政府から許可書到着、一九五三年度の登山隊入国を認めると共に一九五二年度にその先発隊の入国をも併せ承認の旨を明かにした。よつて委員会は目標の山を京大の所期通りマナスル（八一二五米、世界第八位の高山）山群に決定し、さて先発隊員選考の段階に入つた。一方事務局各部門は準備に拍車をかけ、委員会事務室も便宜上日本橋の辰沼理事宅の一室に開設したのであつた。たまたま当時印度に行つていた田口理事が極めて有用な資料を携えて帰国した。

委員会の決定した先発隊は、隊長今西錦司、隊員田口二郎、高木正孝、中尾佐助、林一彦の五名である。これに後から加わつた後援者毎日新聞社の報道担当派遣員竹節作太を入れて六名

が、実際の踏査隊であつた。こゝに踏査と称したのは、一九五〇年ティルマン隊が山群西側より偵察しただけでマナスル山群東側は全然未知、いはゞ地理的にも未詳未知の部分の多い山岳地だつたからである。

先発隊は昭和二十七年八月二十五日BOAC機で東京発途についた。二十六日カルカッタ着、三十日ダージリン、九月五日カトマンズ着、準備整つて十四日シエルパ（高所人夫）六名人夫六十名、そしてリエゾン（ネパール政府側連絡官）としてクリシュナの弟デイリーと共に出発、十月五日マルシャンディ河奥地アンナプルナIV（七四九九米）の北麓三五〇〇米の地点ティルマンの跡にベースキャンプを張つた。これから東方のマナスル展望偵察及び高度馴化その他実地試験の目的をもつて、ティルマンが試登したルートを拾つてIV峰に向つたが、五八〇〇米の地点で新雪悪天候となつたので、終にアンナプルナは断念して下山、田口一人は一身上の所用のために帰国し、代りに竹節毎日記者がベースキャンプに合流した、その前残つた隊員はチョール・深谷から二三三六・二〇〇米の二峰（チョール）に初登頂した。その後はマナスル西北面を多少偵察行動して、ラルキヤ峠を越え、十一月十一日マナスルの東方サマにベースキャンプを張つた。そして二十六日までマナスル氷河を登り五千三百米の地点まで行つたが、高木がヒドゥン・クレヴァスに墜落負傷したので引返し、別に東尾根をも探査したが、これも同様高

度で見込薄のまま引返した。かくて大体登頂ルートはマナスル氷河側から取りついでノース・コルからブラトー經由という結論を得て、ブリガンダキ峡谷經由、カトマンズから順路、十二月二十八日先発隊は東京に帰着した。

先発隊の登高記録はモンスーン後期としてさしたるものではなかつたが、地理的未詳地域の八千米巨峰をめぐる偵察目的は立派に達し、現地での観察及び登高によつて、日本隊として戦後最初の貴重な体験と自信を得たことは予期以上の収穫であつた。なお今西隊長と中尾は科学班をも兼ねて植物地理学・人類学等の同地方最初の材料を多数得て、内外学界に貢献することになつた。また、林は医務班ドクターとして隊員の衛生治療は元より、現地民族の伝染病その他に無料医療を施して救世主の如く感謝された。

一九五三年度本隊の準備は右先発隊の帰着前から進められた。ヒマラヤ委員会は強化され（早川種三の加入等）、事務局は出来得る限りの準備に没頭し、先発隊の報告によつて本登攀隊の行動方策を決定し、昭和二十八年一月中には隊員の選考、マナスル登山について日本体育協会の協賛を終えた。経費関係では、後援者毎日新聞社の努力により財界人等からなるヒマラヤ登山後援会も確立され、同会その他全国一般社会個人からの寄附基金も続々として集まつた。

隊員は隊長三田幸夫の指揮の下に本隊（登山隊）と科学班に

分ち、本隊に隊長、高木正孝、田口二郎、辰沼広吉（医師ドクター）、村山雅美、山田二郎、加藤喜一郎、村木潤次郎、山崎英雄、石坂昭二郎、竹節作太、依田孝喜、これに追加して加藤泰安、科学班は中尾佐助、川喜田二郎、以上十五名である。今回は後援者毎日新聞社からの竹節は依田カメラマンと共に登山隊構成員の内に入つた。また、科学班はマナスル周辺地域を登山本隊とは別箇の行程行動を取ることにした。この内中尾は一般植物調査目的の外に昨年来木原教授一門の研究対象として、ネパール奥地の栽培植物特に、小麦の原種探索という重大使命を帯びていた。

かくてマナスル本隊が東京羽田の空港を出発したのは、ブレ・モンスーン期での成功を目指して、三月四日、田口、加藤泰、村山、加藤喜の四名、十八日隊長以下十一名であつた。隊員年齢最高は隊長（五二）を除き四六歳（竹節）、最低二四歳（石坂）、登山隊員平均三四・六歳である。

一行はカル Катタ及びカトマンズで荷の通関、シェルパ、人夫雇用等の煩多重要用務を終えて、ネパール・ヒマラヤ奥地への大行進開始は三月二十六、七日となつた。日本からの登山隊及びリエゾンのデイルー及び通訳サガの外にシェルパ十五名、人夫約三百名に及ぶ大部隊で、しかもブリガンダキ峡谷の險路を通過する困難を思つて二隊に分れ一日違いで出発したのであつた。科学班は早くも二十八日パンチラ峠で別れた。四月十三

日サマのベースキャンプ着、その後ポスト・モンズーン期と違つてマナスル氷河は雪に深く覆われ、予期以上容易に偵察・前進キャンプ設置・荷上げの処理が涉つて、四月二十日C4（前進根拠地）をナイケ・コル（五六〇〇米）に建設、次いで問題のアイスフォール（氷瀑）を突破、途中C5（六〇〇〇米）、C6（六一〇〇米）、C7（六六〇〇米）と進んで、五月十五日ついに七一〇〇米のノース・コルにC8を設置し、十九日第一回の登頂行動が加藤（喜）、山田二名によつて試みられたが、この日は深雪のため七四〇〇米に達した時は午後三時で既に先進するには遅く、同所に雪洞（雪穴）を掘つて夜営——ヒマヤラにおける雪洞（雪穴）夜営として注意すべき記録、翌日は天候悪化のため一旦前進を中止して全員C4に下つた。

五月二十五日天候が恢復したので第二次登頂行動を始めた。

三十一日加藤（喜）、山田、石坂の三名は山崎とシエルパ達のサポート隊と共にC8を登、七五〇〇米にC9を設置、六月一日頂上に迫つたが、当時マナスルの高所においては毎日午後には必ず天候が崩れるのが例で速攻主義も採用できなかったで、終に七・七五〇米を最高到達点として引返さざるを得なかつた。加藤等の報告によれば、頂上へのルートにはこのさき技術的にさして困難はないと思われること、当時の状況よりして充分に高度馴化した隊員がプラトーン上に更に一夜を重ね翌日の頂上往復は可能と思われたこと、C10予定地より頂上までの所要時間は

往復八時間以内に見られること、以上三点を強調している。なお酸素ボンベは印度で充填の際止むを得ざる不備等の理由から使い物にならず、最後の登高隊員も使用しなかつたが、やはり最高所の登高休憩の営みには使用するべくプラスであるべきことが、エヴェレストにおける典型的例証その他の検討によつて、帰国後強く是認された。

登高隊の退却下降は極めて忠実かつ慎重果断であつた。そしてC9を撤収、サポート隊に迎えられてC8着、さらにC7に下つて高木登攀隊長に報告、一夜を明かし、翌日元氣にベースキャンプまで長駈下つて行つて、三田隊長に暖かく迎えられたのであつた。丁度その頃英国隊のヒラリーとテンジンがついに世界最高峰八八四〇米のエヴェレストに人類初登頂・最高の大記録を打ち立てた。

このようにしてマナスルの登頂は未踏三七五米を残して逸した形であつたが、登高世界六位の記録を樹立したこれまでの成功、特にヒマラヤ高峰に経験殆んど無き日本隊としては、登頂ルートの発見確認と最高壇への追求という、確率的予想を上廻つて余りある、本邦登山界現実の進歩を証したのである。

なお科学班はアンナプルナ山群の南方一帯からマルシャンデイ流域の植物及び人文科学調査を済ましてラルキヤ峠（五三〇〇米）を越え、途中登頂隊の活躍を望見したりして、六月二日サマのベースキャンプで本隊と会合、更に調査採集旅行を続けて

八月下旬帰国したが、本隊は六月八日ベースキャンプを撤収、ラルキヤ峠、マルシャンディ深谷を経てボカラに達し、航空機を待つこと二十日間、漸くチャーターされた機に乗じて七月七日カトマンズ着、カルカッタから七月十六、二十一、二十四日及び八月中旬と四陣に分れて東京に無事帰着した。

帰後隊員から第一に毎日新聞社主催の報告会、その他全国主要各地でそれぞれ分担報告会が催され、一般にヒマラヤ登山の如何なるものかの認識を高めたことはいうまでもなかった。

この挙以後日本山岳会は全力をあげて一九五四年度のマナスル登山を計画し、ネパール政府の許可も得、新たなヒマラヤ委員会を楨、日高、松方、大島、別宮、早川、伊集院、三田、西堀、今西、堀田、成瀬、田口、高木、谷口、望月、加藤泰安及び毎日新聞社側対島及び竹節各委員で組織、登山実行委員会の委員は三田、村山、村木、加藤喜一郎、山田、成瀬、望月、谷口、千谷、辰沼とし、かつまた各大学OB十名を配することにして実現に向つた。かくて隊長堀田弥一、隊員谷口、加藤喜一郎、村木、山崎、山田、大塚、松田、日下田、松沢、辰沼、竹節、依田、(最年長四七歳、最年少二三歳三名、平均三三・二歳)が決定し、昭和二十九年二月一日先発隊四名、三月二日及び七日本隊が東京発、十四日カトマンズに全員集結、二十日及び二十一日二隊に分れてサマに向つた。この度もデیلی同行、シェルパはガルツェン以下二二名、人夫は四〇〇名であつた。しか

るに四月六日サマ附近ロー部落に至つて全く予期しなかつたマナスル麓部落民の登山阻止に遭つた。その理由は二年間旱魃による不作、チフス及び天然痘の流行雪崩による僧院の潰壊と尼僧三名の圧死などが登山隊の聖山マナスルを犯すことに因るというのである。わが国はもとよりネパール首都カトマンズにおいても何分通信の便が極めて悪い山間僻遠の地とて、急速な交渉慰撫の方法は見出されず、現地隊としてはガ・ネ・ツ・シ・ヒ・マール(七四〇六米)に目標を変更せざるを得ない状態となつた。かくていつたんニヤックに戻つてから日本でいえばかつての郡長に当るスッパの許可を得、人夫を改めて雇ひ、十七日から十九日にかけて分隊再出発、ブリガンダキ支流トログンパコラに入り、二十五日ベースキャンプから登攀開始、五月中旬第三キャンプを設営して峻嶒な氷壁に挑んだが、前年ニュージーランド隊到達地点よりも約四百米高い六七〇五米をマークしただけで、ついにガ・ネ・ツ・シ・ヒ・マールに到達できなかった。その後登山隊の一部(谷口、加藤、山田、村木、大塚、山崎、松田、日下田、松沢)はマナスル側のヒマルチュリ(七八六四米)にチュリンコラから入つて登攀ルート偵察を行つたが、その方面から何等の希望も得られないままで遠征の終幕となつた。堀田隊長以下七隊員の帰国は六月十九日、その他二十四日、七月三日、二十六日に夫々無事に帰国した。因みにガ・ネ・ツ・シ・ヒ・マールは翌一九五五年ポスト・モンスーン期に仏・瑞合同のラン

ベール隊によつてついに初登頂された。

マナスル登山は以上の如く不測の登山阻止によつて挫折したものであつたが、日本山岳会そして後援者毎日新聞社のマナスル登頂の素志は毫も衰退せず、如何にその現地部落民の誤解を解いて従来通りの平和状態に復するかの問題が朝野の同情、ネパール国の好意ある取扱の内に懸命に検討採択されたのは当然であつた。その具体的現われとして第一が次回マナスル遠征隊長を最初に選任して隊員はその裁量によつて決定するところとし準備・行動全般を通じて一貫確立した体制を整える方針が決つたことである。これと同時に遠征実現の鍵ともいふべき資金のたしかな見込をつけることであるがこれは既に一九五三年度に科学助成金として五十万円の補助金を受けた文部省に対して榎会長主として折衝に当り、総経費二千四百七十万円の内五百万円を社会教育関係費目中より援助を受け、残額も一九五三年度募金成績より毎日新聞社及びヒマラヤ委員会で自信を得たので、現地事情以外での最大難関解決見通しは明るくなつた。

さて現地サマの事態については、直接調査隊派遣の案が昭和二十九年秋以来熱心に研究され、現地僧侶・有力者達のカトマンズ政府における好転意嚮表明の証言を得て、昭和三十年四月二十九日日本山岳会西堀評議員並びに成瀬理事をネパール国カトマンズに派遣し、調査交渉を遂げさせた。その結果現地部落の有力者達とも面会して、シェルパ・部落民の確執に基き結局

登山阻止を招いた紛糾問題も容易な条件付で円満に解決し、一方ネパール政府から一九五五—一九五六年日本隊のマナスル割当も確約協力を得、途ダージリンでヘンダーソン夫人等とシェルパに関する用務をすませて、六月九日帰国した。

昭和三十年八月一日兼ねて内定していたマナスル第三次遠征隊長横有恒並びに先遣隊小原勝郎、村山雅美、橋本誠二（北大地質学教室）の公表がされた。新たなヒマラヤ委員会も、別宮、松方、日高、入沢、成瀬、小原、辰沼、沼倉、古市（毎日新聞社ヒマラヤ後援会事務局長）、大島（毎日新聞社運動部次長）、三田、堀田、谷口、高木、早川、西堀、伊藤秀五郎、篠田関西・藤島越後・伊藤福島・池田石川・高山信濃・三井山梨・織田山陰・後藤山形・大室静岡岡各支部長を委員として設置された。

また、マナスル第三次登山本隊の隊員も、十一月七日榎隊長から小原勝郎（新、先遣隊長）今西寿雄（新、一九五三年度京大アンナプルナ登山隊長）、辰沼広吉（元二回）、千合社之助（新）、加藤喜一郎（元二回）、村木潤次郎（元二回）、大塚博美（新）、徳永篤司（新、阪大第一外科教室）、松田雄一（元一回）、日下田実（元一回）依田孝喜（元二回、カメラマン）の十一名が発表された。隊員年齢最高は隊長（六一）を除き、四三才（小原）、最少二五才（松田、日下田）、平均三六才（隊長を別とすれば三三・八才）。小原先遣隊長等三名は昭和三十年九月二十四日羽田発、順路カトマンズに行つて、シェルパ四名、リエゾン・オフィサー一

名、人夫七十名と共にサマ村長等の先導で十月八日行進を始め、二十四日サマのベースキャンプに入った。途中セテイバスからスッパ親子等が合同したためあつて、地元では何等の妨害もなかつた。そして先遣隊はナイケ・コルに上つて一週間滞在し、黒岩上部の旧C5の先、ナイケ山上部等を探つてマナスル登路、特に氷瀑部分の観望研究後下山、十一月中旬ウルキヤ峠北側チョオ・ダナ山腹方面からマナスル・プラトーの觀察を終えてマルシャンディ谷・ポカラを経て十二月十七日小原・橋本が帰国した。残務のためおくれた村山もやがて帰着して、いよいよマナスル本隊の実行計画は入念に検討され、一九五六年二月から船便及び空輸で全隊員・全裝備が発することの手筈が整つた。

以上、量的国民的に貢献著しい毎年の国体登山と、質的技術的に飛躍した海外遠征・マナスル踏査及び試登の二つは、最近代日本山岳会の代表する本邦登山界のビッグ・イヴェンツであつたが、この外にも登山界の復活躍進振りには戦前の事蹟を凌ぐものさへある。

その最も顯著なものは海外遠征登山であつた。第一に、日本山岳会のマナスル先遣隊がアンナプルナ、マナスル山群を探索していたと同じ頃に、早大山岳部・稲門山岳会の南米ア・コン・カグア遠征登山が、朝日新聞社、日本アルペンチン協会及び日本山岳会の後援を得て、実現の運びに入つた。関根吉郎(三十七歳)

を隊長とする新進OB碓井弘、浅山貞郎、現役学生日下田実、塚本茂樹、今村俊輔の一行六名(全平均年齢二五・三歳)は、南米最高峰のアコンカグア(七〇三五米)登頂のみならず、より困難なメルセダリオ(六七七〇米)、ツブングア(六六五〇米)などの高山でのチーム・ワークを建前とする登山形式の高所訓練・高度馴化の実験のテストを行いヒマラヤ遠征登山に資する目的をもつて、昭和二十七年十月二十四日神戸港出帆の長崎丸で旅立つたのである。一行は十二月二十三日アルペンチンのブエノスアイレスに着き、ペロン大統領を初め同国政府要路の人々に厚遇され、同国体育協会、スキー山岳連盟から全面的の後援協力があり、二十八年一月早々山岳部隊の駐屯するメンドサで最後の準備編隊を終つて、一月十二日アンデス山麓に向けて汽車で出発した。そして十三日プエンテ・デル・インカからアルペンチン陸軍のアコンカグア専門家ウガルテ少佐の指揮するア国カメラマン、ガイド達の一隊が協同し、ムーラ(ら馬)四十頭を使つての行進が始まつた。ベースキャンプは四二五〇米のブラサ・デ・ムーラスの氷河末端附近。その上には六〇〇〇米のエヴァ・ペロン小屋、六五〇〇米のプレジデント・ペロン小屋(世界最高位の山小屋)がある。

第一回の試みの後、関根と日下田は二十四日カテドラル峰(五三三五米)に登り、次いで一月二十六日プレジデント・ペロン小屋附近の第二キャンプ(六五〇〇米)からアコンカグア主峰

に登頂、引続き二十八日南峰（六九三〇米）の峻険登攀にも成功し、ア峰における主峰・南峰に全隊員の同時登頂、六千五百米の高度に四日間も滞在して格別異常な症状も呈しなかつたという好記録であった。かくて一行はアコンカグア登山だけで終つて、五月八日帰国したが、日本の立場からいえば、七〇三五米の登高は昭和十一年立教隊初登のナンダコート頂上六八六七米を凌ぐもので、第二回マナスル攻撃が済むまでは日本人の到達最高記録であつた。勿論マナスルは登頂未完成であつたから、日本人の得た最高絶頂は本篇に課せられた時代においては早大のアコンカグアであり、日本人初登の最高峰は立教大のナンダコートであつたことになる。

右に次いで海外遠征に出かけた組は、京大・学士山岳会中堅新進をもつて組織しアンナプルナ第二峰（七九三七米）を主目標とした山群南側からのポスト・モンスーン期登山隊である。隊長今西寿雄（三八歳）以外は三〇歳を超えない隊員伊藤洋平、舟橋明賢、立平宣雄、藤平正夫、脇坂誠、藤村良の計七名で、大部分日本山岳会々員であり、日本山岳会及び日本体育協会の後援諒解、中部日本新聞社・京都新聞社・神戸新聞社の後援で予定通りなり立つたものであつた。二十八年八月三十日二名先発、九月五日日本隊出発、空路印度カルカッタに入り、同国ノータンワからネパール国フトワールに着いて、十七日二トン余の装備食糧、リエゾンのデイリー、ガルツェン等七人のシェル

パ、七十一人の人夫等と共に奥地行進を開始し、二十四日ボカラ着、二十六日目的のマデイ・コアラ上流山懐に向つて十月初旬シクリス奥の牧地に根拠地を設定してアンナプルナ二峰南面を偵察登高にかかつたが、結局南面は登高不可能と断ぜざるを得なくなつて、合流した後発隊と共に山群北面に転進することに予定変更、藤村・デイリー等の輸送隊はマルシャンディ谷迂廻、本隊は五一四〇米の峠ナムン・パンジャンを刻苦乗越して二十一日マナスル先発隊（今西錦司隊長一行）のベースキャンプ附近に至り、直ちにアンナプルナ第四峰登頂を目的として上方キャンプの設営、輸送、前進に着手し、ついに十一月二日テイルマン・ルート稜線上に第五キャンプ（七一〇〇米）を打ち建てたが、天候激変、モンスーン吹雪の襲来を受けて天幕は破られ登攀者は凍傷に罹つて危険状態となつたので、四日終に退却して九日根拠地を引払い、トンジェ・ボカラ経由、カトマンズからカルカッタへ或いは直接カルカッタに飛んで、十二月初旬帰国した。因みにアンナプルナ第四峰は一九五五年五月末西ドイツ隊によつて初登頂された。

なお海外遠征登山を戦後逸早く名乗つて出たパーティに福岡山の会がある。昭和二十六年シッキム・ヒマラヤのトウィンズ峰（七三五〇米）を目標として実現計画に入つたが、当時の状態では日本山岳会の積極の後援を得られず、国外の事情もあつて以来中絶し、二十九年度目標の山岳を変更して遠征の予定も

報道されたが、依然具体化していない。名古屋を中心とするジャノー（七七・一〇米）目標の学術調査登山計画も報道されたことがあつたが、これまた同様の状態である。その他学校山岳部などでヒマラヤ、アラスカまたはニュージランドなどへの遠征意図も見られたが、いずれにせよ海外遠征は資金経費と外貨の枠の二条件でいかに優秀な隊でも私的個人的色彩が強い場合には、頗る困難な実行であるといわざるを得ない日本の現状である。

最後に一九五五年度京大・カラ・コラム・ヒンズークシ学術探検隊、特にカラコラム支隊の略跡について略述しておこう。総隊長木原均、ヒンズークシ支隊長木原隊長、岩村忍、北村四郎、山下孝介、カラコラム支隊今西錦司支隊長、松下進、原田直彦、中尾佐助、藤田和夫の諸学者専門家並びに後援者朝日新聞社特派員及びカメラマンで、本隊のヒンズークシ支隊はその研究によつて世界的權威である木原教授のパン小麦祖先の探求を初め生物学的人類学的採集研究調査を行い、カラコラム支隊は人類学的地質学的野外観測研究を行つて総合学術調査の実績を世界文化のために貢献しようというのであつた。この内高山に直接縁の深いカラコラム支隊は四月初先鋒隊二名を送つた後、五月十四日本隊と共に羽田発、パキスタン国カラチに飛び、二十二日ラワルピンディに向い、それよりキルギットまで空路、ここで二隊に分れ、松下・藤田・林田（日映カメラマン）・イナムラ

ハン（パンジャブ大学学生）は人夫三十余人を連れて六月四日発、インダス河本流から四千五百米の峠二つを越しブラルド河流域に入り、今西・中尾・原田は同日キルギットを出てフンザ、ナギールを経てヒスパル氷河（全長五二キロ）を廻りヒスパル峠（五三〇〇米）からピアホ氷河に下つてアスコーレでインダス隊と合流、次いで全隊バルトロ氷河を進んでコンコルディアに到達、地球第三の極の崇高美に眼の当り接してから帰途につき、七月二十日過再びアスコーレに戻り、また二隊に分れて今西・中尾はスカルドに向い、残りの隊員はフンザ隊往路を逆に西方に向い、八月十四日フンザで両隊合流、以後順路カラチを経て九月三日本隊より一日おかれて羽田に帰着した。

右のカラコラム・ヒンズークシ学術探検隊はその目的に応じてついに一の小規模純粹登山も果さなかつたが、本邦人の隊として最初のカラコラム入りに、登山家としても具眼達識の人達もたらした知識と経験、そして美しい記録写真映画は、本邦登山界に好個の刺激と良剤を与えたものと考えられている。

なおまたこれは計画中だけのことであるが、昭和三十年七月パリの南極會議に次いで同九月ブラッセルの特別委員會会で決まつた第三回國際地球観測年におけるベルギー領プリンス・ハラルド海岸を割当基地とするわが国の南極観測隊は、茅誠司会長の下に學術會議で本決まりとなり、一九五六年十二月予備調査、一九五七乃至一九五八年本観測とし、朝日新聞社の支援を

得たのを初めとして朝野の協力を得、政府も予算振当に本腰となつてきた。十一月二十五日南極観測隊長候補に永田武東大教授が推され、同教授はその後観測地点が氷雪・酷寒・烈風と無人境への遠征探検という共通要素の克服処理で世界の高山地帯で経験研究の実績をあげている日本山岳会に積極的な応援と設備に直結して副隊長格の人物推薦を要望したので、日本山岳会は出来るだけ持てる経験を生かして協力することを約束かつ実行に着手し、また評議員西堀栄三郎が副隊長候補として観測隊側から内定されるに至つた。

さてここにわが国内の第五期登山の趨勢及び記録はどうであつたか。昭和二十一年四月戦後始めて復刊された「山」——日本山岳会々報一三三号を見ると、未だ登山界再建の決意と熱意の溢れた所説や感想や僅かの山歩きの便り位しかないが、その後追々とそして予想外急速に同年末までには自由な純粋な山登りが紙面を占めて行つて、二月冬の高野奥、四月立山スキー行と飯豊の赤津山、四・五月薬師単独行、五月鹿島槍合宿、六月穂高・東駒・清津峠などの小紀行文・通信が見られるに至つた。会報にあらわれるところは一面一般の登山界に通じ、かくて登山の量的復活、山小屋・登山路等施設の補修新設、既成団体の更生は勿論、新制高校その他地方的登山団体の勃興からして、次第に戦前最盛期の域に近づいて行つた。婦人の登山界に占められる量・質の百分率も俄然大きくなつた。資材の窮乏・食糧

事情・経費その他国連軍占領時代の窮屈な制限も登山者の脚をしばる所か、その克服に工夫と研究を重ねて、全体的に進歩を示して行き、ついに昭和二十七年講和発効以後は全く再び昭和十年代の登山の隆盛を来すようになった。

新記録的登山の方面では、各大学その他登山団体のめざましい再編成と熱心な追求とによつて、戦前殆ど処女地を残さないまでに信ぜられていたわが国の山岳地に、進歩的な新形式拡充による多くの新記録を生むに至つた。今その内から代表的と公認され得るものを掲げて見よう。

まず本邦屈指の代表例として、最も近代的登攀の対象となつてゐる日本北アルプス穂高連峰について、諏訪多著書（前述）等を見れば、昭和二十一年から三年の間に滝谷、明神岳最南峰フェース、屏風岩、前穂高北尾根及びその又白側、岳川谷壘岩尾根から奥穂高、奥明神沢等に、岩稜会、東大、甲南高校、早大、鷗翔山岳会、浪速高校、明大、日本山嶺会、神戸高校、関西登高会等の各パアティが、夏山と積雪期たるとを問わず、精細に分化した執拗な登路変更形式新登攀を進めて行つたことが判る。その後二十八年まで五年の間主として日本山岳会の機関誌に報告されたものによれば、二十四年冬期慶大の西穂高、奥穂高極地法登山、七月岩稜会の明神岳五峰東壁新ルート、同十二月及至二十五年一月明大の明神岳東稜戦後始めての完登・前穂高・奥穂高、二十五年三月早大の裏屏風無名尾根・前穂高北

尾根・北穂高極地法登山、二十六年三月早大の岳川谷より天狗沢を経ての滝谷ドーム中央稜その他の新登攀、二十七年冬期慶大の前穂高北尾根奥穂高極地法登攀、五月岩稜会の前穂高北尾根四峰甲南ルート登攀、日大の奥又白から槍へ極地法登山などが挙げられる。

穂高と同様登路変更形式の極度に分化した事例は、程度大小の差こそあれ、第四期からの空白を忽ちに埋めて、二十一年三月立教大の鹿島槍東尾根、法政大の遠見尾根・鹿島槍北壁、二十三年一月浪高の鹿島槍北壁ラッシュアタック、春期浪高の白馬岳三合尾根登攀、早大の赤谷尾根からの劔岳極地法登山、二十四年十二月乃至二十五年一月阪大の白馬岳主稜ラッシュアタック登攀等のほか、白峯北岳峭壁、そしてかかる事例の最尖端に立つ上越谷川岳一ノ倉沢の岩壁、西日本では伯耆の大山、九州の阿蘇高岳北尾根、東京附近では、三峠山屏風岩、丹沢山塊溪谷の悪場などにも見られ、各々その地域特殊山岳特殊部分の専門クライマース及びそのグループまでも生れるに至つたが、本編においては遺憾ながらその概観をも略記する余裕はない。

比較的大きい地域の登山または注目すべき登山で記録されたものには、昭和二十一年六月藤島玄等の飯豊杵差岳（一六三六・四米）、二十二年一月北大山岳部の日高山脈ナメワツカ岳（一七九九米）及びエサオマントツタベツ岳（一九〇一米）の

イグルー利用極地法登山、二月北大の日立山脈イドンナップ岳（一七四八米）登山、同十二月乃至二十三年一月早大山岳部・稻門山岳会の小島六郎を監督とし第一隊野田三郎、第二隊金子実、第三隊村木庸益、第四隊山形門司、第五隊藍田務の各リーダー、隊員計十六名の国内としては比較的大規模な編成によつて長大な東尾根からの一カ月に渡るペタガリ岳極地法登山（第六キャンプまで設置）、二十三年三・四月の新村正一外三名の雪洞（雪穴）夜営十二・三夜に及ぶ劔早月尾根から槍までの大縦走、二十四年一月北大の札内岳・カムイエクウチカウシ山（一九七九・四米）の長駆積雪期踏破、三月北沢から始めて赤石・聖まで慶大一行の大縦走、同月関西学院山岳部及び山岳会の雪洞（雪穴）十八日に及ぶ樽池・白馬・不帰・鹿島槍だけ往復の後立山脈極地法縦走、五月日本山嶺倶楽部の白馬岳主稜長時間継続登攀、十二月乃至二十五年一月法政大山岳部の積雪期槍北鎌尾根末端からの冬期完登、一日遅れて立教大山岳部も成功、少し遅れて登歩溪流会の速攻形式による同所登攀、同期明大の前穂高北尾根八峰東北支稜からキャンプ五を設け前穂高から奥穂高登頂往復十五日間の行、二十五年冬期北大山岳部十二名のカムイエウチカウシ山新ルート及び一八三九米峰完登、同春期北大山岳部員森田実の十勝岳白銀荘・トムラウシ山・化雲岩附近・松山温泉の単独行、同十二月中旬及至二十六年二月にわたる登歩溪流会川上晃・服部・大谷の利尻山（一七一八・七米）の峻峻

南稜及び東稜への試登とついに二月一日川上が単独東稜からの積雪期登攀に四回目に成功した執拗果敢な攻撃、二十六年右の登歩深流会パアティが利尻山南稜の夏期初登攀を遂げたこと、同三月法政大の北仙人坊主尾根から一ヶ月にわたる剣岳極地法登山、同十二月乃至二十七年一月北大からなるサポート隊の支援による白銀莊美瑛岳（二〇五・三米）・トムラウシ山・忠別岳・白雲岳（二二二・九米）・黒岳（一九八・四米）・層雲峽温泉を通してキャンブ七箇所に及ぶ積雪期大縦走、二十七年四・五月津田康祐・岸田権二・竹中茂・馬場太一郎の白馬岳から北方尾根を長駟して黒岩山（一六二・三米）から未踏のコースを犬ヶ岳（一五九・三米）・白鳥山（一二八・六米）まで縦走、七・八月新井清等京都組及び王滝営林署のパアティの木曾御嶽赤川地獄谷・伝上川下降、同十二月中旬及至二十八年一月初旬伊藤洋平を隊長として四隊編成された京大山岳部一行（毎日新聞社後援）の北海道知床半島知床岬・知床岳（一二五・六米・羅臼岳一六六・〇米）・硫黄山東峰（一五二・二米）等に根室側からの極地法冬期初登攀、三月慶大の二十余日の雪洞（雪穴）生活による剣から西穂高岳までの大縦走、二十九年一月札幌山岳会の知床連峰の羅臼岳から硫黄山本峰積雪期初登、三月早大の横尾岩小舎・屏風岩東側無名尾根・前穂高北尾根・奥穂高・北穂高の十七日間の極地法登山、東大の後立山・黒部谷・剣岳・弥陀ヶ原の冬期大横断、十二月立教大の白馬・針木縦走、慶大の針木・穂高

縦走、三十年二月加藤数功等四名の一行の屋久島永田岳（一八九・〇米）の大障子（一五八・〇米）へ右谷及び北壁ガリーに積雪を踏んで初登攀、三月京大の毛勝・剣縦走、八月井本巖・田辺修の実川・虹吹沢・ピンカガチ沢・飯豊本山、藤島玄・井本・佐藤一栄の杵差岳東俣川、十二月立教大の穂高極地法登山中戦後最初の記録として冬のジャンダルム飛騨尾根登攀、同月法政大の横尾山荘・前穂高北端から四箇の前進キャンブを稜線上に設けて槍登頂往復を果たした十九日間の大規模な極地法登山等がある。

以上のほか、たとえば日本山岳会越後支部発行「越後山岳」第五号には飯豊・朝日両山塊その他の山岳に関する記録的な山行記事が多く掲載されているし、登山史編纂上の主役日本アルプスにおいても本編全般を通じ掲記を割愛した登山記録が相当数であったことは筆者も自認する。しかしそれは一面止むを得ない刊行事情によつての制限であり選択でもあつた。他日何人かが精魂傾けて編纂するであらう「詳説日本登山史」を期待するのは、むしろこの執筆者の側にあるといつてもよろしい。

さて山岳遭難については第五期の記述においても殆ど触れるところがなかつたが、こゝに只一つ一般社会にまで重大関心を抱かせた昭和二十九年初冬の悲惨な富士山雪崩事件に言及しないわけに行かない。その年十一月二十八日午前十時四十分頃、富士山吉田口に大雪崩が発生、六合五勾小屋と七合小屋の間を

登高中の慶大医学部山岳部員三名、夏道を七合小屋に近接中の東大山岳部員十一名、及び七合小屋直下数十米の凸斜面を下降中の日大山岳部員二十四名の三組が遭難し、死者・行方不明者慶二、東五、日八、計十五名を数えた。この雪崩の規模は富士の冬雪崩としては稀有の大きさに属し、大沢九合目附近からツバクロ沢三合二勺に達する標高差千六百米、径路の長さ四千米に達するものであった。大学はもとより官民、自衛隊、日本山岳会学生部と傘下各大学山岳部、山梨山岳連盟等の急速救援捜索が行われ、相繼いで幾回となく活動が続けられた挙句、ついに三十二年六月三日最後の遺体発掘をなし遂げて捜索を完了した。この間三大学関係者一六〇八名、日本山岳会学生部その他の応援登山者五二三名、地元警察・消防団・青年団・自衛隊九九九名、計三二三〇名を数えた。雪崩発生の経過、原因、遭難に対する批判、今後の冬期登山に関する警告等、各所において論ぜられ研究され新聞雑誌の好題目となって世上を賑わせた。日本山岳会としては新聞紙上及び機関誌会報その他に真相を解明し、公平な意見を述べることにつとめたが、一方富士山雪崩調査委員会を組織して研究資料蒐集に着手したことも附記して置こう。

末尾のことば

最後に本篇の締めくくりとして、日本山岳会編山日記の資料から日本登山界の現勢を数字で推定してみることしよう。全

国の登山団体数は、一九五五年版より都道府県別にして、北海道三二(二二六七名)、青森五(八二名)、岩手三〇(八二四名)、秋田一六(三二三名)、山形二一(一一五名)、宮城三〇(一一〇〇名)、福島二一(四三八名)、群馬一三(六三二名)、栃木一六(一七四名)、茨城三(一三六名)、埼玉一五(七二七名)、東京二〇三(二五〇九〇名)、千葉四六(一六二〇)、神奈川九六(四一四〇名)、山梨三四(一一六七名)、新潟四七(二〇一二名)、富山二二(五六二名)、岐阜一七(四六六名)、長野三二(九〇七名)、静岡三三(九四六名)、愛知五四(二八五三名)、三重三〇(二二六名)、石川一八(三三七七名)、福井七(二〇五名)、滋賀二(二六名)、京都三八(二三〇三名)、奈良四(九四名)、和歌山五(七八名)、大阪八七(五七三八名)、兵庫三二(二〇九名)、鳥取一〇(三七一名)、岡山一四(八四三名)、広島四(二〇四名)、島根七(一三七名)、山口一〇(二九六名)、香川三(八〇名)、徳島一(一九名)、高知四(七五)、愛媛九(七七三名)、福岡七三(三三五八名)、佐賀六(一八四名)、長崎二二(五四四名)、熊本一三(一一三四名)、大分二一(九五四名)、宮崎一一(三二四名)、鹿児島一(二五名)であり、合計一二二団体で岳連、学校山岳部、実業団体及び一般団体を含み、所屬人員合計六九〇二七名(未報人員数を含まないもの)、何等かの形式で発行配布する機関誌類の数は団体数の四十九%の約六百と計算される。即ち大体において日本全人口の内

大約一千二百人に一人の割合で以上いずれかの登山団体に属している登山者または山岳愛好者が現存している勘定であつて、他の体育関係各部門に比較してむしろ多い方の部類に入るようにも推測される。

団体に属していない個人の登山者、旧来の宗教上教育上慣習的土俗行事的に催される講中登山・修学旅行登山等の人数、さらにまたスポーツ登山以外の学界官界産業関係の研究測量調査または建設のための発行までを包含してみると、その総数は上記数字を遙かに上廻るものたることは勿論である。しかるにそれ等登山者全体が利用する施設、たとえば山案内組合通算七十二（一九五二年版）、山小屋全国合計七百八十九（一九五六年版）、という数字の示す価値は、遭難救済・通信・電話その他の乏しい施設のそれと共に、未だ甚だ少しとせざるを得ない。特に遭難の面からみれば朝日新聞社沼田通信局長岸虎尾が「山と溪谷」一九七号に掲げた谷川岳遭難死者——大正四年以来昭和三十年まで合計一八四名——の一代表例に鑑みても、今後登山界そして日本山岳会の施策進展が待たれるものであらう。

日本山岳会昭和三十年十二月十四日現在の会員数は会員藉未解消のまゝでも含めて二八五一名で、全国登山団体中必ずしも著しく多数ではないが、これは半世紀の昔創立された当時から英国のアルパイン・クラブに範をとつた伝統クラブ精神がしからしめた感がないではなかつた。即ち入会を厳選した時代は

確かにあつたし、その精神は今日なお会の歩み方の上に何等かの形となつて現われていた事実も掩いかくせない。しかし日本山岳会は明治三十八年の誕生以来一時もとぎれずに存続し、とにかく、成長の常道を辿つてきた。そして最近連続的にヒマラヤ遠征登山隊を派遣していることによつて世界の登山界最高水準に迫るに至つた。国内ではその本来の品格を失わずに団体登山の運営を担当しつつ、一方会自体において公開の講演・講習・出版・研究等種々の形式手段によつて、登山の指導面に奉仕してきた。このような高度の、そして文化啓蒙的の活動がどんな風に継承されまたは変改されてゆくか、或いは更によく結実するのであるか、この問題は会員の上昇的自然増加と組織経営の一般的充実、そしてまた支部の発展という懸案と共に、日本山岳会次代の史的課題たるに相違ないのである。

終りに臨み菲才をも顧みず本篇を執筆し得たのは偏えに先輩新進諸氏の貴重な忠実な報告記録によるものであり、かつまた原稿の整備に当つては日本山岳会役員会員並びに会友諸氏の御援助にあつた所が少くない。こゝに厚く感謝の意を表する次第である。

なお本篇は昭和二十八年六月着手、その集成一号分「日本山岳会史」は日本体育史の原稿として提供し未公表のまゝとなつてゐるが（会報一七〇号七頁参照）、その後手許原文の追補訂正を幾度か重ねて、同三十年末までの史実集成第二号を同三十一

年五月中に脱稿した。しかるにその五月九日及び十一日にマナスル登山隊がついに初登頂を完成したことを知った。これは第五期連年の努力の結果でもあるので、後世日本登山史の集大成企画にはマナスル初登の年までを一時代として延長してもよいと思う。

〔完〕



関口 泰氏

追悼

関口泰氏を想う

島 田 巽

関口さんが、北鎌倉、浄智寺谷の静かなお宅で逝かれたのは、昭和三十一年四月十四日のことであつた。その前年の二月の日曜に、会の長老たちが、関口邸へ観梅かたがた語りに行くことになつてゐた。これは、高野鷹蔵先輩の発議だつたが、関口さんは、いわば押かけのこの会合を大いに喜んで、日を定めて下さつた。ところが、あいにく高野さんはじめ長老たち、いづれも旅に出られて不参となり、結局、松方夫妻、日高、藤島の諸氏と、ロンドンから来ていたロイター通信のコール氏に私の六人が、暖い日差しを受けて芝生で御馳走になつた。この日の関口さんは大変元気で、私たちを裏山へ案内して下さいました。

北鎌倉から長谷へとつづく、この尾根筋には六百余年前、この浄智寺の奥に住んだ元僧梵竺僊を記念する碑が建つてゐるが、これは、かつて同じ谷に住んでいた英国の日本研究学者として知られているサー・ジョージ・サンソムの志をついで、関口さんが建立されたものだ。私たちは、この碑のあたりで、まだ緑を見せぬ四囲の丘陵を眺めながら語つたが、それから一年後に、関口さんが六十七才で逝去されようとは夢にも思われなかつた。

関口さん昭和五年の七月末に、この浄智寺谷の新居に移られてから、この谷戸の自然を深く楽しまれとともに、「浄智寺記」などに現れてゐるように、かつてこの谷に栄えた浄智寺の史実を、克明に探究された。関口さんが、一方で自然の美しさを心から愛されるときにも、その風景のなかに刻まれた歴史の足跡を、深く、情熱的に追及される態度は、関口さんの一生を通じて並存していたすぐれた特色だといえると思う。これは関口さんの初期の登山記などに接すると、おのずから明かなことである。

この初期の登山といえば、関口さんは日本山岳会が創立早々のころ、一高に在学中で、ひたむきに山旅をつづけていた古い会員だつた。「山岳」に現れた最初の紀行は、第五巻第二号(明治四十三年七月刊)に現れた「両黒帽子山及び大無間山」で、これは杉本良氏との共同執筆となつてゐた。これは四十二年七月、一高三年、二十才のときに行われた登山で、赤石山脈南部

の標高こそ高くないが、まだ未踏の地だった地域を目指して黒帽子、大無間を経て田代川へ出る九日間にあたるものだった。この旅のあと「山岳」第七年三号に、関口さんは「小無間山と大無間山、駿州田代よりの登路」を寄せた。

明治四十四年、帝大在学中の夏休みには、長い旅がつづいた。

「上河内にいつて、焼岳、槍、穂高へ登り、蒲田の方から、私は糸魚川に水産学校の教員をしてゐる友人を尋ね、妙高へ登つて帰る予定だったが、赤倉の望岳楼の湯槽から佐渡ヶ島を見たのが病みつきで直江津から佐渡へ渡り、新潟へ帰つて、当時まだ工事中の岩越線を歩いて喜多方へ出て、檜原湖を経て当時高等工業の教師だった叔父の家を訪ね、高湯から吾妻山へ登り会津街道を檜枝岐に着き、尾瀬平の岩魚小屋へ泊つた翌日燧岳へ登つてから戸倉へ行つたので夜中になり、次の日もまた夜になつて濃霧の中を赤城山大洞にたどりついた」（「尾瀬再遊記」という、前後四十日位の旅だった。この長旅の記録は「燧ヶ岳に登る記」（山岳第七年一号）「吾妻山と磐梯山（米沢方面登）」（同第八年一号）などに断片的に記されている。当時まだ会津側から尾瀬を訪う人がまれだったので、その後、関口さんは「尾瀬旧記」で、会津風土記や新編会津風土記などを参照されて、尾瀬の記録を紹介された。さきにも記した関口さんの史実探究の熱意が、尾瀬の旅にも再びはつきりと現れている。

このような旅と風景を愛する心と、史実をゆるがせにしない心との並存は、関口さんと赤城山との関係に、もつとも顕著だといつてよい。赤城での生活は、関口さんの生涯に、おそらく私たちが想像もつかぬほど、深いつながりを持つていたもので、「伝説および旧記に現れたる赤城山」（第七年二号）、「赤城山と尾瀬沼」（第七卷三号）赤城山の冬（第八年二号）、「春から秋まで（赤城山大洞日記）」（第八年三号）「山吹日記（天明六年榛名赤城登山紀行）」（第九年二号）、「赤城登山道案内」（第十年一号）がある。赤城大洞の生活を愛した若い関口さんの情緒と、旧記、伝説、地誌をゆるがせにしない学究的な態度とが、これら赤城山に関した初期の文章の中に感ぜられるのである。

赤城は関口さんにとって心の山であつたのだろう。こんなキザつばい表現を故人は好まれないに違いないが、後年、大沼畔に小屋を作り、階下を艇庫として、湖上に学生時代ボートで鍛えた腕で、スカールを楽しみ、冬はスキーで過すという調子で、実に何十年という赤城との交りだった。猪谷六合雄さんとの交りも、この間変ることなくつづいていた。この赤城への傾倒ぶりが、もつとも純粹に、美しく表現されているのは「赤城山の冬」と「春から秋まで（大洞日記）」の二つの文章だろう。これは後に刊行された「山頂漫歩」「新緑登高」の二著の中では「赤城山の四季―大洞日記」となつて新たに補筆されている。

赤城を詠まれた歌の中には、次のようなものもあった。

上つ毛の赤城の山の裾ながに我が思うこと遠くはてなし
湖ぞいの小舎にいぬれば窓近く小鳥きて鳴く夜や明けぬらし

(山湖隨筆)

×

関口さんの熱烈な山旅が大学卒業とともに途切れて、「山岳」にも寄稿がなくなつた一つの原因は、大正三年に台湾総督府に勤務されたためだろう。この台湾生活五年の間にも、大正七年に台中から十一日ばかりで新高登山を試みたという。その後、大正八年に大阪朝日新聞に入り、翌年退社して九年に渡欧した際にも、山旅を好む人らしく、暇を見てはアルプスを眺めに出掛け、あるいはノルウェーへ旅して、当時ベルゲンの気象台で研究中だつた藤原咲平博士を訪ねられた。帰朝後、大正十二年に東京朝日新聞に再び入つてから、昭和十四年に退かれるまでは、忙しい日々だつた。調査部長、政治部長、論説委員として、また月刊雑誌「社会と国家」を発行して毎月論説を書かれたり、その間ベルリン特派員として赴かれたりという生活だつたが、それでも山歩きは、寸暇を求めてもつづけられた。

関口さんのお伴で、私は二回出掛けたが、その一つは昭和十一年七月の南アルプス、他は戦争直後の初夏の尾瀬だつた。南アルプスの方は、関口さんの多忙な時代の夏休みであつたろうと思われるが、この先輩との旅は今でも楽しく想い出される。

これは鹿塩から三伏峠を経て塩見岳に登り、井川の谷に降りて桜島小屋に泊り、東岳、荒川中ノ岳を通つて赤石に登り、帰路は樺島からデンツク峠へと出た五日間の長旅だつた。この紀行に関口さんは「山頂漫步」と題され、最初の山の隨筆集の書名ともされた。東岳の尾根あたりから赤石まで、実にのんびり歩いたのが、関口さんに、こんな題を思い浮べる機会となつたように記憶している。赤石で関口さんは「特に聖岳の偉容を、瞬間的にもと望んで待つたが、その望みは達せられずに下山の途についた。」と記されている。本当に関口さんはこの時、残念がられたが、たしかに二十余年前、大無間山への旅で間近かに仰いだ聖の姿を、霧の中に求めていられたのだつた。

関口さんとはじめての山旅で驚いたのは、当時四十七才の関口さんに、登りでは大して負けもしなかつたが、下りになつていつも残されがちになつたことだつた。小柄の先輩が赤石の下りなどを、ぐんぐん飛ばして行くのにはカブトを脱がされた感じだつたし、デンツクの上り下りで盛夏の草いきれに参つたのに、関口さんは一向平気で、新倉で私たちと別れて、また西山温泉までの道を辿つて行かれた。

戦後の尾瀬行は、それから十年を経た時だつたが、依然として強く、麓から尾瀬原温泉への降路を伝つて三条の滝まで行き、翌日は原から菖蒲平、富士見峠を経て元氣一杯で、翌朝は沼田の町で講演の席にも出られたほどだつた。そればかりでな

く、戦後は文部省社会教育局長などをやられたせいもあつて、政府内閣の委員会の委員などを数多くつとめられたが、その多忙な中を国立公園中央審議会委員として、まめに候補地を歩かれた。久しぶりにお会いすると、「月山に登つて来ましたよ」「屋久島の山はなかなかよかつたよ」「今度は大雪山へ行くつもりだが」などと嬉しそうに話されるのだつた。これらは、いずれも六十を過ぎてからの山登りであつたわけだ。

日本山岳会創立直後の会員として、ほとんど最後まで山旅から離れなかつた関口さんに、もつと会へ来ていただくことを私は度々お願して、かなり、その氣になつていられたのに惜しいことをしたと思う。戦前の外遊中に、会の事務上の手落ちで、関口さんと会との縁が切れてしまつたのも、再び戦後にお願して会へ復帰していただけたのは幸ひだつた。

私などは、新聞の仕事の上でも、貴重な先輩として、週一、二回はお眼にかかる機会があつたのだが、逝去のあとで思えば、もつともつと教えを受けるべきことが多かつたのを、取かえしのつかぬこととして残念に思っている。同時に山歩きの間でも、なぜもつと関口さんの話を聞いておかなかつたのかと惜しくて仕方がない。これは私ばかりでなく、会としてもそうだつたと思う。もともと口数が少く、筆名を「黙」「黙山人」とされたほどで、戒名にも文泰院黙山明義居士と、黙の字が入れたらたほど「恭黙」の方であつたせいもあるが、それでも山の

登りや小屋では、実に愉快に語られた方だつた。

それだけに、なお惜しまれるのである。昭和三十一年四月十七日、円覚寺での葬儀委員長だつた笠信太郎氏が「私もあまりに近しくしていただいておりましたので却つて山の高きに驚かず今日に至つてゐるのをいまだに恥しく思つております」と、弔詞の一節で述べられたが、山登りの世界でも、私たちは同じ悔を抱えているわけである。

関 口 泰 氏 略 歴

明治二十二年三月一日 静岡市深草に生る

明治四十二年十二月 日本山岳会入会、会員番号二三四

大正十年四月 退会

昭和二十三年 日本山岳会員に復帰

昭和三十一年四月十四日 鎌倉市山の内町一四一五の自宅に

て逝去

追悼・伊藤愿さんの思い出



伊 藤 愿 氏

伊藤 愿さんの思い出

田 口 二 郎

この正月私は長年手をつけたこともない、ガラクタの書架をひっくり返して、昔の、といつても昭和の初期から八、九年までのことだが、当時甲南高校や京都大学から発行された山の雑誌を探し出した。せつかくの休みにもつと気の利いた読みものが有りそうなものだが、実はそれには、伊藤愿さんのことを調べるといつた下心があつた。

故人の思い出を書くに当つて、私は社会に出てからの愿さんについて、余りにも知らぬことに初めて気がついた。

愿さんは、昭和七年に京大を卒業しているが、暫くしてから北京に渡り、京大のヒマラヤ計画の下調べのため、単身渡印した昭和十一年から十二年にかけての時期を除けば、終戦後引揚げて来るまでの生活の本拠はずつと北支にあつた。初めは松方

さんや浦松さんが関係していた太平洋問題調査会の研究員として渡支したが、やがて北支の最高経済顧問だった平生鈺三郎氏の秘書になつて、大陸時代の愿さんは大いに羽根をのばしたらしい。引揚の前は、青島の領事をしていた。社会に出てからの愿さんを一番良く知つているのは、京大の今西さんや西堀さんやそれに加藤泰安君や支那時代の愿さんの面倒を良く見て、愿さんと房子夫人との仲人役ともなつた松方さんであろう。愿さんはちよつと東北人みたいな重厚さを持つていた反面、非常に人懐こい方で、会つたら忘れられない一風変つた魅力の持主だったから、壮年時代の故人については、いくらでも語り手がいると思う。日高さんも会報に、愿さんのことを懐しみ惜しまれて書いていられた。

私も戦後、外地から帰つてきたのだが、昨年十一月、愿さんが二カ年の斗病の甲斐なく遂に他界されるまでに、幾度御会いしただろうか。いつぞや東横線の日吉の家に泊りがけてお邪魔した時、飼つていた山羊が犬にかみ殺されたとかで、愿さんは庭に皎々と電灯を引いて、山羊の皮を剥いでいた。「みつともないから、夜にしてくれ、といつたんですよ」と夫人は苦笑していたが、当の愿さんは、昔、上高地や南股で兎を剥いだ時そのまゝの如何にも楽しそうな顔付だった。帰国してから、安本から建設庁に行き、講和条約が出来て勤務先の渉外部が解散と決つたので、身の振り方に頭を悩ましていた頃、お会いするこ

とがあつた。或る土建屋からとてもうまい話があるのだが、自分の役所とのコネクションを目当にした泥沼商売かも知れぬから、気が向かん、しかし、金はある所にあるものだね、というような話を聞かせた愿さんは飄々として、大いなことにはめげない筈なのに、この時ばかりは、戦後私達大かたの生活を揺さぶつた嵐にもまれて憂鬱そうだった。しかし間もなく大蔵省にポストがあつて、在籍のまゝ亡くなられた。愿さんには、今いつたような潔癖なところがあつた。京大を卒業して直ぐに大阪朝日に入つたが、社会部の警察署廻りが嫌いで直ぐ飛び出した。私の父の処に相談に来て、高文を受けることに決め、一年許り打ち込んで勉強し見事にパスした。学校時代は、山専門だったから、高文に受かつた時には、私達も驚いた、頑張りも有名だったが、頭も良かった。

私が欧州から引揚げて来て間もなく一足先に大陸から帰つて来た愿さんが、鎌倉に訪ねて来て下さつた。十年振りの再会である。しかし、愿さんを見て一番喜んだのは、私の老母だった。息子を二人失くし、娘達もかたすいて淋しく暮した母にとつて、愿さんの再現は、平和で良き時代であつた一昔前の、暖かい日陽のさす環境の中で親しく行き来した人の懐かしい訪れを味した。

京大生の頃、愿さんは私達の阪神魚崎の家によく泊りがけてやつて来た。両親、兄弟、妹達の、共通の友人となつて、私達

は愿さん、愿さんと従兄のように親しんだ。昭和十年頃、私達が魚崎を引き払つて鎌倉に帰つて来てからも、それは愿さんが印度から帰国した年だから、昭和十二年だつたと思うが、帰国したその足で長谷の家に訪ねて来てくれて、それから間もなく、近くの浜辺の旅館の離れを借りて、二、三ヶ月滞留したことがあつた。ぶらりとやつて来て、よく母を誘つて釣に出掛けた。私は当時、サラリーマン一年生で大森に下宿していたが、土曜日に帰ると、夕方頃、愿さんが母と釣竿を下げて帰つて来て、勝手口で手を洗っていた光景などいまだ思い出す。愿さんの話好きは、すでに伝説になつてゐるから、書くに及ばないが、うちに来ても、愿さんの話相手は一人去り、二人去り、遂には母一人になつてしまふことが多かつた。

印度で、横文字に刷つた名刺の「愿」を「ジェネラル」の略字と間違えられ、大変な欺待を受けたという話や、フランス語のパーティーに出て飯がまずかつたという、如何にも英語のうまさうな話を、私の母は深更に及んで何度聞かされたかわからない。

私は愿さんに山の手ほどきを受けた者だし、先輩の愿さんは、よく私達甲南の山の合宿にもやつて来た。山の新知識や愿さんの抱負など、誰よりも多く聞いたはずである。それなのに私の記憶から、登山家としての愿さんの姿が、私の望むように、思うように出てこないのは、家族つき合いということが、私

の愿さんに対する気持の強い基調になってしまっているのに、強いて山の友人として、故人に焦点を合わすことに、若干の努力を必要とするからであろう。

しかし、愿さんを登山家として見直すために、古雑誌を少し丹念にひもといた時に、私は故人が持つことの出来た、ちよつと日本人放れした獨創性と線の太さに、今さらのように驚かされた。愿さんの足跡を追って見ると、その時代としては画期的な着想と実行とが次々に発見されて私を驚かす。これは必ずしも私の身びいきのせいとは思われないのである。それは、時代にして昭和の初期から七、八年頃までといつて良い。

戦後、昭和二十六年、愿さんは「米国土木事業の行政、技術研究のため、三ヶ月、欧米に出張を命ず」との辞令を手に入れて、半ヶ年専ら欧州に遊び、スイスでは昔とつた杵づかで、マッターホルンとヴェッターホルンに登つて来た。しかもマッターホルンは、独りで登つてしまつた。こう書くとは、何でも人並みのことをすることを嫌つた愿さんが、スイスでは「マッターホルン単独行」を決定したのか、と誤解を受けそうだから、愿さんのためにも記して置きたいが、私の手許にある愿さんの登山手記を読むと、他のパーティについて、何となく独りで頂上まで攀ち登つてしまつたのは、予約した案内人との連絡の手違いがその原因であつて、その手違いは、愿さんがもともとフルゲン尾根を希望したのに、案内人はその尾根を恐ろしがつて、遅

延作戦に出たことから起つたものらしい。若しフルゲン尾根を登つていたら、日本人ではその経験者はないのだから、面白い土産話が聞かれたに違いない。ともあれ、その案内人とは料金のことでも不快をなめさせられたらしく、グリンデルヴァルドは感激だつたが、ツェルマットは失望だつた風に、房子夫人に書いていられた。六ヶ月の旅に愿さんは九十九通の便りを留守宅に寄せている。堅人だったが、愛妻家でもあつた。それから、マナスル遠征の実現に必要であつた官庁との折衝に、役人だつた愿さんは惜しまず力を貸された。しかし欧州から帰つた愿さんは、体も少し不調であつたらしく、「ヒマラヤは、もうこんどは過ぎるなあ、次は南米かアフリカに行きたい」等といつていたことを思い出す。しかしその愿さんの心の底に、山への思慕がどんな形で宿っていたか、若い頃の、山への、ヒマラヤへの情熱を知っている者には、病床にあつてもそれが埋火のように燃えていたとしか考えられない。

私が、初めて愿さんを、というより愿さんの存在を知つたのは、もう三十年も昔の昭和の初期の頃だ。

私達のいた甲南は、初めは中学だけだつたのが、大正の後期に、七年制の高校に昇格したもので、高校生になつたといつても、丸帽が二本の白線に変つただけのこと、生徒の大かたは、阪神の住宅地帯から小学生のように徒歩で登校するいわゆる、ボンチ達であつた。今でこそ違うが、当時の阪神間には、映画

館や都会的な娯楽設備ひとつなく、全く田園的な雰囲気、そこで育った甲南の生徒の気質は大会の学生とも地方の官立高校の生徒とも違う、武骨ではないが、といって洗練されているわけでもなく、至極のんびりしている一方、スポーツには達者だったという手合が多かった。たまたま学校の裏に芦屋のロックガーデンがあつたので、早くより、藤木九三氏らのRCCの人の影響を受けて、芦屋の岩場を大人よりも巧みに登り降りする少年のグループが出て来た。この少年達はやがて高校生（勿論旧制の話）になる年頃に達するのだが、それよりも二、三年前に、甲南は高校に昇格した。処がクラスが定員に満たなかつたので、毎年、小数の欠員を外の中学からの志願者で埋めていた。私はまだ低学年だった私の幼い眼にも、他校から来た上級生が、甲南生え抜きの彼等と同級のボンチに並べ、おしなべてずつと大人に映つたことを覚えてゐる。この人達が柔道部や弁論部を作つて、ボンチの甲南も、一寸高校らしくなつた。

甲南の尋常科（中学のこと）に入つた頃、好奇心から大講堂の辯論大会をのぞいたことがある。願が四角に張つて大人ばい風貌の人が「人生とは何ぞや」とか難しい講演題目をかゝけて、壮重に落ち着き払って話していた。後年、それを話して笑つたが、その辯士が同志社中学から来た恩さんだつた。私は当時、恩さんと交つていたわけではなく、年令からしても中学の一年坊主と青年の違いがあつたのだから、当時の恩さんの姿を鮮明

に思出すことは出来ないが、恩さんという人は、甲南に移つたその年から、誰もが一目おく、老成したアンビシャス人といった印象を、与えていたように思われてならない。

この恩さんも甲南に来てから初めて山登りの世界と接触した。そして最初、恩さんの手をとつたのは既に芦屋で岩の味を知つていた同じクラスの香月とか檀といった甲南ボーイ達だつた。大正十五年のことである。

処で、ホームグラウンドの芦屋では、どのチームもナイフエッジも猫のように登り降りしたこの連中も、漸く青年期に入つた許りなので、それまでは遠出をしたことがなかつた。大正十五年の夏、恩さんを交えた甲南ボーイ達は生れて初めての日本アルプス入りをして、燕、槍ヶ岳を縦走した。結局実現は出来なかつたが、穂高行も計画の中にあつて、出発前には「藤木先單の御宅に厄介になつて穂高に就いての知識を得ることに懸命だつた」（甲南高校山岳部報創刊号）。

恩さんは仲々凝性だつたが、この日本アルプス処女行では、夜間撮影に熱中して、当時山などに持ち歩く人の少なかつたマグネシウムで、皆を大いに閉口させたらしい。梓川の寒い河原に皆を並ばせて、何度やつても点火せず、その一幕は結局失敗に終つたが、天幕に引上げてからも、マグネシウムの効能について専門知識？を長々と開陳してゆずらなかつたという。

愿さんが初めてスキーを履いたのも、大正十五年の暮のこと「仲間と早く練習せずんば、優秀なる登山は不可能なり」と「最初はただ履き方の練習のため、二回許り六甲ゴルフリンクスに出掛けた。明けて昭和聖代正月三日より兵庫県下、氷の山の麓の鉢伏方面へ練習に出掛け、冬学期になると、何事にも熱心なる愿はしばしば学校をさぼりスキー場に出席した……今日はクリスチャニアを練習せり、明日はテレマークを復習せん」(甲南高校山岳部報告二号、香月慶太氏)と大いにつめ込んで勉強した。

昭和二年、愿さんにとっては高校二年目の夏が来た。一年間芦屋でみづちり岩登りの経験を積んだ愿さんは、心秘かに期する所があつて、仲間の烏帽子、槍ヶ岳行や南アルプス組に加わらず、穂高行を発表した。

夏に皆と計画して果さなかつた穂高行だつた。しかし今回の目的は月並な縦走ではなく、二年前に早大一行によつて初登攀が行われ、それ以来どのパーティも通過した実績のない北穂高の滝谷であり、また四年前に慶応の人達が初めて登つた小槍であつた。

昭和二年暮発刊の甲南高校山岳部報創刊号はまるで、伊藤愿、単独行の記念号と云つても良いものだつた。もつとも編集責任者の愿さんは、石川欣一氏や藤木九三氏から原稿を御願ひしたりして、部報を世に出すために、大いに工夫もしたし、苦

勞をなめたらしい。しかし、改造や中央公論等の月刊雑誌が五拾銭の時代に、一地方高校の登山報告が定価を堂々と八拾銭と謳つて、大阪、神戸の書店に並べられ、しかも大いに買手がついたのだから、今日考えると時代も若かつたし、愿さんのように情熱とアンビションに燃えた若者に応える場所は、山にも世の中にも何時でも用意されていたわけだ。

滝谷を独りで登り、槍の肩に廻つて、小槍のトラヴアースに、単独行を記念する一本のハーケンを打込んだ愿さんは、まだまだ力が余つて「ちようど槍の肩にいた、山の親友、水野祥太郎君を誘ひ、何処かに出掛けようとした。その矢先、穂高の遭難を知つて」、屈強な二人は今田重太郎に頼まれ、「重太郎を先頭に、雨の穂高を人夫三名、鮮人二名と走り出した。南岳の三角点で時計を見て驚いた。殺生小屋から南岳まで、普通、二、三時間の行程を、四十二分で飛ばして来たのだ。ちよつと休んでまた駆け出した。」

この単独行は、大げさにいわして貰うなら、伊藤愿の名前を天下に馳せることになり、その年の秋には、大阪の放送局は、この高校二年の若者に、「厳肅なる山の姿と犠牲者」なる講演を依頼して、放送した。放送局としても愿さんが年は若い、一かどの大人の風格を備えていたればこそ、安心して依頼したのだろうが、その愿さんが内心に秘める所はまだまだガムシヤラな青春の情熱であつたに相違なく、さきに述べた甲南高校山

岳部報に、愿さんは、その奔放な気持を次のハンス・モルゲンターラーの詩に托して謳っている。

「有難いことに、若い時には気軽なものだ。私はしばしば一人で出掛けた。それが軽はずみだつて？　そういう君の言葉こそ軽はずみじゃないか。」

昭和三年の春、愿さんは初めて積雪期の日本アルプス―槍穂高を訪れた。しかも二回に亘つて、初めは、今田重太郎と二人で、槍ヶ岳を極め、第二回目には甲南の仲間と、再び上高地に入り槍ヶ岳、前穂高を登っている。

ところで重太郎と槍ヶ岳をすませて、更に濁沢にスキーを乗り入れた愿さんは、間もなく、しかもごく身近かなところで、登山界を震撼させる大事件が起こるなぞとは、予想もしなかつたに違いない。愿さんの手記を次に借りよう。「濁沢のスキーデポからプリズムで眺めると前穂高北尾根の第五峯に四人の姿が見えた。……自分達は北穂高に向つたが濃霧で引返しスキーデポで休息していると、慶応の人達が三人降りて来るのに出遭い、大島亮吉氏の遭難を知つた」。

北アルプスの積雪期の初登頂は、大かた大正十年から十四年の間に行われているが、(山岳第三十年第二号、日本山岳会三十年、黒田孝雄氏)この時代を大島亮吉氏の名前と離して考えることは、まず不可能であろう。

私は愿さんが当時の登山界第一線の槍舞台であつた穂高で、

この高名な登山家の劇的な結末に、偶々立会人みたいな立場におかれたことは、それまではただガムシヤラにひたむきに岩を攀じスキーを滑らせていた彼に、複雑な感銘と教訓を与えずにはおかなかつたものと考ええる。それは愿さんにどういふ心境の変化をもたらしただろうか？

最近加藤泰安君から聞いたのに次のような話がある。昭和三年の夏、同君がまだ中学の四年か五年だつたか、ともかく濁沢にキャンプしていた。ひどい雨続きで閉込められていた或る日の夕、上の方でホーイ、ホーイと調子外れの呼び声が旺んに聞えた。面倒なので外に出なかつた処、間もなく霧雨の中から肩巾の広い男が姿を現わして、会いざまに、初対面の泰安君に向つて「君は万国山岳救援信号を知らぬのか」(注、ドイツ、オースタリー山岳会制定になる)と叱りつけた。それが愿さんであつた、とそこまで話して、私達は、思わず声を出して笑つてしまつたが、自分でそれを信ずる正論は押し通さずにはおかなのだが、そのやり方が少し野暮たくて如何にも稚氣があるので、結局誰もがそのいい分を通させてしまふ、といった若い当時の愿さんの面目がありと眼に浮ぶような話だつた。

しかし、この話を思出すたびに、私は、昭和三年の穂高行と相前後する頃から、愿さんが、パウルケの「アルペンの危険」をドイツ語辞書と共に座右の書として、肌身離さず持ち歩くようになり数々の山の洋書と取り組んで、内面的な山の世界の勉

強に転じ初めた事実を併せ考えないではいられない。誠に、山を初めて、早くも三年に、愿さんは若さ一本、槍の単独行やただのレコードメイキングに倦き足らぬ心境に入り初めたようである。それには愿さんが生得の独創的なものへの趣向や登山界一般の激しい進展からの刺激もあつたろうが、大島亮吉氏の遭難が愿さんの心に、登山界の過去を将来とわけ距てる象徴的な事件として、時と共に深く印象されて行つたのではないか、愿さんの登山求道に転機的な影響を与えたのは大島氏の悲劇ではなかつたのか、しかとした立証も持たずに私は何となく、こうした解釈にとらえられる。

春の槍、穂高から帰つた愿さんは、五月に学校をサボつて槍、薬師、立山の大縦走に乗り出した。

RCCの辻谷幾造氏と二人で、数名の入夫を連れて行つたこの縦走は、五月の下旬とはいえ、未だ雪深く埋れた高度三千米の尾根筋に、何日も続けて行動するという意味で、登山の形式内容共に画期的なものだつた。つまり、それまでの積雪期登山が、谷から頂であり、それが終つて一般風潮は積雪期のヴァリエーション・ルートの開拓に進もうという時に、人の念頭になつた積雪期の縦走という方向に眼を向けたのである。

勿論、愿さんのそれからの山登りは、この形式の追求に終つてゐるのではない。昭和四年五月、京大の高橋健治、西村格也両氏と行つた雪の早月尾根、同年の夏、私の死んだ兄貴の一郎

と初めて登つたジャンダルムの飛驒尾根、昭和六年十月、京大パーティのリーダーとして鹿島槍カクネ里等。その時代の人達に与えられ、またその人達にしか与えられなかつたヴァリエーション・ルートの開拓の機会を、十二分に鑑賞享受して、実績を後世に残している。しかし愿さんの登山遍歴に素晴らしい開眼の機会を与えたのは、今述べたスポーティーな新登路の開拓を通じてではなくて、昭和五年五月の雪の縦走ではなかつたろうか。これについては、私はかなりの確信を持つて、そうだといえる。というのは、愿さんの年代記もここまで来ると、私自身も年令的に成長して、山の世界を通じて、愿さんと直接に接触し始めるところまで来るからである。大縦走から帰つた愿さんが、一つの宿命的な課題に取憑かれたことを、山岳部のルームに群がる私達餓鬼連にも知らされるようになった。課題というのは——ビヴァークの問題だつた。縦走してわかつたことは、夏小舎が使える場合があること、また、突発の吹雪に強制露営を余儀なくされる危険があること、これに対処するには、軽量で嵩の張らない装備が当然必要になつてくるのだが、もとよりナイロン等は夢にも浮ばぬ時代のことだから、当時考へ得る最良、最軽の防備といえ、ツェルトザックと毛皮の寝袋の二つにつきていたといつて良い。それでは、ツェルトザックという限られた防備で、どの程度の安全が保証されるだろうか。さてこの疑問を裏に返せば、高所の気象とそれが人体に与える

影響はどんなものかという問題が提起される。

パウケルの「山岳の危険」からその一章を訳出して雪崩に取り組んでいた愿さんの研究心の鋭きは、甲南後期から京大初期にかけて、山岳気象と雪中露営の問題に向けられた。

甲南高校山岳部報第二号の「アルペンクリマに就いての一断片」、関西学生山岳連盟創刊号の「雪中露営の諸問題」、この二つの労作は、愿さんが沈潜していた山の世界の最も重要な断面を物語る。愿さんよりも、高校の年輪で一廻り若かった私達が、昭和四年頃から、春の横尾や岳川に天幕を張つて、誠に無味乾燥な気温や湿度をノートする、気象台ゴッコをやらされたのも、この時代の愿さんの情熱の発露であつたらう。

しかし愿さんが、ビウアークや気象の問題に熱中している中に簡単な装備で高所の雪に、安全に長時間滞在出来るならば、冬山の規模を縦にも横にも、素晴らしく深く掘ることが出来る筈だという啓示に到達したとしても、それは全く論理的な結論であらう。

私は愿さんのビウアークに対する異常な関心の中に、当時のエヴェレスト登山の中心問題、即ちノース・コルより高所に二つ目の天幕を張ることが出来るか——という問題が投影されていたかどうかは知らない。しかしこの頃からの愿さんの視野の中には海外の大きな山々が浮び初め、京大に入つた愿さんの手に依つて、間もなくパウエル・パウアーの「ヒマラヤに挑戦し

て」の訳本が上梓されたことも、当然の成り行きとして納得出来るのである。

「ヒマラヤに挑戦して」は登山界の注目を浴びたが、その半ばは訳者がその序文で端的に評したように、「これは如何にして、ヒマラヤ遠征を行うかの、新しいテキストブックである」という訳出の実践的意図のためであつた。

昭和六年暮から正月にかけて、京大は、富士山においてわが国最初のボーラーメソッドによる登山を行つた。愿さんが京大三年生の時である。

この時、愿さんは隊長の西堀さんと二人で、富士山頂に寝袋だけで三晩寝た。愿さんとしては、これは雪中露営の一実験であつたろうが、当時誠に勇気の要る試みであつた。しかしそれよりも画期的であたのは、京大パーティの用いた隊員と運搬のリレー式活用だつた。一日に往復できる富士山に、多くの人間と日数を費して行つた京大の行事は、幾多の批評を呼んだがやがて愿さんの手で、主催者側の意図するところがアサヒ・スポーツに発表され、それ以来、極地法は海外遠征へのキャッチ・フレーズともなつた。

登山をはじめからそれを文字通り激しく追求して飽くことを知らなかつた愿さんが、大学を今西さんや西堀さんのいた京都に求めたのは、私には当然のように思えるし、またその人達と共に行つた富士登山は、愿さんの世界をさらに高い高原に持

つて行くための梯子のような役割をしたことと思う。

その新しい世界の彼方には、ヒマラヤがその細かい氷のひだをキラキラさせて輝いていたことであろう。

早くもその当時、その氷のひだを最も確かな眼で、見初めた人達の一人であつた愿さんは、残念ながら、遂にそれに手をもつて親しく触れることなしに他界した。

私は愿さんと余りに親しかつた故に、登山家としての愿さんの足跡を記す場合に均衡を失しておらぬかとそれを非常に怖れる。しかしそれにも拘らず私は筆をおく前に、友人加藤泰安君から聞かされた、今西さんの次の述懐を、愿さんにとつては、山の先輩であり、良き友人でもあつた今西さんの次の言葉を同氏の許可を待たずして、ここに結びの言葉として引用する不遠慮な衝動を控えることが出来ない。

「新しい形式が極地法でなければならぬことは、自分達にも良くわかつていた。しかし、如何に実現するか、これについての具体案を示して実行に移したのは、誰あろう愿だつた。自分達が愿から教えられたところはまことに多い。」

(一九五七年二月二十五日鎌倉にて)

伊藤 愿 氏 略 歴

昭和五年十二月 日本山岳会入会、会員番号一二六五
昭和三十一年十一月二十七日死去

会 務 報 告

一九五六年四月—一九五七年三月

◇四月役員総会 四月十一日図書室。出席者別宮会長、日高副

会長、理事沼倉、成瀬、金坂、入沢、渡辺、今村、交野、折井
委員太田、山崎、評議員藤木、沼井、岩永、監事石原。

▽議事および報告

- 一、昭和三十一年度通常会員総会附議事項。
- 二、昭和三十一年度収支決算、三十一年度収支予算報告
- 三、山岳五十年の件

◇通常会員総会 四月二十一日体協会議室。

- 一、三十年度事業報告
- 二、三十年度収支決算報告。三十一年度予算附議可決。
- 三、新潟、静岡、東京各支部報告
- 四、三十一年度理事として小原勝郎、折井健一、山崎安治、太田敬、辰沼広吉、村山雅美、千谷壮之助、金坂一郎、村木康益、山田二郎、松丸秀夫、大塚博美、徳久球雄、石坂昭二郎、羽島肇の十五名を選任、評議員会の推挙により石原憲治、諸岡一次の二名を監事と決定した。なお小原、太田、折井、金坂、辰沼

の五名は常務理事に選任。
五、マナスル隊のサマ事件について。

◆五月役員総会 五月九日図書室。出席者別宮会長、日高副会

長、理事折井、金坂、太田、石坂、羽鳥、徳久、松丸、山崎、
評議員沼井、岩永、神谷、藤木、村井、監事石原、

▽議事

- 一、新役員事務分担を次の通り決定、総務渉外（小原、折井）
財務経理（太田、羽鳥）、指導（辰沼、山田、大塚、石坂）、編
集、山岳会報（山崎）、山日記（松丸）、集会（村山、徳久）、
研究（村木、金坂）、支部（折井）、国体（千谷、金坂）、図書
（徳久）

二、新評議員に渡辺公平、成瀬岩雄、入沢文明三氏を推薦、任
期は三十一年度一杯。

三、支部規定案の件

▽報告

- 一、信濃支部技術講習会の件
- 二、ウェストン祭の件
- 三、木暮理太郎氏十三回忌の件
- 四、準会員の件
- 五、月例会計報告

◇六月役員総会 六月十三日図書室。出席者別宮会長、日高、

松方副会長、理事太田、折井、金坂、石坂、羽鳥、徳久、山

崎、評議員沼井、神谷、岩永、成瀬、渡辺、監事石原、諸岡

一、▽議事および報告

一、東北岳連の件

二、本会の土地建物の件

三、木暮氏十三回忌の件

四、国鉄主催夏山打合せ会の件

五、ウエストン祭の件

六、文部省の野外活動に関する安全指導のパンフレットに関する件

七、マナスル登山隊の件

八、月例会計報告

◇七月役員総会 七月十八日図書室、出席者別宮会長、日高、

松方副会長、理事折井、千谷、松丸、太田、村山、山崎、評議

員沼井、村井、岩永、神谷、渡辺、藤木、島田、監事諸岡、石

原

▽議事および報告

一、ウエストン祭の件

二、夏山と高原展の件

三、山岳五十年の件

四、月例会計報告

五、支部規定決定の件

六、マナスル隊帰国歓迎会の件

七、体協敷地の件

◇九月役員総会 九月五日図書室、出席者、日高副会長、理事

折井、太田、金坂、千谷、羽鳥、徳久、山崎、評議員沼井、岩永、神谷、渡辺、成瀬、監事諸岡

▽議事

一、マナスル記念切手発行祝賀会の件

二、全国支部長会議の件

三、全岳連の全国登山大会の件

▽報告

一、オリンピック街頭募金の件

二、マナスル隊帰国後の状況

三、静岡国体の件

四、月例会計報告

◇十月理事会 十月十七日図書室出席者、日高副会長、理事太

田、折井、金坂、石坂、徳久、松丸、辰沼、山崎、評議員渡辺、成瀬、監事諸岡、石原

▽議事

一、国体委員選出、牧野、折井、渡辺、金坂、千谷の五氏を選

任

二、十一月三日マナスル登山隊顕彰式の件

三、ヒマラヤ委員会設置の件

会務報告

▽報告

一、九州支部設置の件

二、学生部の件

三、五輪基金募金の件

四、静岡岳連の件

五、月例会計報告

◇十一月役員総会

十一月二十一日図書室、出席者、日高副会

長、理事小原、折井、辰沼、金坂、山崎、松丸、村木、大塚、

石坂、徳久、羽鳥、評議員神谷、岩永、成瀬、八沢、藤木、監

事石原、支部長木津、三井

▽議事および報告

一、山案内書の件

二、第三次マナスル隊装備処理の件

三、中共体育総会と連絡の件

四、上高地ダム建設の件

五、九州支部設置の件

六、第十二回国体準備の件

七、月例会計報告

◇十二月役員総会

十二月十七日図書室、出席者、別宮会長、

日高、松戸副会長、理事辰沼、折井、石坂、羽鳥、金坂、松

丸、山崎、小原、評議員成瀬、渡辺、沼井、村井、神谷、監事

石原、模名誉会員、高山信濃支部長

▽議事

一、上高地ダム建設について

◇一月理事会 一月二十二日図書室、出席者、別宮会長、松方、

日高副会長、理事折井、辰沼、太田、石坂、小原、山崎、徳

久、金坂、村木、羽鳥、徳久、監事諸岡

▽議事

一、九州支部の件

二、ヒマラヤ委員会設置の件

▽報告

一、マナスル隊朝日スポーツ賞授賞および天皇より銀杯ご下賜

の件

二、競技団体会長会議の件

三、静岡国体の件

四、遭難対策の件

五、月例会計報告

◇二月役員総会

二月十四日図書室、出席者、別宮会長、日高

副会長、理事折井、小原、金坂、太田、石坂、徳久、山崎、評

議員神谷、渡辺、沼井、村井、岩永、成瀬、監事石原、

▽議事

一、静岡国体の件

▽報告

一、山岳の件

二、毎日スポーツ賞授賞の件

三、上高地ダムの件

四、会員名簿、月例会計報告

◇三月役員総会 二月十九日図書室、出席者、別宮会長、日高、

松方副会長、理事小原、折井、太田、金坂、村木、松丸、羽鳥、徳久、石坂、山崎、評議員渡辺、神谷、村井、沼井、藤木、監事石原、木津富山支部長

▽議事および報告

一、三十二年度理事推薦の件、別宮、松方、日高、辰沼、小原、折井、金坂、松丸、太田、徳久、村木、大塚、浜野、田島、羽鳥、石坂、山崎の十七名を三十二年度理事に推す。

二、英国山岳会百年祭招待の件

三、ブラザアンド氏歓迎会の件

四、月例会計報告

◇マナスル登頂に成功 槇有恒隊長以下十二名の第三次マナス

ル登山隊は昭和三十一年二月二日、十一日神戸港、羽田より現地に出發四月一日サマのBCより行動を開始、五月九日今西寿雄、ガルツエンの二名が、十一日加藤喜一郎、日下田実の二名がそれぞれ登頂に成功した。六月二十二日、七月十一日二隊にわかれ無事帰国。

◇マナスル登山隊帰国歓迎会 八月九日午後五時半から麻布鳥井坂国際文化会館で開催。会員一七〇名が出席した。

◇ウエストン祭 七月十三日前夜祭を松本信大講堂で開き、槇マナスル隊長、日下田隊員の報告、マナスル写真展を開催。十

四日ウエストン碑前祭を行う。

◇全国支部長会議 九月十六日日本会図書室で開催、出席者織田

(山陰)、後藤(山形)、伊藤(福島)、藤島(新潟)、池田(石

川)、三井(山梨)、篠田(関西)、木津(富山)、大宅(静岡)、

沼倉(東京) 本部役員別宮、日高、松方、岩永、石原、諸岡、

渡辺、辰沼、神谷、沼井、成瀬、山崎、村井、太田、松丸、千

谷、金坂、藤木

◇一七一回小集会 七月二十六日体協会議室

ヒマラヤの話 深田久弥氏

◇一七二回小集会 八月三十日体協会議室

南極観測について 西堀栄三郎氏

◇一七三回小集会 九月二十八日体協会議室

アメリカの山々 アーノルド氏

◇一七四回小集会 十月二十五日体協会議室

南極観測隊の装備 木下是雄氏

◇一七五回小集会 二月二十六日体協会議室

山の音楽 辻 莊一氏

◇年次晚餐会 十二月十五日神田山ノ上ホテルで開催

◇ブラザト夫妻の来日 ネパール首相タンガ・ブラザト夫妻は

十月上旬来日、本会では十月十六日高輪閣にて歓迎会を開催。

◇ギャルツエン来日 マナスル登頂に活躍したサード、ギャルツエン・ノルプは本会の招待により夫人および令息同伴で九月十七日来日、鎌倉、奈良、京都に遊ぶ。本会では十月十一日神田山ノ上ホテルで歓迎会を開いた。十月十三日帰国

社団法人日本山岳会定款

(昭和二十九年四月二十四日改正)

第一章 総 則

第一条 本会は日本山岳会 (Japanese Alpine Club. 略称 J. A.C.) と称する

第二条 本会の事務所は東京都千代田区神田駿河台四丁目六番地に置く

第三条 本会は山岳に関する研究、知識の普及並びに健全な登山の指導奨励をなし会員相互の連絡懇親をはかるとともに登山を通じてあまねく体育、文化並びに自然愛護精神の高揚を図るをもつて目的とする

第四条 本会は前条の目的を達するために次の事業を行う

一、機関雑誌「山岳」、「会報」及び「山日記」その他図書の刊行

二、登山の指導奨励に必要な研究会、講習会、展覧会等の開催

三、登山施設の改善促進その他登山のため適切な事業

四、海外遠征登山の企画並びに実行

五、目的を同じくする内外団体との連絡

六、その他本会の目的を達するに必要な事業

第五条 本会は役員総会の必要と認める地方に支部を設ける、

支部に関する規定は役員総会で定める

第六条 本会は第四条の事業を遂行するため総務、経理、事業、編集、図書、研究、集会、学生等の各部に分けて運営することができる

第二章 会 員

第七条 本会は通常会員、終身会員、賛助会員及び名誉会員をもつて組織する

一、通常会員は本会の趣旨に賛成し本会の定めた入会金並びに会費を納めるものとする

二、終身会員は本会の定めた入会金並びに会費一時金を納めるものとする

三、賛助会員は本会对し特別な寄与をなした者で役員総会が推荐するものとする

四、名誉会員は役員総会が推荐し適当期間適宜方法で本会内に公示し会員の総意を確めた上決定する

第八条 本会の会員となる希望のあるものは会員二名の紹介により入会申込書を提出し理事会の承認を受ける

団体の代表者の資格で入会するものは入会申込の際その旨を明示する

入会承認の通知があつたときは本会の定めた入会金並びに通知を受けた年度の会費を払込む

但し団体の代表者として前代表者を引継ぎ本会の会員となる

うとするときは入会金を払込む必要はない

第九条 会員が退会を希望するときはその旨書面で本会に届出る

第十条 会員は死亡、退会、除名又は本会の解散によつて会員たる資格を失う

団体の代表者として入会した者はその代表者の資格を失つたとき本会会員の資格を失う

第十一条 会員で本会の体面を汚した者もしくは会費滞納甚だしい者は役員総会の決議によつて除名することがある

第三章 役員及び役員会

第十二条 本会に次の役員を置く

一、会長 一名

二、副会長 二名以内

三、理事 二十名以内（会長及び副会長を含む）

四、評議員 若干名

五、監事 二名以内

第十三条 会長、副会長は理事とし会員総会で会員の中から選挙する

理事は入会後満二年以上を経過した会員の中から会員総会これを選挙する

評議員は本会内で適当と認めた会員の中から役員総会これを選出する

監事は評議員会の推挙する候補者の中から会員総会これを選出する

理事は互選で常務理事若干名を選任する

評議員は互選で常任評議員若干名を設置することができる

第十四条 会長、副会長の任期は三年とする、その他の理事の任期は一年、評議員の任期は三年、監事の任期は二年とする但し重任を妨げない

第十五条 役員は任期満了の後でも後任者が就任するまではその任務を行う

役員に欠員ができた場合は前各条によつて補充する

補欠役員の任期は前任者の残存期間とする

前項の場合補充の必要のないときは次の改選まで補充しない

第十六条 本会に顧問若干名をおくことができる

顧問は役員総会の決議により会長が依頼する

第十七条 会長は本会を代表し会員総会及び役員総会を招集しその議長となる、但し会長事故あるときは副会長がこれに代り副会長もなお事故あるときは常務理事これを代理する

理事は会務を掌理し、常務理事は本会の常務にたづさわる評議員は重要会務に参与する

監事は会務を監査する

第十八条 役員総会は会長、副会長、理事、監事で組織し評議員これに出席する

理事会は会長、副会長、理事で組織し常任評議員はこれに出席することができる

評議員会はその必要を生じたときに会長、副会長、常務理事及び評議員出席して開催し名誉会員、監事候補者を推挙その他の重要事項につき役員総会に提案する

時宜により常務理事会又は常任評議員会を開催することができる

第十九条 役員総会又は理事会は当該役員総数の二分の一以上出席しなければ成立することができない

役員総会又は理事会の議決は出席役員の過半数をもつて決定し可否同数の場合は議長の裁決によつて決定する

但し予め書面表決によることを得る旨を定め通告した場合は書面表決をすることができる

第四章 委員及び職員

第二十条 会務を円滑に進行するために委員及び職員を置き会長これを委嘱する

第二十一条 委員は事業各部に属し常任委員及び臨時委員に分つ

常任委員（幹事）は分坦事務を処理する

臨時委員は臨時に設けられる各種委員会を構成する

第二十二条 職員は有給の事務員、書記又は主事とし常務理事の指示により本会事務所図書室の管理並びに文書收受発送そ

の他日常務に従事する

第五章 会員総会

第二十三条 通常総会は毎年一回開く

臨時総会は会長が必要と認めたとき招集する

第二十四条 総会の招集はその開催より十日以前に会議の目的である事項、日時、場所を明示して通告することを要する

総会は会員総会の二十分の一以上出席もしくはこれに相当する処置が施されなければ成立しない

第二十五条 通常総会では会務の報告をする以外に次の事項を議する

一、収支予算及び決算

二、会長、副会長、理事、監事の選挙

三、総会及び定款で総会の権限と決められた事項

四、その他役員総会が必要と認めた事項

第二十六条 総会の議事は出席者の過半数で決定する

可否同数の場合は議長の裁決によつて決定する

予め書面表決によることを得る旨を定めて通告した場合は書面表決をすることができる

第二十七条 本会の定款の変更には会員総会の決議で会員総数の三分の二以上の同意及び主務官庁の認可を必要とする

第二十八条 総会開催に先立ち本会は総会記録係を任命する

第六章 資産及び会計

第二十九条 本会の資産は基本財産、会費、寄附金及びその他の収入で組織する

本会の経費は基本財産から生ずる収入、会費、寄附金及びその他の収入をもつてあてゐる

本会の基本財産は役員総会の決議を経なければ処分することができない

第三十条 本会の会計年度は四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る

附 則

第三十一条 旧定款による役員任期は本定款の成立によりその効力を失う

第三十二条 本会の会務執行に関する細則は役員総会の議決を経て別にこれを定める

支 部 規 定

(昭和三十一年六月実施)

第一章 総 則

第一条 定款五条に定める支部の設立並びに運営は本規定による

第二条 支部の名称は当該支部の所在する地域を明示して「日本山岳会○○支部」とする

第二章 設 立

第三条 支部を設立するためには次の各号に適合しなければならない

一、支部設立区域内の会員もしくは入会手続中の者が二十名以上支部会員たることを同意すること

二、支部設立地域内の会員にして前号に反対する者が同意者の三分の一を超えないこと

三、同一地域内にすでに支部が存在しないか、または当該地域が他の支部地域と重複しないこと

第四条 支部を設立せんとするときは発起人代表者は予め理事会の了解を得た後次の必要書類を会長に提出する

支部設立趣意書

発起人名簿

第三条第一号による同意書

支部規約

支部役員名簿

設立以後一年以上の事業計画書

同予算書

第五条 前条の書類は役員総会の審議に附し、会務遂行上支障がないと認めた場合に支部の設立を承認する

第六条 支部の設立が承認された場合発起人代表者は一月以内に支部設立総会を招集し、第四条の書類を承認して支部を設

支部規定

立する。

支部の設立並びに右書類は「会報」および「山岳」に発表する。

第三章 運 営

第七条 支部には支部役員として支部長一名、委員若干名及び会計監事二名以内をおく

第八条 支部役員は支部会員総会で支部会員の中から選挙する委員は互選により常務委員を選出する

第九条 支部役員の任期は支部長三年、委員一年とするが、重任を妨げない

第十条 支部の経費は支部会員より徴収する支部費その他の収入をもつてあてる

第十一条 支部の会計年度は毎年四月一日に始まり翌年三月三十一日に終る

第十二条 支部長は毎年一回以上支部総会を招集し、事業報告、会計報告、事業計画及び予算の承認を得、支部役員の改選を行うものとする、支部長は右事項を毎年四月三十日まで

に会長に報告するものとする

第四章 解 散

第十三条 支部長は支部会員三分の二以上同意により解散することが出来る

第十四条 解散時の会計決算については支部解散総会の決議に

より支部役員の責任において処理するものとする

第十五条 支部が次の各号のいずれかに該当する場合には会長はこれを役員総会の審議に附して解散させることがある

一、支部が本部の目的に反した事業を行つたとき

二、会計処理上不都合あるとき

三、必要な報告を全く怠つたとき

四、支部会員数が定数以下に甚しく減じ当分増加の見込みがないとき

附 則

第十六条 会報一〇八号（昭和十六年八月）所載「日本山岳会支部規定」及び会報一三七号（昭和二十一年二月）所載「日本山岳会支部規定案」は本規定の実施により廃止する

SANGAKU

The Journal of The Japanese Alpine Club

Vol. LI

Issued in December, 1957

Contents

Recollection of the Manaslu, 1956.....	by Yuko Maki.....	1
The Death of Tartarin (Translated authorized by the publisher through the courtesy of the Italian Alpine Club)	by Gido Rey.....	9
	(Translated by S. Hidaka)	
Journey to the Nepal, 1955.....	by Iwao Naruse.....	47
The Fifty years history of the Japanese Alpine Club	by Tetsutaro Numai.....	58
In Memoriam		
T. Sekiguchi.....	by Tatsumi Shimada.....	103
G. Ito.....	by Jiro Taguchi.....	108
Club Proceedings		117

4 Plates

Editor : Y. Yamazaki

Associate Editors : K. Orii, T. Mochizuki

輝く歴史と大きな信用!

明るく楽しい生活の設計には…

当社の生命保険をご利用下さい



明治生命

東京・千代田・丸の内2の16

電話 (28)0621・0631・0641・0651

A5-2

登山には地図が必要です

それと同じであなたには保険が必要です



社長 太田清蔵



旧第一徴兵
東京・銀座

東邦生命

ガソリンは
アポロ



出光興産

各種板硝子の製造販賣

日本板硝子

本店
支店
工場
研究所

大阪市東区北浜五丁目（住友ビル）
東京・大阪・小倉・名古屋・小樽
若松・四日市・舞鶴
尼崎市 久々知 宇福長

MARUZEN'S OLD BOOKS . . . Mountaineering

- Alpine (The) Journal.** A Record of Mountains.
 Vol. 1 to 61 (No. 282, 285 lack) (1864~1956)
 Vol. 1 to 3 society cloth, Vol. 4 and 5 in half
 Calf and other Vols. as issued..... ¥ 155,000
- Abraham, A.P.** Rock Climbing in Sky. With 30 full-page Illusts., and a map. London, 1908. Med. 8 vo, cloth, pp. xxii, 330..... ¥ 2,100
- Coolidge, W.A.B.** Alpine Studies. with 16 Illusts. London, 1912. Med. 8 vo, cloth, pp. xiii, 307..... ¥ 2,500
- Conway, Sir W.M.** The Alps from End to End. With 100 Illusts. by A.D. M' Cormick. Westminster, 1895. Med. 8 vo, cloth, pp. xii, 403..... ¥ 2,500
- Finch, C.I.** The Making of a Mountaineer: The Alps, Corsica, Mount Everest. with 78 Illusts. London, 1927. Med. 8 vo, cloth, pp. 340..... ¥ 3,000
- Gos, F.** Rambles in High Savoy. translated by F. Kemp. London, 1927. 4 to, cloth, pp. 169, maps..... ¥ 1,500
- Irving, R.L.G.** (Collected by) The Mountains Way: An Anthology in Prose and Verse. London, 1938. 8 vo, morocco, pp. xxii, 656. very fine copy..... ¥ 6,000
- Routledge, H.** Everest 1933. London, 1934. Med. 8 vo, cloth, pp. xv, 390..... ¥ 2,500
- Smythe, F.S.** The Kanchanjunga Adventure. 1st Ed. London, 1930. Med. 8 vo, cloth, pp. 44..... ¥ 3,000
- Whymper, E.** Travels amongst the Great Andes of the Equator. With Supplementary Appendix to Travels amongst the Great Andes of the Equator. 2 Vols. London, 1891-92. Roy. 8 vo, cloth, pp. xxiv, 456. xxviii, 147..... ¥ 2,000

上記の他、山に関する古書・希
 覓書その他を豊富に取揃え御
 来店をお待ちしております。

東京・日本橋

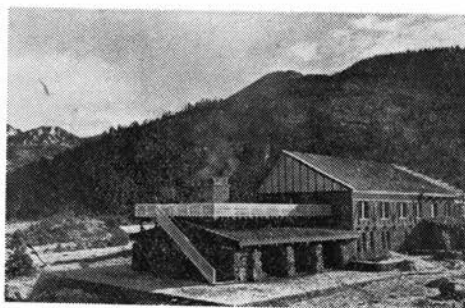
電話千代田(27)2321

丸善

新装なった立山弥陀ヶ原ホテル

1) ホテルの位置

立山弥陀ヶ原高原の中
 央追分標高1900米の地
 点、周囲には立山連峰
 の秀麗なる山姿をめぐ
 らし一望のうちに弥陀
 ヶ原を隔て、富山平野
 と富山湾、能登半島を
 望み風光絶佳。



2) ホテルの施設

純洋室2室 (バス付)
 和室9室、2段ベッ
 ルーム、大ホール、食堂
 浴室の外無料休憩室、
 展望台完備。

3) ホテルの料金(暫定)

宿泊料 洋室1,000~
 1,500円 和室700円
 2段ベッルーム350円
 食堂1食150~500円

4) 交通機関

富山駅(北陸線) ^(電車1時間) 千寿ヶ原 ^(ケーブル9分) 美女平 ^(観光バス50分) 弥陀ヶ原(ホテル)

ホテルその他御連絡

富山市新桜町 立山開発鉄道営業部 (電話 8,536) 東京丸の内国際観光ビル
 富山市牛島 富山地方鉄道営業部 (電話 3,166) 東京事務所 (電話 23 5731)



東京瓦斯株式会社

取締役社長 **本田 弘敏**
取締役副社長 **安西 浩**

東京都中央区八重洲1の3
電話(28)0111-10・0121-10・1121-10



心臓を強くする…

アヂスチン

(特許166801号)

アヂスチンは心臓の筋肉に直接作用して、心臓の働きを強くし、血液の循環をよくします。新陳代謝を高めるので、どうき、いきぎれを除き、疲労の防止と回復に役立ちます。

どうき
いきぎれ

50錠 120円 100錠 200円

山とスキー用防寒衣類は

羽毛製品専門の **東洋羽毛へ**

優秀なる工場施設と卓越せる技術による製品は「マナスル登山隊」を初め南極へ又全国登山スキー関係並に諸外国の同好者より御好評を賜っております

製品： スリーピングバッグ・簡易寝具・羽毛服・羽毛外套
羽毛チョッキ・手袋・其他羽毛製品一般

東洋羽毛サービスセンター

本社 東京都中央区銀座2-4

電話 (56) 3 5 4 4

工場 横浜市港北区菊名町7-5

電話神奈川 (4) 0 0 9 4

SLEEPING-BAG. EIDERDOWN-JACKET.

EIDERDOWN-VEST. OVER-MITTEN.

&

ALL KINDS OF FEATHER GOODS

TOYO UMŌ SERVICE CENTER

NO 4-2 CHOME GINZA CHUŌ-KU

TOKYO JAPAN

スキー用品

Constant
K.S.C.

金沢の特製優良品多数陳列
内外一流品富豊取揃
カタログ進呈

日本信販加盟店

株式会社 **金沢**



東京神田小川町電停前

TEL (29) 2234 2235

卸部 2231 2232 2233

冬山とスキー用具の...

秀山荘



ケチな店が逸品揃い

客もクマみえたらうが
多い

カタログ出来!

東京・中央区・八重洲口 28-8456-

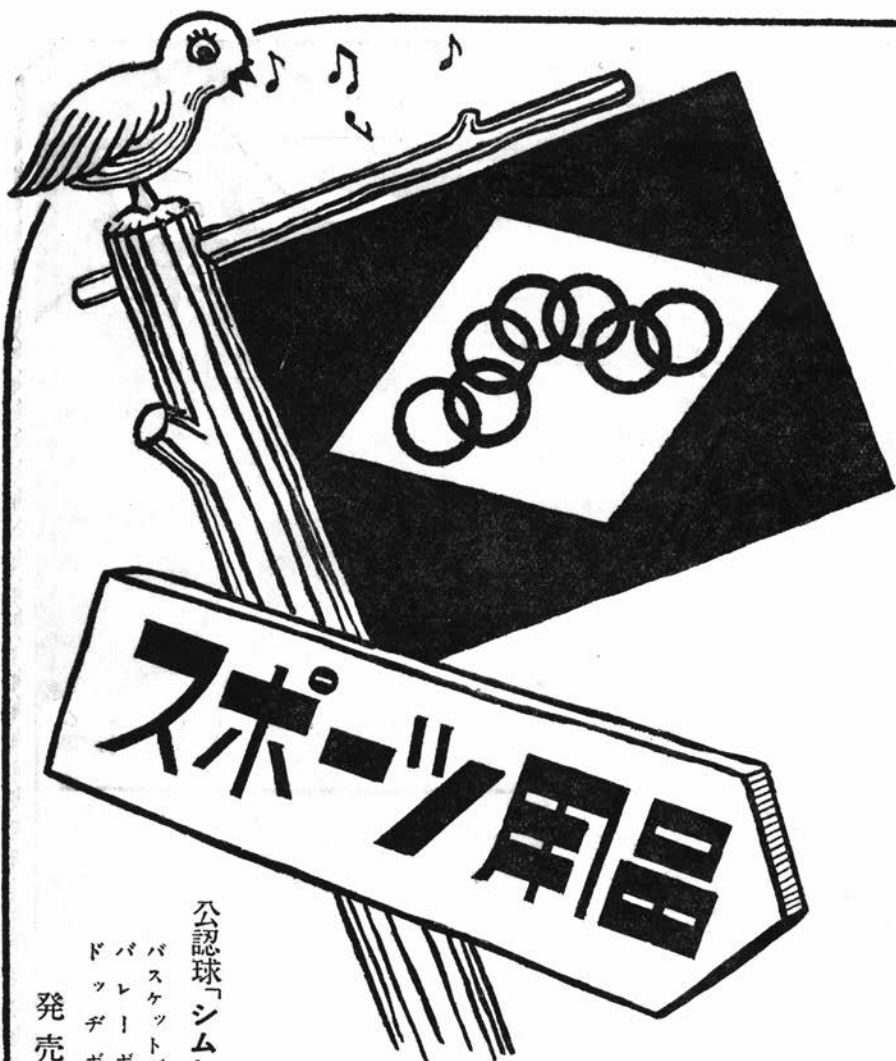
合宿 のカレーライスに

たった5分でおいしくできる
即席エスビーカレーを



マナスル登山隊愛用

電話 (67) 0526



公認球「シムレス」
 バスケットボール
 バレーボール
 ドッヂボール
 発売元

タチカラ

本店、小売部 東京都中央区日本橋通三丁目八番地
 TEL 千代田 (27) 3318・3319
 工場、営業所 東京都台東区松葉町七番地
 TEL 浅草 (84) 6868
 根岸 (87) 8003

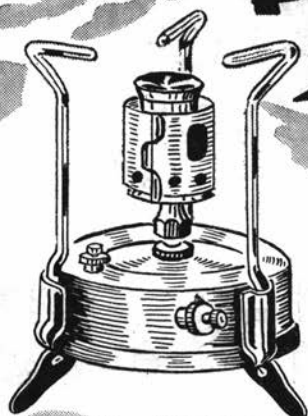
ホープ印

完璧

登山用具
ヒマラヤ登山隊・及
南極探険隊御使用品



マナスル ストーブ



マナスル
アルペンローゼ
アルピニスト

ピッケル



全国有名運動具店及デパートにてお求め下さい

飯塚運動具製造株式会社



東京店 大阪店 神戸店 福岡店

東京都中央区銀座西2の5 大阪市北区老松町3の13 神戸市生田区三宮町1の32の1 福岡市因幡町27
日新ビル1階 福ビル2階

電話 (56) 3600 電話 (34) 2180 電話 (2) 5の51 電話 (4) 1344
振替 東京 113657 振替 大阪 68763 振替 神戸 21352

片桐・キスリング型ルックザック

キスリング型ザック

No.3 小型	1.65×2.3	¥ 2,500.00
No.4 中型	1.8×2.5	¥ 2,600.00
No.5 大型	2.0×2.8	¥ 2,800.00
No.6 特大	2.2×2.8	¥ 2,900.00



ビッケル札幌門田作

尺モノ	¥ 3,500.00	尺1寸モノ	¥ 3,600.00
リング	¥ 150.00	皮ザック	¥ 300.00
アイゼン門田作 各号共八本爪	¥ 3,500.00		

放出羽根入囊袋入荷しました

山とスキー用具は全般に御用命承ります。

東京都文京区

湯島天神町三十九

片桐

電話 下谷 (83) 1794 番

片桐盛之助

ヒマラヤ から



登頂に
観測に
御伴致しました。

：ナイロン

：ビニロン

特殊軽量テント

冬用テント

登山・スキー装備

南 極 へ



専門メーカー

細野テント

千代田区神田須田町

2-23

TEL (25) 6428

「山岳」投稿規定

一、投稿は誰でも自由である。日本山岳会員である必要はない。

一、原稿の採否は山岳編集委員会で決定する。

一、原稿は返却しない。

一、研究並に紀行には、その概要を付けること。

一、紀行は成るべく概念図を添付すること。

一、写真は光沢印画紙に焼付け必ず説明を付けること。

一、地図、人名、数字、外国語は特に明確に記し、特殊な地名、人名等には必ず振仮名を付けること。

一、編集者は原稿の一部を削除または訂正することがある。

一、校正は編集者に一任されたい。

送り先 東京都千代田区神田駿河台四ノ六

日本山岳会「山岳」編集部

編集委員

山崎安治
望月達夫
折井健一

一九五七年十二月一日印刷
一九五七年十二月十日発行

定価 五〇〇円

東京都千代田区神田駿河台四ノ六

発行所 日本山岳会

電話神田(25)八九五二番

日本山岳会内

編集兼
発行者 山崎安治

東京都港区赤坂溜池五

印刷者 株式会社 技報堂

東京都千代田区神田駿河台二ノ一

発売所 株式会社 茗溪堂

電話神田(29)二〇二二番
六五二二番
振替口座東京二四七二三番

本誌掲載の記事写真及び地図の無断転載を禁ずる。

PRICELIST 進呈

登山スギ一具

和久

東京 中央区日本橋江戸橋1-7 TEL(27) 7686

REG. NO

121844

121845

121850



REG. MARK.

Caravan Shoes

日本山岳会 全岳連推薦 海外遠征各隊 各登山団体 指定使用

東京正価 綿 1600

ナイロン 2000

Caravan Ski Shoes

耐寒性綿ゴム製の實用靴、郵政省外各スキー団体指定、倶楽部の備付、貸靴に好適。

大 1400

小 1300

Caravan Snow Shoes

ナイロン用布ビニパイル絨うら付、防寒防水性の最高級雨雪靴。

2300

Caravan After Shoes

濃紺ナイロン用布、ビニパイル、Y.K.K. ファスナー併用の軽快な雨雪靴。

1700

Caravan Hostel Shoes

日本ホステル協会指定、軽くて、滑らないハイキング用の短靴。

650

Caravan Air Mat

海外遠征各隊使用の小型マット、長さ3尺、巾1.5尺 旅行用にも快適。

1200

Caravan Sole

登山靴用、スキー靴用各種、国産最高級品。

山靴用 720。スキー靴用 550、同6足どり 1750

Caravan (Toyo-umo) Jacket

東洋羽毛社特製 裏表共特殊ナイロン最高羽毛使用、登山、スキーは勿論ゴルフ釣等に快適。

6500

San Sei Sha Co. Ltd.

株式会社 山 晴 社

東京都中央区銀座三ノ四
大倉別館 電話 (56) 6151-9

The Journal of
The Japanese Alpine Club

S A N G A K U

Vol. LI 1958